# 三坂七尾遺跡

福岡県前原市大字三坂(みさか)字七尾(ななお)所在遺跡の調査報告

前原市文化財調査報告書

第77集

2001

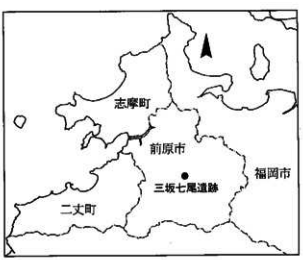
前原市教育委員会

# 三坂七尾遺跡

福岡県前原市大字三坂字七尾所在遺跡の調査報告

前原市文化財調査報告書

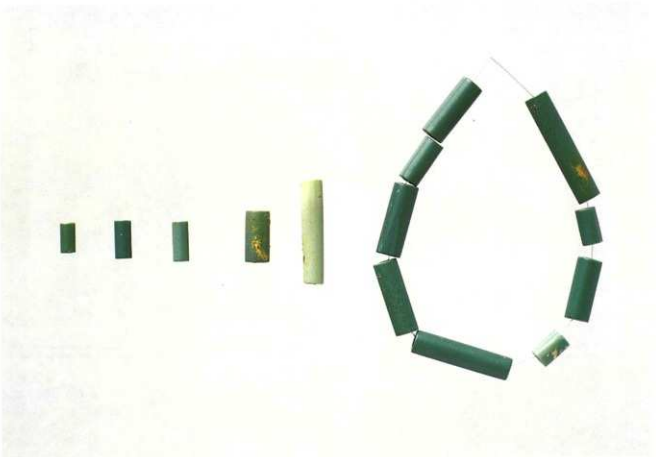
第 77 集




2001

前原市教育委員会

a．三坂七尾遺跡第２次調査地点全景



b．甕棺墓出土鞆玉製管玉

# 序

前原市では、農業および農村の健全な発展を期して、農業用排水の水質保全とその施設の機能維持、農村生活の環境改善を図るため農業集落排水事業が実施されております。

しかし、市内に500箇所を超える文化財包蔵地を有し、わが国でも屈指の文化財密集地帯であるため、周知の文化財包蔵地内で工事が実施されることも多く、施行にあたっては事前に関係部局と協議を行いながら文化財の保護に努めるとともに、止むなきにいたった場合は事前の発掘調査を実施し文化財の記録保存に努めております。

今回報告します三坂七尾遺跡では発掘調査の結果、弥生時代の集団墓地が発見され、多くの甕棺墓や、副葬品などが出土したことから、市民の高い関心を集めることとなりました。

本書が当地の歴史・文化の解明に向けての学術資料、あるいは文化財保護思想の啓発・育成に活用されることを願ってやみません。

平成13年3月31日

前原市教育委員会
教育長　三　嶋　利　彦

# 例　　言

1．本書は、福岡県前原市大字三坂字七尾719番地において平成11年度に実施した三坂七尾遺跡の第2次発掘調査成果の報告書である。

なお、昭和56年に県営雷山地区圃場整備事業に伴い行なわれた同遺跡の第1次調査成果も本書に収録している。

2．本書に使用した遺構実測図は第2次調査は岡部裕俊（前原市教育委員会）が作成し、遺物実測図は、甕棺を牟田華代子（前原市教育委員会）が、祭祀土器、石器を岡部が、鉄器、ガラス玉を島影やよいが中心となって作成し、製図は友池真由美、岡部、牟田が分担して行なった。

本書に使用した1／5,000周辺地形図は1998（平成10）年作成の前原市都市計画図（1／2,500）により作成した。

3．遺構写真は岡部が撮影し、現場の空中写真は（有）空中写真企画（代表 壇睦夫）に委託した。遺物写真は主に牟田の撮影による。

4．本書の執筆はⅡ－(3)を比佐陽一郎、片多雅樹（福岡市埋蔵文化財センター）が、Ⅲを伊崎俊秋（福岡県教育委員会）が執筆し、Ⅰ、Ⅱ－1・2を主に岡部が、Ⅱ－3、及び甕棺観察表を主に牟田が分担して行なった。

本書の編集は岡部、牟田が協同してこれにあたった。

# 本　文　目　次

Ⅰ．はじめに …… 1
1．調査にいたる経過 …… 1
2．調査の組織 …… 1

Ⅱ．第２次調査 …… 2
1．遺跡の位置と環境 …… 2
2．調査の記録 …… 2
(1) 調査地点の地形と調査概要 …… 2
(2) 弥生時代の遺構と遺物 …… 2
① 甕棺墓 …… 2
② 土壙墓 …… 34
③ 祭祀土坑 …… 40
(3) 古代～中世の遺構と遺物 …… 43
① 土壙墓 …… 43
② 土坑 …… 43
③ その他の遺構、遺物 …… 46
(4) 三坂七尾遺跡出土ガラス資料の材質調査 …… 47
3．小結 …… 49

Ⅲ．第１次調査 …… 54
1．はじめに …… 54
2．弥生時代の遺構と遺物 …… 57
(1) 竪穴住居 …… 57
(2) 土坑 …… 60
(3) 溝 …… 78
(4) その他 …… 80
3．古墳時代の遺構と遺物 …… 85
(1) 竪穴住居 …… 85
4．小結 …… 86

# 図　版　目　次


図版１ａ．三坂七尾遺跡第２次調査地点全景（上から）
　　ｂ．同上（西から）
図版２ａ．１号墓、１号祭祀土坑
　　ｂ．２号墓
　　ｃ．３・４号墓
　　ｄ．３号墓
　　ｅ．４号墓
　　ｆ．５・６号墓
図版３ａ．７号墓
　　ｂ．８号墓
　　ｃ．７・８号墓、４号祭祀土坑
　　ｄ．９号墓
　　ｅ．10号墓
図版４ａ．11・12号墓
　　ｂ．11号墓（下甕）
　　ｃ．13号墓
　　ｄ．14号墓
　　ｅ．15号墓
　　ｆ．16号墓
　　ｇ．17号墓
図版５ａ．18号墓
　　ｂ．19号墓
　　ｃ．20号墓
　　ｄ．21号墓
　　ｅ．22号墓
　　ｆ．22号墓
　　ｇ．23・24号墓
　　ｈ．24号墓
図版６ａ．23号墓
　　ｂ．23号墓甕棺内碧玉製管玉出土状況
　　ｃ．25号墓
　　ｄ．26号墓
　　ｅ．28号墓
図版７ａ．28～30号墓
　　ｂ．31号墓
　　ｃ．32号墓
　　ｄ．33・34号墓
図版８ａ．32・34号墓周辺
　　ｂ．33号墓墓壙半裁状況
　　ｃ．33号墓甕棺完掘状況
　　ｄ．34号墓
　　ｅ．35号墓
図版９ａ．36号墓
　　ｂ．38号墓
　　ｃ．39号墓
　　ｄ．43号墓と７号祭祀土坑
　　ｅ．44号墓
　　ｆ．46号墓
　　ｇ．47号墓
　　ｈ．48号墓
図版10ａ．51号墓
　　ｂ．52号墓
　　ｃ．55号墓
　　ｄ．１号祭祀土坑
　　ｅ．２号祭祀土坑
　　ｆ．３号祭祀土坑
　　ｇ．４号祭祀土坑
図版11ａ．４号祭祀土坑土器出土状況近景
　　ｂ．５号祭祀土坑
図版12ａ．６号祭祀土坑
　　ｂ．同上土器出土状況①
　　ｃ．同上土器出土状況②
　　ｄ．同上土器13出土状況③
　　ｅ．同上西土層断面
図版13ａ．54号土壙墓
　　ｂ．55号土壙墓
　　ｃ．１号土坑
　　ｄ．２号土坑
図版14　甕棺（Ｋ４・Ｋ６・Ｋ７・Ｋ10）

図版15　甕棺（K12・K15・K19・K26）
図版16　甕棺（K17・K28・K29）
図版17　甕棺（K１・K８・K32・K34・K35）
図版18　甕棺（K２・K３・K５）
図版19　甕棺（K９・K11・K13）
図版20　甕棺（K14・K16・K18）
図版21　甕棺（K20・K21・K22）
図版22　甕棺（K23・K24・K33）
図版23　甕棺（K25・K31・K36・K38）
図版24　甕棺調整痕
図版25　その他の遺物
図版26　祭祀土坑出土土器③
図版27ａ．三坂七尾遺跡全景（北から）
　　ｂ．１号住居・８号土坑等（東から）
図版28ａ．１号住居（東から）
　　ｂ．２～４号住居（東から）
図版29ａ．１号土坑（西から）
　　ｂ．４～６号土坑（北から）
　　ｃ．16号土坑（北から）
図版30ａ．18号土坑（西から）
　　ｂ．19号土坑（北から）
　　ｃ．20号土坑（西から）
図版31　第１次調査地点出土土器①
図版32　第１次調査地点出土土器②
図版33　第１次調査地点出土土器③
図版34　第１次調査地点出土土器④

# 挿　図　目　次

第１図　三坂七尾遺跡の位置と周辺の主な遺跡等（1/50,000）…… 3
第２図　三坂七尾遺跡周辺の地形（1/5,000）…… 4
第３図　三坂七尾遺跡第２次調査地点遺構配置図（1/150）…… 5
第４図　１～４号甕棺墓実測図（1/30）…… 9
第５図　５～８号甕棺墓実測図（1/30）……10
第６図　９～13号甕棺墓実測図（1/30）……11
第７図　14～17号甕棺墓実測図（1/30）……12
第８図　18～21号甕棺墓実測図（1/30）……13
第９図　22～26号甕棺墓実測図（1/30）……14
第10図　27～32号甕棺墓実測図（1/30）……15
第11図　33～38号甕棺墓実測図（1/30）……16
第12図　23・31・33号甕棺出土碧玉製管玉実測図（2/3）……19
第13図　４・６・７・10号甕棺実測図（1/6）……21
第14図　12・15・17号甕棺実測図（1/6）…22
第15図　19・26・28・30号甕棺実測図（1/6）……23
第16図　27・29・32・34・35号甕棺実測図（1/6）……24
第17図　１・２・３・５・８号甕棺実測図（1/12）……25
第18図　９・11・13・14号甕棺実測図（1/12）……26
第19図　16・18・20・21号甕棺実測図（1/12）……27
第20図　22・23・24・33号甕棺実測図（1/12）……28
第21図　25・31・36・38号甕棺実測図（1/12）……29
第22図　39～44号墓実測図（1/30）……35
第23図　45～48号墓実測図（1/30）……36
第24図　49～52号墓実測図（1/30）……37
第25図　1～５号祭祀土坑実測図（1/30）…38
第26図　６号祭祀土坑実測図（1/30）……39
第27図　７号祭祀土坑実測図（1/30）……40
第28図　祭祀土坑出土土器実測図（1/4）…41

第29図　6号祭祀土坑周辺出土石器実測図（1/3）……42
第30図　53・54号墓実測図（1/20）……44
第31図　土坑実測図（1/30）……45
第32図　土壙墓その他の出土遺物実測図（1/2、2/3）……46
第33図　ガラス玉の蛍光X線分析結果……48
第34図　三坂七尾遺跡出土甕棺編年図……50
第35図　三坂七尾遺跡墳墓群遺構変遷図……51
第36図　23・31・33号墓墓域占有概念図……52
第37図　第1次調査全地点体図（1/200）…54
第38図　1号住居実測図（1/6）……57
第39図　1号住居出土土器実測図（1～29は1/4、29・30は1/2）……58
第40図　2・4号住居実測図（1/60）……59
第41図　2～4号住居出土土器実測図（1/4）……60
第42図　1～7・10～12号土坑、1号溝実測図（1/60）……61
第43図　8・9・13～17・19・20号土坑、2号溝実測図（1/60）……65
第44図　1～4号土坑出土土器実測図（1/4）……68
第45図　5号土坑出土土器実測図①（1/4）……69
第46図　5号土坑出土土器実測図②（1/4）……70
第47図　6号土坑出土土器実測図①（1/4）……71
第48図　6号土坑出土土器実測図②（1～43は1/4、44は1/6、45は1/2）……72
第49図　7・8号土坑出土土器実測図（1/4）……73
第50図　9～15号土坑出土土器実測図（1/4）……74
第51図　16号土坑出土土器実測図①（1/4）……75
第52図　16号土坑出土土器実測図②（1/4）……76
第53図　16号土坑出土土器実測図③（60・70は1/2、他は1/4）……77
第54図　18号土坑出土土器実測図①（1/4）……78
第55図　18号土坑出土土器実測図②（1/4）……79
第56図　17・19・20号土坑出土土器実測図（1/4）……80
第57図　1・2号溝、ピット出土土器実測図（1/4）……81
第58図　包含層、その他出土土器実測図（1/4）……82
第59図　土製品・石器・鉄器実測図（1/2、1/3、1/4）……83
第60図　4号住居実測図（1/60）……84
第61図　高杯実測図（1/4）……86

# 表　目　次

第1表　弥生時代甕棺墓・土壙墓一覧 …… 17
第2表　甕棺観察表① …… 30
第3表　甕棺観察表② …… 31
第4表　甕棺観察表③ …… 32
第5表　甕棺観察表④ …… 33

# Ⅰ．はじめに

## 1．調査にいたる経過

平成11年5月12日に前原市農林土木課から市教育委員会に前原市大字三坂719番地（1563㎡）における埋蔵文化財発掘の通知書（保護法第57条の3第1項）が提出された。工事は農業集落排水事業に伴う処理施設の建設である。農業集落排水事業は、農村部におけるし尿、生活雑排水等の汚水、汚泥または雨水を処理する施設を整備して、生産性の高い農業の実現と活力ある農村社会の形成に資することを目的としている。

市教育委員会では予定地の試掘を行い、当該地が弥生時代の甕棺墓群を含む遺校が密に遺存することを確認しその対応について協議した。工事は翌年度当初から着工される見込みであったため、当該年度中の調査終了が望ましいとの結論に達し、調査に着手することとなった。

調査は9月17日から開始したが、表土剥ぎの結果、墳墓群が建物敷地より広範囲に分布していることが明らかとなったため、調査範囲を敷地全体まで広げることとした。しかし、北部では地下げにより遺構が消失していたことから、最終調査面積は計1037.5㎡となった。

調査半ばの12月初旬までに弥生中期前半の3基の甕棺墓から、計14個の碧玉製管玉が出土するとともに、甕棺墓群に伴う区画溝（祭祀土坑）を検出し、特定個人墓の萌芽的形態を示す墳墓として貴重な遺跡であることが判明した。また、中世墳墓からはガラス玉等が多数出土するなどしたため、12月19日には遺跡の現地説明会を開催した。当日は雪の舞う厳寒の中ではあったが100名を超える見学者が訪れることとなった。

現地での調査は翌2月28日に終了し、平成12年度に資料整理、報告書作成を実施した。

## 2．調査の組織

本調査にかかる組織は以下のとおりである。

調査主体　前原市教育委員会

| | | | |
|---|---|---|---|
| 調査総括 | 前原市教育委員会 | 教育長 | 三嶋　利彦（平成12年度） |
| | | | 坂本　勝喜（平成11年度） |
| | | 教育部長 | 有田　稲之 |
| | | 文化課長 | 松井　　昇 |
| | | 文化課参事 | 小池　史哲（平成12年度） |
| 庶　務 | | 文化振興係 | 大西　将夫（平成11年度） |
| | | | 濱地　　克（平成12年度） |
| 調査・整理担当 | | 文化財係主査 | 岡部　裕俊 |
| | | 嘱　託 | 牟田華代子（平成12年度） |

発掘・整理作業　青木輝代　市丸千賀子　大嶋勝海　大嶋小夜　岡田りつ子　柏田晥子　川上久美子　川上辰子　川上豊子　小金丸勲雄　島影やよい　立山みよ子　友池真由美　友岡チエ子　中田朋子　福田匡男　藤木和子　藤森啓子　溝口英太郎　溝口ヨシノ　和田治子

# Ⅱ．第２次調査

## １．遺跡の位置と環境

三坂七尾遺跡は雷山川中流西岸の段丘斜面上、標高60m前後の地点に位置する。雷山川の長年にわたる浸食によって大きく削られた川底との比高差は10mほどを測り、伊都国の王都三雲・井原遺跡から調査地点は曽根丘陵を越えて２kmほど東に位置する。

この地で最も古い遺跡は高上石町遺跡で、縄文時代早期の押型文土器や石器が出土している。弥生前期の大型の柳葉形磨製石鏃が出土した高野の箱式石棺は調査地点の南１kmほどの山裾斜面出土とされる。上述の高上石町遺跡では弥生時代中期前半から中葉にかけての24基の甕棺墓が発見され、８基の棺内から人骨が出土している。糸島では珍しい弥生中期の人骨資料である。

雷山川東岸の曽根丘陵北西斜面上には弥生時代終末の伊都国王墓である平原遺跡が立地する。

また、丘陵中ほどには狐塚、銭瓶塚、ワレ塚、先山古墳、高上大塚古墳を含む曽根古墳群が立地し、さらに南には小型前方後円墳１基を含む屋敷古墳群（後期）、墳頂に２基の箱式石棺が埋葬された径25ｍの円墳を含む山北井田古墳群（前期）も立地する。

「三坂」という地名は『筑前国續風土記』によれば、古くは「御坂」と記し神宮皇后が雷山から降りる途中に当地で休憩をとったという伝承に由来するという。事の真偽はともかく、雷山山中に築かれた国史跡「雷山神籠石」、怡土七箇寺の一つ「雷山千如寺」の建立などにみられる当地と大和朝廷との密接な関係を示唆するものとして興味深い。

## ２．調査の記録

### (1)　調査地点の地形と調査概要（図版１、第１～３図）

調査地点周辺一帯は既に圃場整備で広範囲にわたり整地されており、耕作土下には遺構面がほぼ水平面をなして現れた。土質は南部から中央部にかけて赤～黄褐色粘質土であるが、所々に拳～人頭大の礫を含む砂礫層が表出していた。また、北部では黄褐色の砂質土壌となっていた。

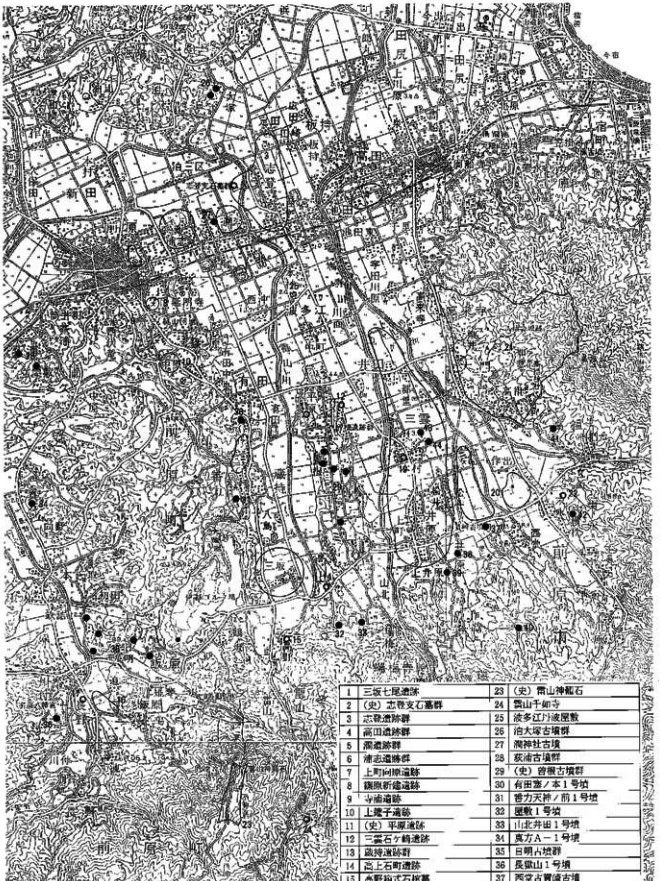
甕棺墓は概して調査区の東部では遺存状態が良好であったが、西側に向かうほど徐々に上部の削平度合いが増したことから、旧地形は北東から南西に向って緩やかな登り勾配の斜面であったと推定された。さらに調査地点の東および北部では雷山川氾濫原に向かって急な下り勾配となっていた。調査地点は西から張り出した舌状台地の東端にあたると推定された。

調査した主な遺構は弥生時代の甕棺墓38基、土壙墓16基、祭祀土坑７基、平安後期～鎌倉期の土壙墓２基、掘立柱建物２棟、土坑５基、柱穴多数などであった。

### (2)　弥生時代の遺構と遺物

#### ①　甕棺墓

調査区の中央部を中心に成人棺18基、小児棺20基の計38基が出土した。時期的には中期前半～中葉のみで構成されている。成人棺相互の切り合いは少ない。紙面の都合上、遺構の計測値等は観察表にまとめ、個々の遺構の留意点に絞って以下に記す。




第1図　三坂七尾遺跡の位置と周辺の主な遺跡等（1/50,000）

第２図　三坂七尾遺跡周辺の地形（１/5,000）

第３図　三坂七尾遺跡第２次調査地点遺構配置図（１/150）

**1号墓（図版2－a、第4図）**

墓群の北東隅角で検出した。1、2、3、5号墓は南北方向にほぼ等間隔に並ぶ。39号土壙墓を切り、1号祭祀土坑が東に隣接する。単棺の成人棺である。1次墓壙は不整方形で126cm×72cmを測り、墓壙幅が棺の幅にほぼ等しくやや小さい。

**2号墓（図版2－b、第4図）**

長方形プランを呈する1次墓壙の西南隅に2次墓壙を掘る。上棺は鎌倉時代に攪乱を受けて破壊され、その底面に割られた甕棺が丁寧に敷かれている。貯蔵穴等として利用されたものであろうか。

**3号墓（図版2－c、第4図）**

2号、5号墓のほぼ中間に位置する。不整方形プランの1次墓壙の西側に2次墓壙を掘る。

**4号墓（図版2－e、第4図）**

3号墓を切って掘られた小児棺墓で、長楕円形の1次墓壙の南に2次墓壙を掘る。下棺は墓壙底面から浮いた状態であった。棺は頸部を打ち欠いた2個の広口壺を合わせており、上棺が下棺より一回り大きく、下棺を覆うように被覆する。

**5号墓（図版2－f、第5図）**

墓壙の平面プランは長方形で、33号墓に次ぐ規模である。深さ112cmを測る。墓壙の底面に納められた棺はほぼ水平に埋置され墓壙の北に寄る。棺底には黄色土と黒色土を交互に築き固めた痕跡が認められた。下棺には下肢骨がわずかにその痕跡を留めていた。

**6号墓（図版2－f、第5図）**

5号甕棺墓の南端を切って掘られた甕棺墓で、幅広の1次墓壙の中央に北向きの2次墓壙を掘る。埋置角度はほぼ水平であった。

**7号墓（図版3－a・c、第5図）**

いびつな長方形の1次墓壙の東北隅角付近に2次墓壙を掘って下棺を納める。

**8号墓（図版3－b・c、第5図）**

3号祭祀土坑、7号墓が隣接する。長方形1次墓壙の西辺から2次墓壙を掘って棺を埋納する成人用単棺である。棺はほぼ水平方向に埋置される。

**9号墓（図版3－d、第6図）**

不整方形の1次墓壙の南端から南に大きくはみだして2次墓壙を掘る。

**10号墓（図版3－e、第6図）**

9号甕棺墓を切って掘られた小児棺墓で、不整方形を呈する1次墓壙の東寄りに65cm×60cmの隅丸方形の2次墓壙を掘って棺を埋置する。

**11号墓（図版4－a・b、第6図）**

長方形1次墓壙の東に2次墓壙を掘る。胴上半分を打ち欠いた上棺で一回り小さい下棺を被覆する。棺の埋葬角度急である。棺底に人骨片が遺存していたが、遺存状態が悪く、詳細は不明である。成人棺であろうか。埋土上層から焼木が出土した。

**12号墓（図版4－a、第6図）**

11号墓の墓壙東部を切って掘られており、主軸方位は14号墓にほぼ同方向である。隅丸方形の1次墓壙の西隅角から2次墓壙を掘る。棺を安定させるために上棺下に盛土が行なわれていた。

**13号墓（図版４－ｃ、第６図）**

不整方形の１次墓壙の南西隅角から外に張り出す２次墓壙を掘る。埋置角度はほぼ垂直方向に近い。上棺は大型棺を打ち欠き、口頸部を打ち欠いた広口壺の下棺を上から被覆する。

**14号墓（図版４－ｄ、第７図）**

楕円形１次土壙の東に２次墓壙を掘って下棺を納める。棺内に上棺が上下反転して落ち込んでいた。

**15号墓（図版４－ｅ、第７図）**

48号墓を切って掘られており、不整方形１次墓壙の西隅角に２次墓壙を掘って棺を埋置する。棺は上棺側に傾斜する。

**16号墓（図版４－ｆ、第７図）** 長方形１次墓壙の北寄りに２次墓壙を設ける。棺はほぼ水平に埋置される。棺の全長は190cmほどで、墓群中最大である。

**17号墓（図版４－ｇ、第７図）**

16号墓の墓壙を南東部で切って掘り込まれる。棺の主軸方位は16号墓とほぼ同方向である。

**18号墓（図版５－ａ、第８図）**

長方形プランの１次墓壙の南部から２次墓壙が掘られる。

**19号墓（図版５－ｂ、第８図）**

18号墓の墓壙の東を切って掘られた甕棺墓で、不整方形プランの１次墓壙の南隅角から２次墓壙を掘って棺を埋置する。主軸方位は18号よりやや北に振れる。

**20号墓（図版５－ｃ、第８図）**

墓群の北西隅角で検出した。遺存状況は悪く、棺の上半部は削平されていた。１次墓壙は方形プランで、南辺付近から南に向けて２次墓壙が掘られる。

**21号墓（図版５－ｄ、第８図）**

墓壙上面が削平されている。長方形墓壙の北寄りに２次墓壙を掘り棺をほぼ水平方向に納める。

**22号墓（図版５－ｆ、第９図）**

長方形プランの１次墓壙の中央から西向きに２次墓壙を掘って棺を埋置する。中世に攪乱を受け、上棺は大破し、人頭台の礫とともに墓壙内に廃棄されていた。

**23号墓（図版５－ｇ、６－ａ・ｂ、第９図）**

長方形プランの１次墓壙の西に向って２次墓壙を掘って埋置する。

**24号墓（図版５－ｇ、９図）**

23号甕棺墓の掘り方を切り合う。墓群中で唯一成人棺どうしの切り合い関係が認められる。不整長方形プランの１次墓壙の南西隅角から南西方向に２次墓壙を掘り棺を埋置する。上面が削平され、遺存状態が悪かった。上棺が小さかったためか上棺が下棺内に埋置後にすべり落ちた状態を呈していた。

**25号墓（図版６－ｃ、第９図）**

23号甕棺墓の南に隣接する甕棺墓である。１次墓壙が完全に削平されており、現状では切り合いは確認できなかったが、本来は23号と切り合っていたと推定され、棺の形態から23号に後出するものと推定される。

**26号墓（図版6－d、第9図）**

27号、50号と並んで検出した。長円形の1次墓壙から東に向って2次墓壙を掘る。

**27号墓（第10図）**

26号の南に隣接して築かれた甕棺墓で、墓壙は大きく破壊され、棺も底面に破片が残るのみであったため、詳細は不明。

**28号墓（図版6－e、7－a、第10図）**

甕棺墓群の西南隅で検出した。29、30号甕棺墓と近接し、本来は切り合っていた。1次墓壙の西南角から2次墓壙を掘る。

**29号墓（図版7－a、第10図）**

28号の東に掘り込まれた甕棺墓で、口縁打ち欠きの広口壷を用いた単棺である。

**30号墓（図版7－a、第10図）**

口頸部を打ち欠いた広口壷を下棺とした小児棺である。上部の削平が著しく、上棺の有無、墓壙の詳細は不明である。

**31号墓（図版7－b、第10図）**

長方形プランの1次墓壙の東隅角から2次墓壙を掘る。単棺で、口縁部直上に幅30cmの溝状の掘り込みが掘られていることから、木蓋であったと推定される。棺底から碧玉製管玉が3個出土した。

**32号墓（図版7－c、第10図）**

33号甕棺墓の北に隣接する小型甕を用いた小児用の単棺である。

**33号墓（図版7－d・8－a・b・c、第11図）**

墓群の南端で検出した甕棺墓である。長さ265cm、幅172cmの長方形の1次墓壙の床面をさらにcmほど掘り下げ、合口甕棺を埋納する。1次墓壙の規模は墓群中最大である。甕棺下には黒色土、黄色土を交互に築いて棺床とし、棺の合わせ口部には黄色粘土の分厚い目張りを施す。下棺中ほどから碧玉製管玉が3個出土した。甕棺の覆土中には拳大から人頭大の礫石が多く含まれていた。

**34号墓（図版7－d・8－a・8－d、第11図）**

33号墓の墓壙東部を切って頭部から掘り込まれた小児用甕棺墓である。棺は差し渡し97.4cmほどとなり、小児棺としては群中最大である。

**35号墓（図版8－e、第11図）**

長方形プランの1次墓壙の南西部から2次墓壙を掘る。小児用の単棺で、ほぼ水平方向に棺を埋置する。

**36号墓（図版9－a、第11図）**

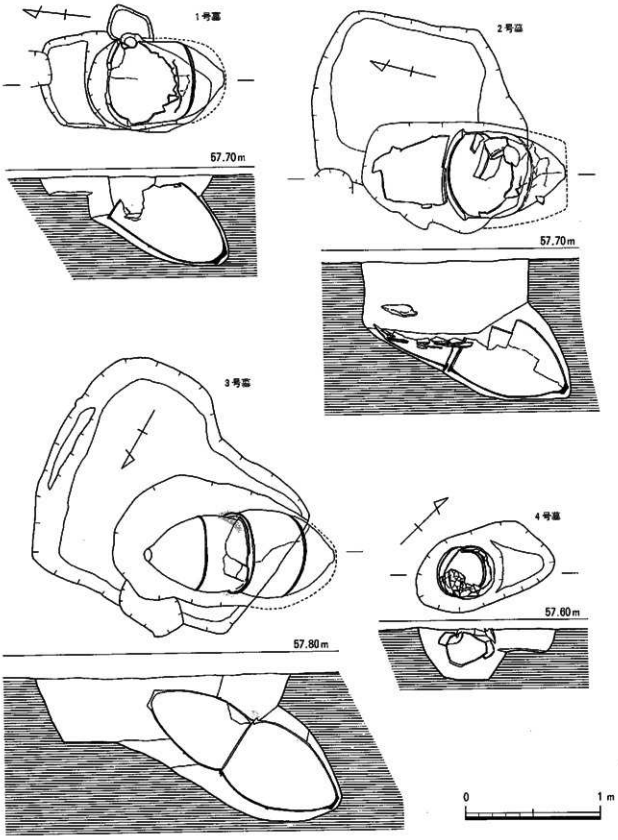
墓群の南西部、調査区端にかかって検出した。37号墓とともに他の墓群からはやや離れた位置にある。

**37号墓（第11図）**

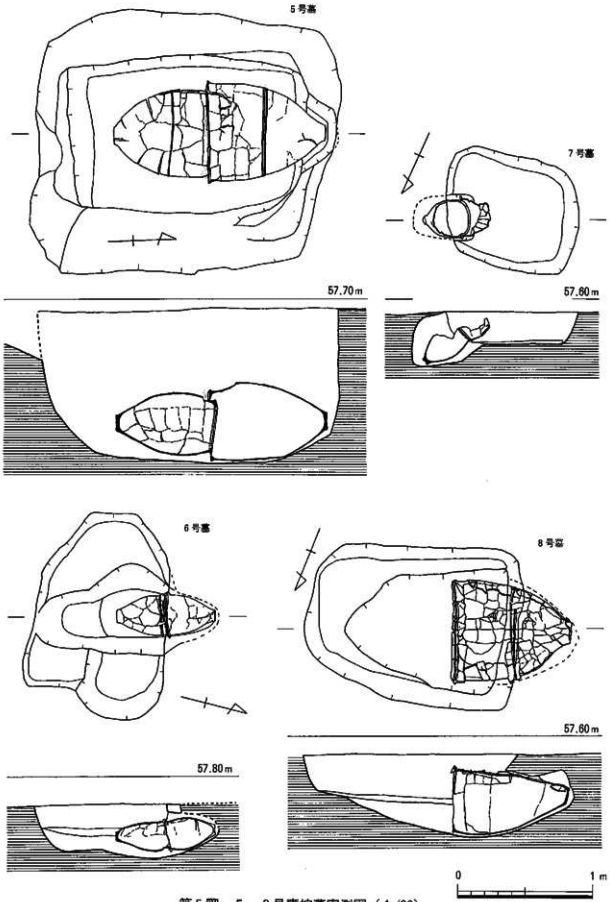
36号墓の東に隣接する。上面が大きく削平され、下棺の下面がわずかに残るのみで、詳細は不明。

**38号墓（図版9－b、第11図）**

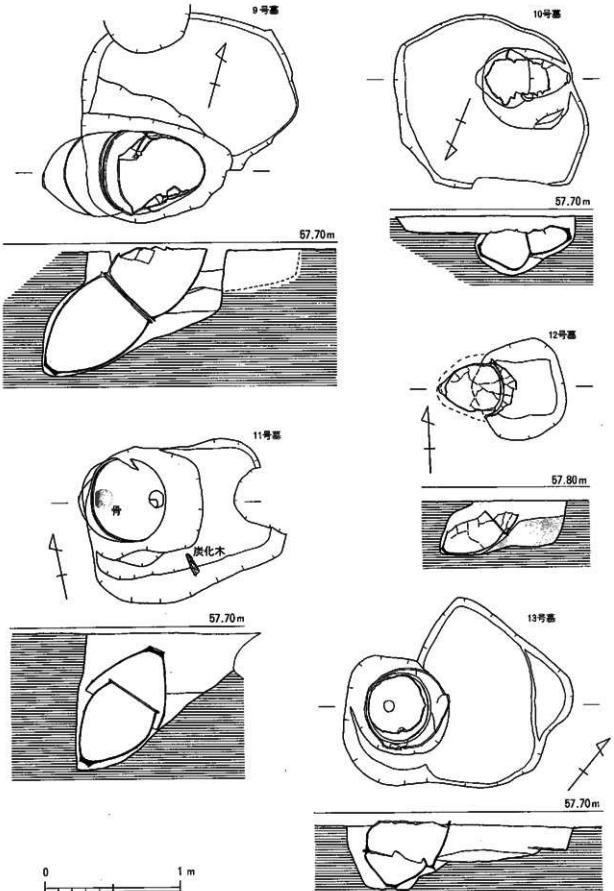
墓群の西端で検出した合口の成人棺である。上面の削平が著しく、1次墓壙は消失、甕棺の上棺は口縁部の一部が残存するのみ。



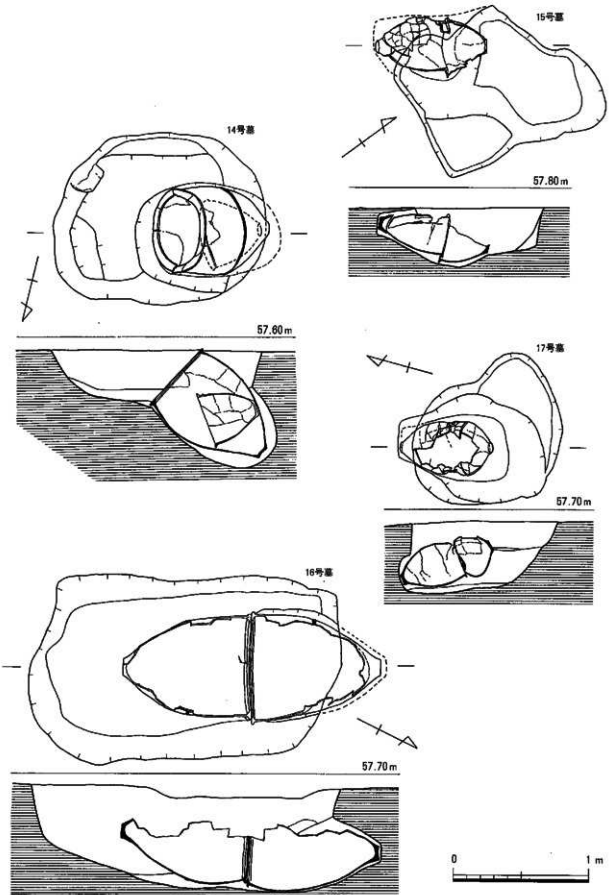

第4図　1～4号甕棺墓実測図（1/30）



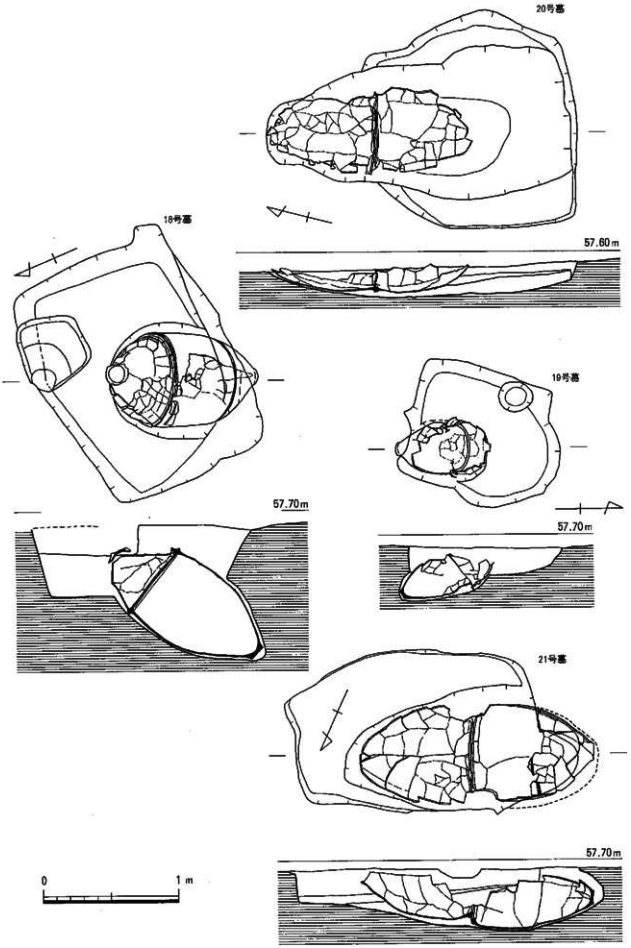

第5図　5～8号甕棺墓実測図（1/30）



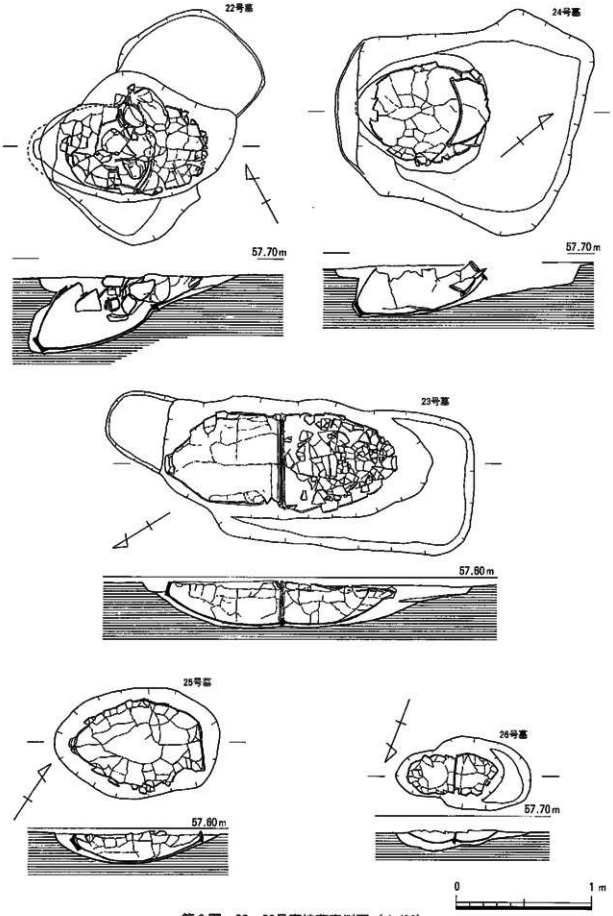

第6図　9～13号甕棺墓実測図（1/30）



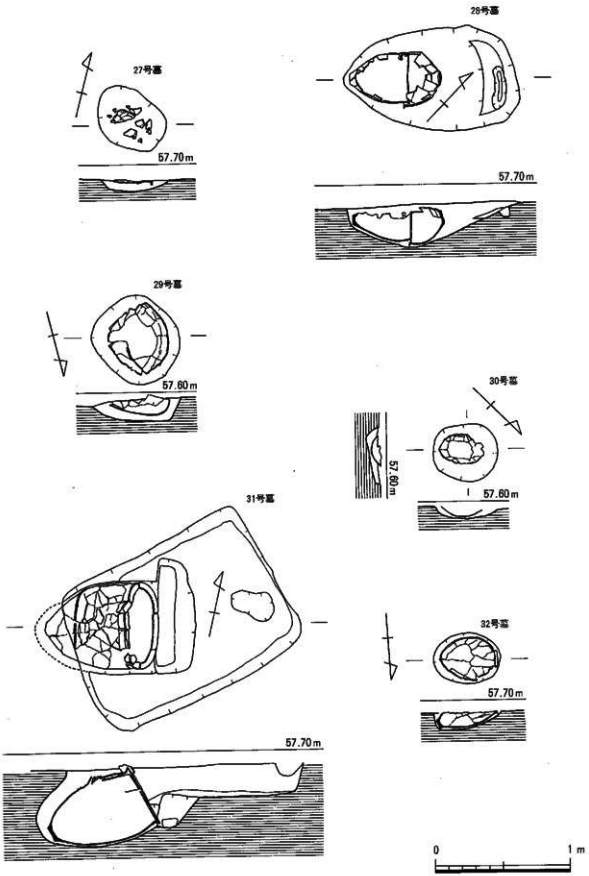

第７図　14～17号甕棺墓実測図（1/30）



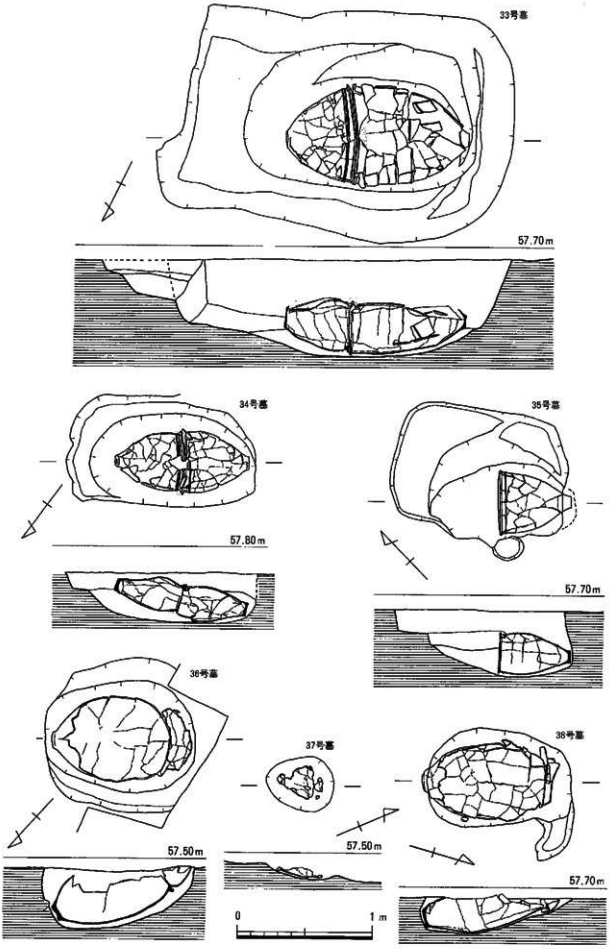

第８図　18～21号甕棺墓実測図（１/30）




第９図　22～26号甕棺墓実測図（１/30）




第10図　27～32号甕棺墓実測図（1/30）




第11図　33～38号甕棺墓実測図（1/30）

第1表　弥生時代甕棺墓・土壙墓一覧

**甕棺墓**

| 遺構番号 | 挿図 | 図版 | 墓壙長(cm) | 墓壙幅(cm) | 棺長(cm) | 主体部主軸方位 | 時期 | 棺埋葬角度 | 被蓋方法 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 4 | 2 | 128 | 75 | 87 | N−80°−W | Ⅱc | 38 | 単 | 39号土壙墓を切る |
| 2 | 4 | 2 | 140 | 130 | − | N−15°−W | Ⅱb | 31 | 接口 | 鎌倉時代に攪乱を受ける |
| 3 | 4 | 2 | 190 | 178 | 158 | N−61°−E | Ⅱa | 31 | 接口 | 黄色粘土日張り |
| 4 | 4 | 2 | 105 | 62 | − | N−44°−E | Ⅱb | 66 | 覆口 | 3号甕棺墓壊を切る |
| 5 | 5 | 2 | 220 | 195 | 157 | N−45°−W | Ⅱb | 0 | 呑口 | 黄色粘土日張り。下棺底に肢骨遺存 |
| 6 | 5 | 2 | 97 | 133 | 74 | N−14°−W | Ⅱc | −4 | 接口 | 5号の墓壙を切る |
| 7 | 5 | 3 | 98 | 85 | − | N−65°−W | Ⅲa | 40 | 接口 | 4号土坑に隣接する |
| 8 | 5 | 3 | 159 | 121 | 86 | N−68°−E | Ⅱc | 0 | 単 | |
| 9 | 6 | 3 | 160 | 160 | − | N−74°−E | Ⅱb | 44 | 接口 | |
| 10 | 6 | 3 | 139 | 131 | 69 | N−87°−E | Ⅱc | 10 | 接口 | |
| 11 | 6 | 4 | 144 | 115 | 101 | N−79°−W | Ⅲa | 31 | 覆口 | 墓壙南上層に焼木　棺底に人骨片遺存 |
| 12 | 6 | 4 | 67 | 72 | − | N−89°−E | Ⅱb | 41 | 合口 | |
| 13 | 6 | 4 | 120 | 153 | − | N−53°−E | Ⅱc | 82 | 覆口 | |
| 14 | 7 | 4 | 157 | 130 | 125 | N−76°−E | Ⅱc | 41 | 接口 | 上蓋が下甕内に転落 |
| 15 | 7 | 4 | 131 | 109 | 84 | N−37°−E | Ⅲa | 14 | 接口 | |
| 16 | 7 | 4 | 230 | 132 | 191 | N−23°−W | Ⅱc | 5 | 接口 | |
| 17 | 7 | 4 | 108 | 93 | 71 | N−15°−W | Ⅱc〜Ⅲa | 22 | 呑口 | 棺の傾斜角度が大きい |
| 18 | 8 | 5 | 183 | 142 | 130 | N−23°−E | Ⅱc | 36 | 接口 | |
| 19 | 8 | 5 | 115 | 100 | − | N−S | Ⅲa | 29 | 覆口 | |
| 20 | 8 | 5 | 158 | 163 | − | N−13°−W | Ⅱc | 0 | 接口 | |
| 21 | 8 | 5 | 160 | 122 | − | N−65°−E | Ⅱc | 6 | 接口 | |
| 22 | 9 | 5 | − | − | − | N−62°−W | Ⅱb | 34 | 接口 | 棺内攪乱、川原石充塡 |
| 23 | 9 | 5・6 | 200 | 108 | 167 | N−31°−E | Ⅱb | −2 | 呑口 | 碧玉製管玉9個副葬 |
| 24 | 9 | 5 | 180 | 168 | 92 | N−41°−E | Ⅱc | 32 | 呑口 | |
| 25 | 9 | 5 | − | − | 93 | N−57°−E | Ⅱc | 21 | 単 | |
| 26 | 9 | 6 | 75 | 59 | − | N−70°−E | Ⅲa | −3 | 接口 | |
| 27 | 10 | − | − | − | − | N−75°−E | Ⅲa | − | 単 | 碧玉製管玉2個副葬 |
| 28 | 10 | 6・7 | − | 80 | 67 | N−46°−E | Ⅱc〜Ⅲa | 67 | 覆口 | |
| 29 | 10 | 7 | − | − | − | N−75°−W | Ⅲa | − | 単 | |
| 30 | 10 | 7 | − | − | − | N−50°−E | Ⅱc〜Ⅲa | − | 単 | |
| 31 | 10 | 7 | 162 | 118 | 75 | N−78°−E | Ⅱb | 26 | 単 | |
| 32 | 10 | 7・8 | − | − | 44 | N−86°−W | Ⅲa | 28 | 単 | |
| 33 | 11 | 7・8 | 265 | 172 | 135 | N−64°−E | Ⅲa | 1 | 接口 | 碧玉製管玉3個副葬 |
| 34 | 11 | 7・8 | 140 | 84 | 98 | N−55°−E | Ⅲa | 11 | 接口 | 33号を切る |
| 35 | 11 | 8 | 127 | 90 | 52 | N−47°−W | Ⅱc | 2 | 単 | |
| 36 | 11 | 9 | − | − | − | N−47°−E | Ⅰa | 29 | 呑口 | |
| 37 | 11 | 9 | − | − | − | N−23°−E | Ⅰa (?) | − | 単 | |
| 38 | 11 | 9 | − | − | − | N−15°−W | Ⅱc | 13 | 覆口 | |

**土壙墓**

| 番号 | 挿図 | 図版 | 墓壙長(cm) | 墓壙幅(cm) | 主体部長(cm) | 主体部主軸方位 | 墓壙の平面プラン | 主体部形態 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 39 | 23 | 9 | 143 | 71 | 143 | N−9°−W | C類 | 土壙墓 | 深さ45cm |
| 40 | 23 | − | 127 | 118 | 127 | N−24°−W | A類 | 土壙墓 | 深さ23cm |
| 41 | 23 | 9 | 170 | 88 | 170 | N−70°−E | B類 | 土壙墓 | 深さ21cm |
| 42 | 23 | − | 120 | 88 | 120 | N−61°−E | A類 | 土壙墓 | 深さ20cm |
| 43 | 23 | − | 167 | 82 | 140 | N−84°−W | B類 | 土壙墓 | 深さ21cm |
| 44 | 23 | 9 | 156 | 46 | 156 | N−10°−W | B類 | 土壙墓 | 深さ23cm |
| 45 | 24 | 9 | 185 | 70 | 185 | N−78°−E | B類 | 土壙墓 | 深さ21cm |
| 46 | 24 | 9 | 138 | 62 | 138 | N−69°−W | C類 | 土壙墓 | 頭部は8cmほど高く削りだす。 |
| 47 | 24 | 9 | 207 | 105 | 170 | N−53°−E | B類 | 土壙墓 | |
| 48 | 24 | 10 | 180 | 155 | 100 | N−85°−E | C類 | 木棺？ | 深さ105cm |
| 49 | 25 | 10 | 190 | 107 | 154 | N−12°−E | B類 | 石棺？ | 2段目墓壙下面に結晶片岩の板石が遺存 |
| 50 | 25 | − | 154 | 147 | 117 | N−75°−E | A類 | 木棺 | 2段目墓壙に長さ120cm、幅40cmの木棺痕跡遺存 |
| 51 | 25 | 10 | 213 | 66 | 213 | N−15°−W | B類 | 土壙墓 | |
| 52 | 25 | 10 | 180 | 69 | 138 | N−85°−E | B類 | 土壙墓 | |

甕棺墓

1号甕棺（図版18・24、第17図）

砲弾形の大型棺を下甕とする単棺である。口縁部と頸部のつなぎ目に擬口縁があり、成形時の指圧痕が明瞭に残る（図版24）。底部はやや厚く2.4cm。胴部突帯は1条作り2条突帯。

2号甕棺（図版18・24、第17図）

上甕は口縁部上を180度対応する部分を一部分打ち欠いている。器壁0.7～1.0cm、底部2.0cmのやや上げ底。突帯下に設計線残る。下甕の器壁0.9～1.3cm、底部の厚み2.2cm。突帯下に設計線残る。

3号甕棺（図版18・24、第17図）

上下甕とも丸みを帯びた形態。上甕は器壁0.7～1.0cm。口縁部成形指圧痕（図版24）。下甕の器壁は1.2～1.7cm、底部の厚みは3.1cmと全甕棺中最も厚い。器面調整は丁寧で胎土もきめが細かい。

4号甕棺（図版14、第13図）

上甕は底部欠損。器壁は薄く0.5cm。下甕は器壁0.4～0.6cm。底部の厚さ1.0～1.2cm。残りよい。

5号甕棺（図版18、第17図）

上甕はやや器高が小さく丸みを帯びる。器壁は0.7～1.0cm。底部の厚さは1.4cm。粘土帯のつなぎ目は10～12cm。下甕は口縁部が分厚いが器壁は0.9～1.0cmと薄い。底部の厚さは1.7cm。

6号甕棺（図版14、第13図）

上甕は小型甕で器壁0.4～0.8cm。底部の厚さ1.3cm。黒斑が無い。下甕は小型甕で器壁0.4～0.7cm。底部の厚みは2.2cmで粘土帯のつなぎ目は4～5cm。上下棺ともに器高が小さい。

7号甕棺（図版14、第13図）

上甕は小型甕で底部は欠損する。器壁は0.5～0.8cm。粘土帯幅は5.5cm。下甕は器壁が0.5～0.9cmで底部の厚みは1.6cm。上下棺ともに完形で小型棺の中でも特に小さい作りである。

8号甕棺（図版17、第17図）

大型甕を使用した単棺。内面粘土帯のつなぎ目が2ヶ所ほど明瞭な部分があり、つなぎ目から上に粗いハケ目調整が残る。底部欠損。突帯は高さのある一条三角突帯。

9号甕棺（図版19・24、第18図）

上下甕とも口縁内側を半周打ち欠く。被葬者を埋置する際に口縁の内側の突出部が邪魔になったためと考えられる。上甕は底部欠損。器壁は0.9～1.3cmとやや厚めで内面調整がハケ目で終了するなどつくりが粗い。下甕の粘土帯のつなぎ目は10～11cm。器壁は0.6～1.2cm、底部の厚さ2.7cm。

10号甕棺（図版14、第13図）

上甕は小型甕で器壁0.4～0.8cm、底部の厚み2.1cm。下甕は器壁0.4～0.8cm。底部の厚み1.3cm。

11号甕棺（図版19・24、第18図）

上甕は大型棺の胴部を半裁したもの。底部の厚み2.6cm。下甕は胴部に丸みを持つ中型棺で調整は刷毛目が多く残り雑。器壁は0.7～1.1cm。底部の厚みは2.2cm。このサイズの甕棺は小児用として使用されるが今回は小児棺を伴っており成人棺として使用されたものであろう。

12号甕棺（図版15、第14図）

上甕は鉢形土器。底部欠損。器壁0.5～0.7cm。下甕は小型甕で器壁0.5～0.7cm。底部の厚み1.9cm。

13号甕棺（図版19、第18図）

下甕が打ち欠き広口壷で上甕が大型棺の倒置式甕棺で下甕は乱雑に打ち欠かれている。底部の厚

さ1.8cm。上甕は器壁が厚く1.1～1.4cmで、焼成が良く堅牢な作り。胴下半部は欠損する。

**14号甕棺（図版20、第18図）**

上甕は小さ目の鉢形土器で、器壁が0.5～1.0cmと薄く、底部は厚みが1.3cmほど。下甕はやや胴部に丸みを持つ。器壁は1.0cmほどで、底部の厚みは1.9cm。粘土帯のつなぎ目は10cm前後。

**15号甕棺（図版15、第14図）**

上甕は鉢形土器。器壁0.5～0.7cm。中位のつなぎ目部分押さえた痕跡あり。下甕は小型甕で器壁0.4～0.8cm。底部の厚み2.3cm。つなぎ目部分は内外からの押さえにより器壁薄い。

**16号甕棺（図版20、第19図）**

上下甕ともに器高が高く器壁が薄い作り。器壁の厚さは５～８cm。口縁部は厚みがある。突帯は１条作り２条突帯で低い。底部の厚さが下甕で2.5cm。上下棺とも底部全体に黒斑がある。

**17号甕棺（図版16・24、第14図）**

上甕は壺形土器で頸部上は打ち欠きにより欠損。器壁は0.6～0.9cm。底部の厚さ2.2cm。下甕は小型甕で器壁0.5～0.9cm。底部の厚さ1.9cm。底部付近は細かいハケで、上半は粗めのハケを使用。

**18号甕棺（図版20・25、第19図）**

上甕は鉢形土器。胴部の張りはない。器壁0.7～1.0cm。底部の厚みは2.4cm。底部内面は平坦。下甕は肩部が張る形態。器壁は0.8～1.3cm。胴部突帯は１条作り２条突帯。底部の厚みは2.6cm。

**19号甕棺（図版15、第15図）**

上甕は鉢形土器。底部欠損。器壁0.5～0.8cm。胴部中位に指押さえ痕。下甕は小型甕で器壁は0.5～0.7cm。底部の厚み1.3cm。底部は若干窪むが平底に近い形態。上半と下半でハケ目異なる。

**20号甕棺（図版21、第19図）**

上甕は全体の１／２のみ残存する。器壁は0.8～1.1cm。下甕も全体の１／２のみ残存、底部は欠損する。器壁0.8～1.1cm。突帯は高さがある一条二角突帯である。

**21号甕棺（図版21・24、第19図）**

上甕は器壁0.7～1.0cmで胴部の張りが大きい。下甕はやや口縁ですぼまる形態で、器壁0.8～1.1cm、底部の厚み2.5cm。突帯は１条造り２条突帯。粘土帯のつなぎ目は12～13cm。

**22号甕棺（図版21、第20図）**

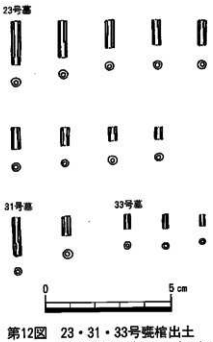
上甕は口縁頂部の窪みが強い。器壁は0.9～1.0cm。残りが悪いため、図版は反転復元をおこなう。下甕は口縁部が狭く胴部の張りが大きい。器壁は0.9～1.4cmとやや厚く、底部の厚みは1.9cmである。

**23号甕棺（図版22・24・25、第20図）**

上甕は器壁が0.7～1.0cm。底部は1.5cm。下甕は内外ともに工具痕が残る。器壁は薄く0.6～0.9cmである。底部の厚さは1.5cmで、胴部に張りがある。上下甕ともに胴部突帯は高さの低い一条突帯である。

**24号甕棺（図版22、第20図）**

上甕は下半は欠損しており、胴部は低い一条三角突帯で




第12図　23・31・33号甕棺出土
碧玉製管玉実測図（2/3）

ある。器壁0.7～1.0cm。下甕は0.8～1.2cm。底部は厚く3.3cmである。

**25号甕棺（図版23、第21図）**

上甕は口縁部１／３ほど残存する。内面のミガキと黒塗りが顕著。器壁薄く0.6～0.8cm。下甕は半分しか残存せず、図面は反転復元。器壁は薄く0.7～1.1cmで底部は厚み2.7cm。

**26号甕棺（図版15、第15図）**

上下甕とも全体の１／２と下半部欠損。上甕の器壁は0.5～0.8cm。下甕の器壁は0.5～0.8cm。

**27号甕棺（第16図）**

小型甕の単棺である。胴下半部は欠損する。器壁は0.4～0.6cm。器壁は薄い。

**28号甕棺（図版16、第15図）**

上甕は胴部に丸みを持つ鉢形土器。器壁は厚く0.7～1.4cm。底部の厚み2.2cm。下甕は小型甕で底部が非常に小さい。器壁0.5cm～0.9cm。底部の厚みは2.3cm。若干異質な感じ。

**29号甕棺（図版16、第16図）**

壷形上器の単棺。全体の１／２のみ残存。器壁は0.6～0.9cm。底部の厚さ1.2～1.6cm。

**30号甕棺（第15図）**

壷形上器の単棺。残りが悪く胴部の一部のみ残存している。表面の風化も激しい。

**31号甕棺（図版23・24、第21図）**

大型甕の単棺である。器壁は0.8～1.2cm。底部の厚さ2.8cm。口縁部の厚みは薄い。

**32号甕棺（図版17、第16図）**

小型棺の単棺で口縁部欠損。器壁0.6～0.7cm。底部の厚み1.8cm。調整単位でつなぎ目観察可。

**33号甕棺（図版22、第20図）**

上甕は胴部が張り、頸部突帯も高さのあるしっかりとした三角突帯。底部の厚さは1.3cm。下甕は上半の器壁が厚く1.1～1.4cmで、下半は0.7～0.9cmと薄い。底部も1.6cmで薄い。

**34号甕棺（図版17、第16図）**

上甕は小型甕で器壁0.4～0.6cm。底部の厚さ1.8cm。下甕は小型甕で器壁0.4～1.0cm。底部の厚さ2.2cmで上下棺ともに底部は明瞭な上げ底。下甕粘土帯は幅４～５cm。

**35号甕棺（図版17、第16図）**

小型甕の単棺である。器壁は0.6cm～1.1cm。底部の厚さ2.5cm。粘土帯は幅６～７cm。

**36号甕棺（図版23、第21図）**

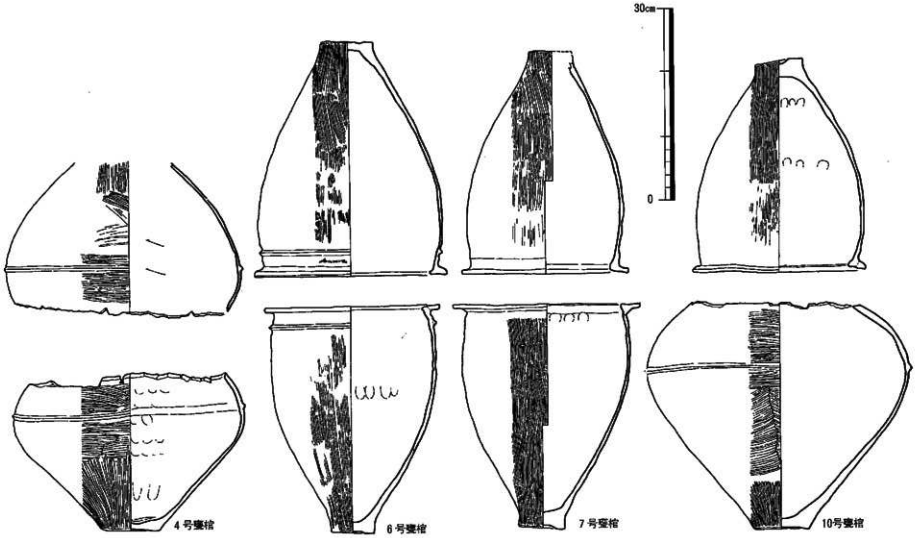
上甕は頸部打ち欠きの大型壷。頸部には黒塗り痕が一周する。内面ナデ工具痕は曲面の強い胴部最大径部分は曲面にも対応できる幅0.8cmほどの小さな工具を用いて、他は約2.0cm幅の工具を用いる等の、調整における工夫が見られる。下甕は金海くずれの形態。粘土帯の幅が他の甕棺に比べ小さく８～９cm。大きめの粘土帯では作ることのできない技術の未熟さが覗える。器壁は0.7～1.0cmと薄く仕上げているが、底部は3.4cmと分厚い上げ底である。

**37号甕棺**

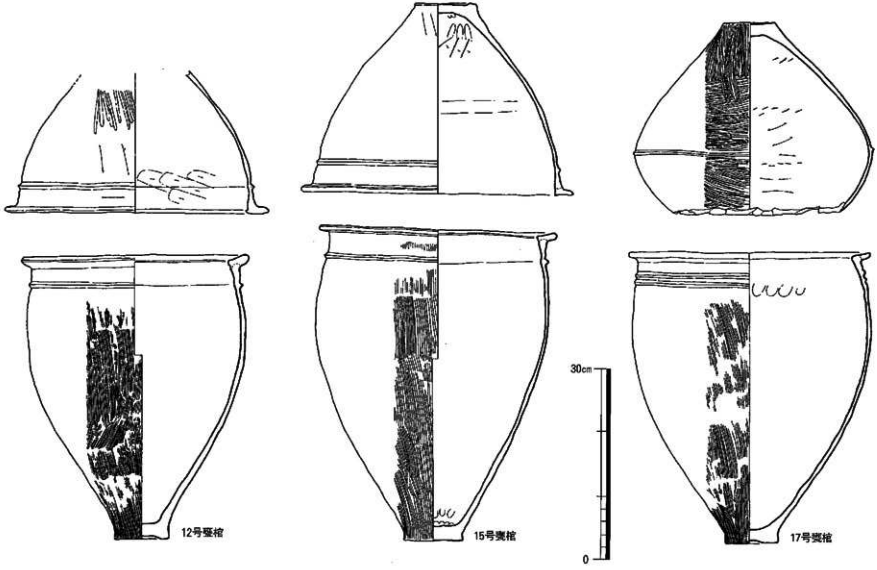
小型棺であるが残りが悪いため実測不可能。36号甕棺に伴う小児棺だろう。

**38号甕棺（図版23、第21図）**

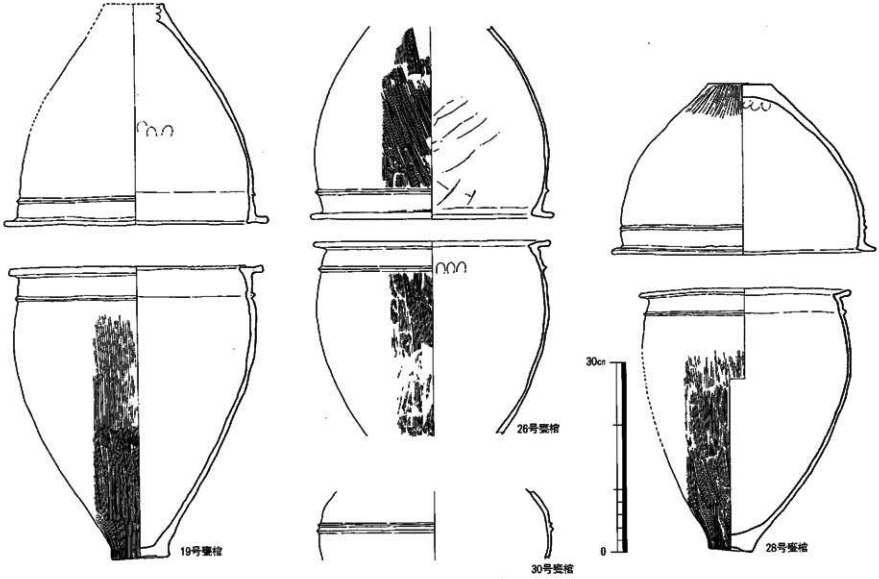
上甕は胴部半裁甕で、焼成が良く堅牢な作り。器壁0.8～1.3cmでやや厚め。下甕は器壁0.7～1.2cm。底部は欠損しており、粘土帯幅1.1～1.3cm。外面胴部に焼成前の線刻が２本見られる。



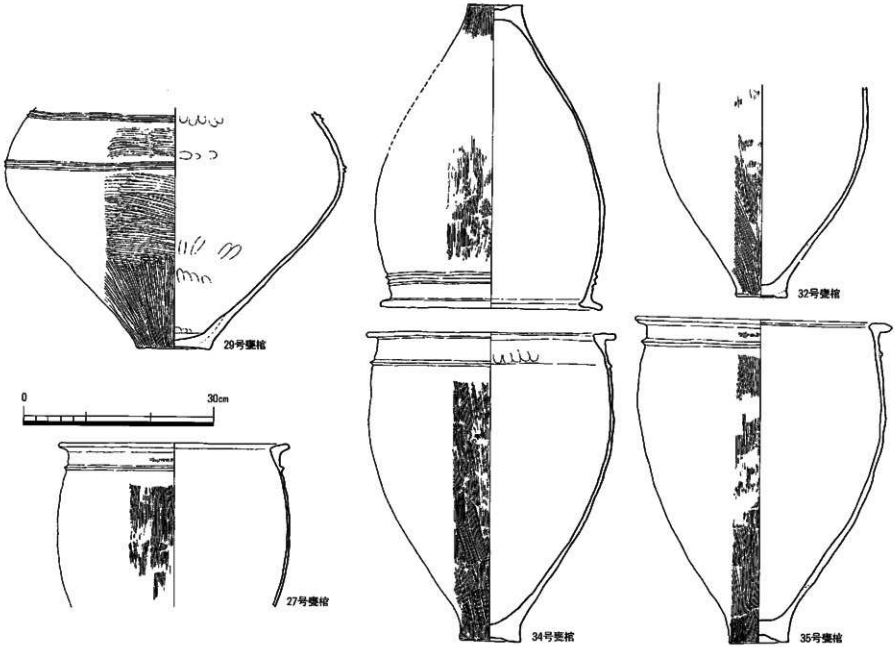

第13図　4・6・7・10号甕棺実測図（1/6）



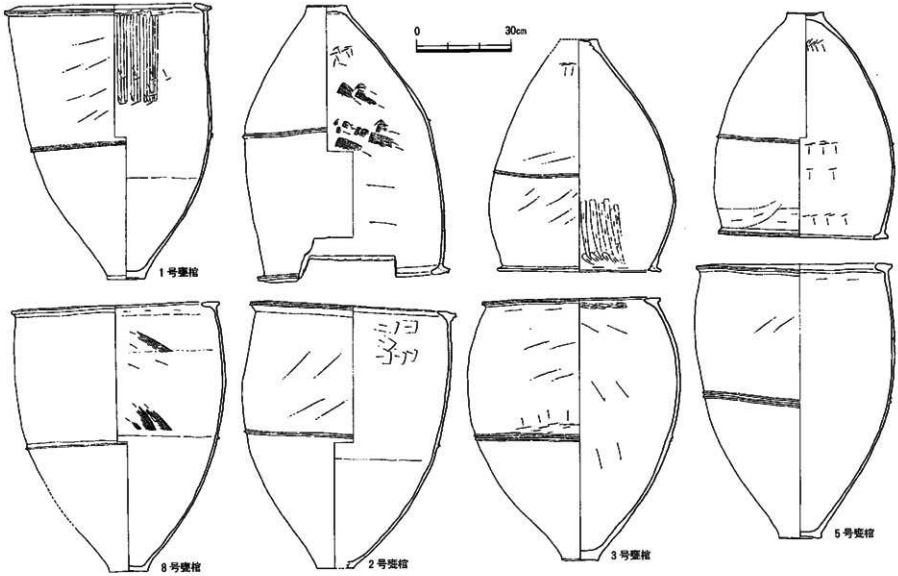

第14図　12・15・17号壺棺実測図（1/6）



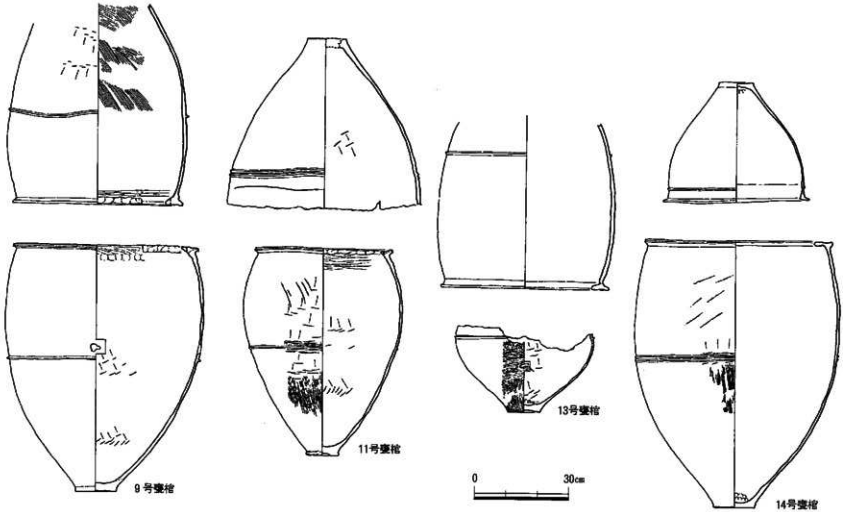

第15図　19・26・28・30号甕棺実測図（1/6）



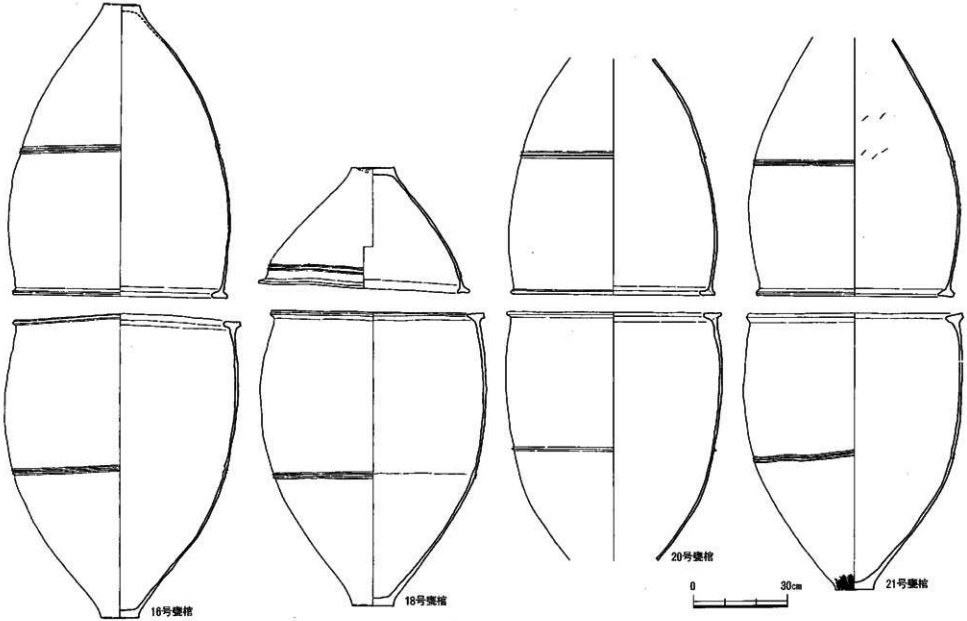

第16図　27・29・32・34・35号甕棺実測図（1/6）



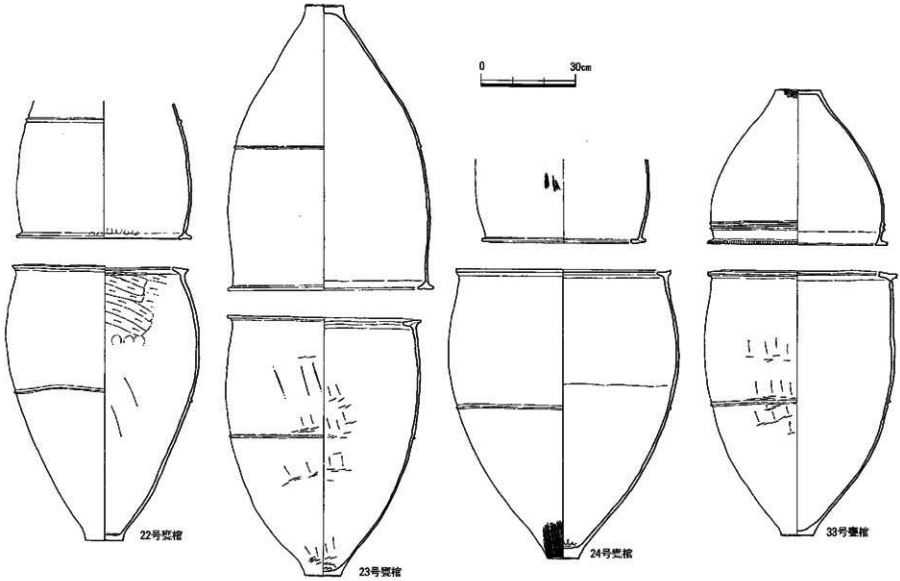

第17図　1・2・3・5・8号甕棺実測図（1/12）



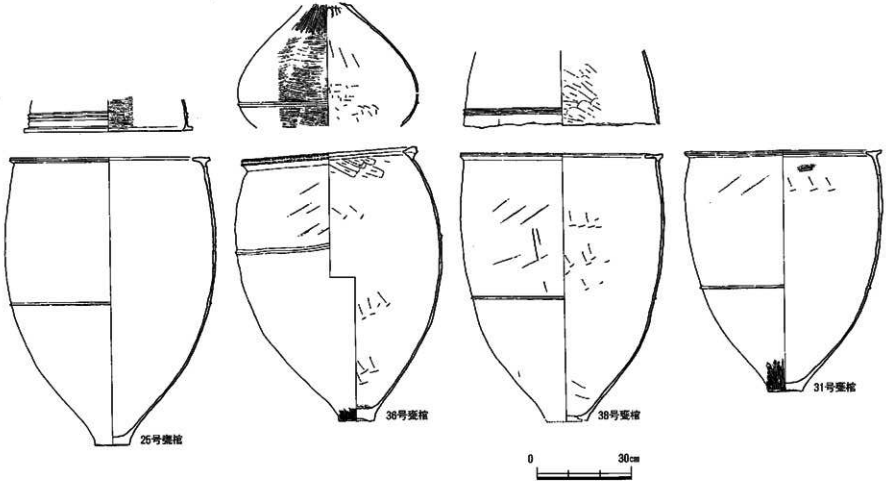

第18図　9・10・13・14号甕棺実測図（1/12）




第19図　16・18・20・21号甕棺実測図（1/12）




第20図　22・23・24・33号甕棺実測図（1/12）




第21図　25・31・36・38号甕棺実測図（1/12）

## 第2表　整地観察表①

| 遺物番号 | | 器種 | 法量（cm） | | 胎土・色調・焼成 | | 形態の特徴 | 技法 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| K－1 | 下層 | 大型鉢 | 器高 | 37.3 | 胎土 | 石英・長石 | 口縁部は外傾する逆L字形。 | 調整は内外ともにナデ。口縁部突帯付部ヨコナデ。 | 黒斑（胴部上半と底部付近） |
| | | | 口縁外径 | 56.1 | 色調（内） | 明赤褐色 | 口縁部突帯は高さの低い幅狭で8条二条突帯である。底部は上げ底。 | 内面に間隔0～2.5cmの縦状工具痕。上半に縦方向に等文状のナデ痕。 | |
| | | | 胴部最大径 | — | （外） | 〃 | | | |
| | | | 底径 | 11.9 | 焼成 | 良好 | | | |
| K－2 | 上層 | 大型壺 | 器高 | 37.7 | 胎土 | 長石・石英・赤褐色粒子・黒色粒子 | 口縁部は未発達の下方に傾。胴部突帯は中央部下のある逆台形～高三角突帯。底部は上げ底。 | 調整は内面ヨコナデ。口縁部突帯付部ヨコナデ。外面に縦3～3.5cmの板状工具痕ナデのち上げ底10～14cm | 赤色スリップ（口縁部上部）黒斑（底部と内面傾斜）頸部より上だち久き |
| | | | 口縁外径 | 60.3 | 色調（内） | 暗灰褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 61.5 | （外） | 淡黄褐色 | | | |
| | | | 底径 | 12.6 | 焼成 | 良好 | | | |
| | 下層 | 大型鉢 | 器高 | 35.1 | 胎土 | 石英・長石・角閃石 | 口縁部はやや内側に張りだした下向口縁。胴部は張りのない逆台形。突帯はやや高きのある二条突帯。 | 調整は内面ヨコナデ。口縁部突帯付部ヨコナデ。外面に幅約4cmの、外面端部に約1.5cmの板状工具痕。底形始のしわあり。 | 赤色スリップ（口縁部と胴部上部の一部）。黒斑（内面全体と外面の底部） |
| | | | 口縁外径 | 65.9 | （外） | 黄褐色～黄白色 | | | |
| | | | 底径 | 11.2 | 焼成 | 良好 | | | |
| K－3 | 上層 | 大型壺 | 器高 | 73.4 | 胎土 | 石英・長石・角閃石 | 口縁部は外側に張り出しの少ない逆L字。底部は丸みをもつ。突帯は高さの低い三角～高突帯。底部は老干上げ底。 | 調整は内外ともにナデ。口縁部突帯付部ヨコナデ。内面に上方向に横状工具の筋状ナデ痕。外面底部横ヘラ。口縁部は横ヨコナデ。底形始のしわ。 | 黒斑（外面上半に16cm×12cmの円形と胴部突対無の下半部に縦長のもの） |
| | | | 口縁外径 | 54.2 | 色調（内） | 暗赤褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 59 | （外） | 淡黄黄褐色 | | | |
| | | | 底径 | — | 焼成 | 良好 | | | |
| | 下層 | 大型壺 | 器高 | 63.3 | 胎土 | 石英・長石・角閃石・金雲母 | 口縁部は内側に張り出す未発達の下方口縁で中央部もL字形。胴部は丸みを帯び、ごさのない2条二角突帯で中央部。 | 調整は内面ヨコナデ。外面上部横方向ミガキ。内外ともやや風化が強み調整見にくい。 | 赤色スリップ（口縁部上部）。黒斑（内面全体と外面の底部） |
| | | | 口縁外径 | 55.9 | 色調（内） | 赤褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 66.3 | （外） | 淡黄褐色～赤褐色 | | | |
| | | | 底径 | 11.3 | 焼成 | 良好 | | | |
| K－4 | 上段 | 壺形土器 | 器高 | ＊23.3 | 胎土 | 長石・石英 | 頸部上を打ち欠きにより欠損。最大胴径部に高さのない1条二角突帯。 | 調整は内面ナデ。外面上部横方向ミガキ。内外ともやや風化が強み調整見にくい。 | 黒斑 |
| | | | 口縁外径 | 33.8 | 色調（内） | 褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 32.6 | （外） | 暗褐色 | | | |
| | | | 底径 | — | 焼成 | 良好 | | | |
| | 下段 | 壺形土器 | 器高 | ＊25.2 | 胎土 | 石英・長石・雲母・角閃石 | 頸部上は打ち欠きにより欠損。最大胴径部に高さのない1条二角突帯。底部は凹面。 | 調整は上部はヨコナデ下部は縦方向ミガキ。内面指押さえと底部強いナデ。 | 黒斑り |
| | | | 口縁外径 | 30.8 | 色調（内） | 淡褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 37 | （外） | 〃 | | | |
| | | | 底径 | 9.5 | 焼成 | 良好 | | | |
| K－5 | 上層 | 大型壺 | 器高 | 71.6 | 胎土 | 長石・石英・角閃石 | 口縁部は内外に強り出す丸L字口縁。胴部は丸みを帯び上半に最大胴径をもつ。突帯はやや高さのある三角突帯。底部は上げ底。 | 調整は胴上半はヨコナデ下部は縦方向にかきてコマ字状ナデ痕が残る。内面はナデ。粘土帯のつなぎ目に指ナデ痕。胴部内面の最大径の部位は凹面の痕跡が多く残る。 | 黒斑（外面上半に16cm×12cmの円形と胴部突対無の下半部に縦長のもの） |
| | | | 口縁外径 | 53.5 | 色調（内） | 黄褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 57.1 | （外） | 淡黄褐色 | | | |
| | | | 底径 | 11.4 | 焼成 | 良好 | | | |
| | 下段 | 大型壺 | 器高 | 67.3 | 胎土 | 長石・石英 | 口縁部は内側に厚みを持ち強り出す逆L字。突帯は胴部に高さのない2条三角突帯で上げ底を呈す。底部は凹。 | 調整は内外ともナデ。口縁部突帯付部ヨコナデ。突帯は内外面は凹面。粘土帯の幅は10cm～13cm四後。外面に成形時のシワ。 | 黒斑り（外面）。内面全体が黒ずた。黒斑（口縁部の一部と胴部下半外外面に一ヶ所）。 |
| | | | 口縁外径 | 62.3 | 色調（内） | 淡灰褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 63.3 | （外） | 暗黒褐色 | | | |
| | | | 底径 | 13.1 | 焼成 | 良好 | | | |
| K－6 | 上段 | 小型壺 | 器高 | 37.3 | 胎土 | 長石・石英 | 口縁部は水平で内側にやや発達した逆L字。頸部がやや伸びる。口縁下に最大径。突帯は幅上位。底部上げ底。 | 調整は内面下端ヨコナデ。底部は指押さえ。外面は縦方向ハケ目。口縁部はハケ目。ハケ目はやや下半部ヨコナデ。 | スス付着（口縁～頸部外面） |
| | | | 口縁外径 | 30 | 色調（内） | 淡灰褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 29.1 | （外） | 淡赤褐色～淡黄褐色 | | | |
| | | | 底径 | 7.9 | 焼成 | 良好 | | | |
| | 下段 | 小型壺 | 器高 | 36.1 | 胎土 | 長石・石英・角閃石 | 口縁部は水平な逆L字。中央部に発達。突帯はない。頸上下に最大径。底部は丸みのある上げ底。 | 調整は内面ナデ。胴部は指押さえ。外面は縦方向ハケ目。口縁部はヨコナデ。調整が雑い。 | スス付着（胴部外面中位） |
| | | | 口縁外径 | 29.7 | 色調（内） | 明赤褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 27 | （外） | 暗褐色 | | | |
| | | | 底径 | 7.2 | 焼成 | 良好 | | | |
| K－7 | 上段 | 小型壺 | 器高 | 35.5 | 胎土 | 角閃石・長石・石英 | 口縁部は未発達の内傾した逆L字口縁。口縁部頸部は胴部中位から下位に最大径。底部は凹。 | 調整は内面ヨコナデ。外面端はハケ目。口縁部はヨコナデ。外面は上部は上方、下部は下方からの調整。 | 黒斑（外面底部全体） |
| | | | 口縁外径 | 26.1 | 色調（内） | 淡黄褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 28.1 | （外） | 〃 | | | |
| | | | 底径 | 6.8 | 焼成 | 良好 | | | |
| | 下段 | 小型壺 | 器高 | 36.6 | 胎土 | 角閃石・長石・石英 | 口縁部はやや内傾する逆L字状。頸部は凹。口縁下にやや高さのある1条三角突帯。胴部上位に最大径。底部は上げ底。表面のすれが大きい。 | 調整は内面ナデ。胴部は上方ハケ目。外面は上方ハケ目。口縁部はヨコナデ。下半は縦方向ヨコナデ。粘土帯の幅は10cm前後。 | 黒斑（内面頸部付近、口縁部。外面底部全体） |
| | | | 口縁外径 | 26.4 | （外） | 〃 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 7.05 | 焼成 | 良好 | | | |
| K－8 | 単層 | 大型壺 | 器高 | 63.4 | 胎土 | 角閃石・長石・石英 | 口縁部は内側に張り出した逆L字状。頸部突帯はやや高さのあるシャープな一条三角突帯。底部はふみがない。 | 調整は内面下部ナデ。上半ハケ工具痕が所々残る。頸部はケズリ。外面はナデ。表面傾かい。 | 黒斑（外面半部、一ヶ所25×15cm凹い黒斑。外面上部2ヶ所3ヶ所、下半底部付近一ヶ所） |
| | | | 口縁外径 | 60.4 | 色調（内） | 淡灰色 | | | |
| | | | 頸部最大径 | 66.5 | （外） | 黄褐色 | | | |
| | | | 底径 | 12.2 | 焼成 | 良好 | | | |
| K－9 | 上段 | 大型壺 | 器高 | ＊63.8 | 胎土 | 石英・長石・角閃石 | 口縁部は外傾する。口縁部突帯付部下端は、やや内傾する。体部は胴部中央部丸みを帯びる。胴部突帯は高さのある三角一条突帯。 | 調整は内面ヨコナデ。口縁部突帯付部下端ヨコナデ。内面は強部に横ヨコ目を残す。外面は縦方向ミガキ。口縁部は横ヨコナデ。 | 黒斑（外面上半とその180度度対側の下半部の2ヶ所）口縁部内面を平滑だり。 |
| | | | 口縁外径 | 53.6 | 色調（内） | 暗褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 59.2 | （外） | 暗黄褐色 | | | |
| | | | 底径 | — | 焼成 | 良好 | | | |
| | 下段 | 大型鉢 | 器高 | 78.2 | 胎土 | 石英・長石・角閃石 | 口縁部はやや内傾する。胴上外部。体部は胴部中央部丸みを帯びる。底部は平滑。 | 調整は内外ともにナデ調整。口縁部突帯付部ヨコナデ。内面は横部に横ヨコ目を残す。外面は縦方向ミガキ。口縁部は横ヨコナデ。 | 黒斑（内面底部付近に1ヶ所。外面に180度対応して2ヶ所）。胴部に煤付。口縁部内面は平滑だり。 |
| | | | 口縁外径 | 58.9 | 色調（内） | 暗黄褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 63.2 | （外） | 淡赤褐色 | | | |
| | | | 底径 | 12.7 | 焼成 | 良好 | | | |
| K－10 | 上段 | 小型壺 | 器高 | 34.1 | 胎土 | 石英・長石・金雲母 | 口縁部はやや内傾する逆L字でやや内側に発達する。口縁部頸部は凹。最大径は上位。底部は丸みのある上げ底。 | 調整は内面上方ハケ目でつなぎ目の部分が指押さえ。外面は縦ハケ目。ハケ工具幅3cm。胴部外面には横部接合痕の指圧痕。 | 黒斑（内面頸部全体）赤色スリップ（口縁部上部） |
| | | | 口縁外径 | 27.4 | 色調（内） | 暗黄褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 26.8 | （外） | 淡赤褐色 | | | |
| | | | 底径 | 7.3 | 焼成 | 良好 | | | |

## 第3表　甕棺観察表②

| 遺物番号 | 部種 | | 法量（cm） | | 胎土・色調・焼成 | 形態的特徴 | 技法 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| K－10 | 下甕 | 壺形土器 | 器高 | 37.2 | 胎　土　石英・長石・角閃石 | 頸部上は付与されたように見える。最大胴径はやや下部にある。底部は胴部で膨みは薄い。図版実測は全体は第6－第10表 | 胴部は内面ナデ、外面は横ナデ。口縁部は横ナデ。 | 器壁が（内面ナデ、外面は横ナデ）。黒斑（外面底部全体） |
| | | | 口縁外径 | 26 | 色調（外）暗褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 42.7 | （内）暗色調は全体にある黒色－黒褐色 | | | |
| | | | 底径 | 8.5 | 焼　成　良好 | | | |
| K－11 | 上甕 | 大型壺形土器 | 器高 | ＊54 | 胎　土　石英・長石 | 大型壺の胴部突帯上を打ち欠いて上部として使用する。突帯は高さの約1/2を残存。底部は平底。丸底。 | 調整は内外面ヨコナデ。口縁部突帯貼付部ヨコナデ。内面に強さ－3.0cmの板状工具痕。突帯上に横方向の沈線。 | 胴上半打ち欠き。 |
| | | | 口縁外径 | ＊61.4 | 色調（外）赤褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | － | （内）赤褐色 | | | |
| | | | 底径 | 11.2 | 焼　成　良好 | | | |
| | 下甕 | 中型壺 | 器高 | 68.5 | 胎　土　石英・長石・金雲母・角閃石 | 口縁部は開脚に未発達の内傾する逆L字。体部は丸みを帯び頸部は上が広。突帯は高さのないL字二条突帯。口縁内側一周打ち欠き。 | 調整は内面横方向ヘラ削り。外面にヘラ工具痕。ヘラ工具は幅約4.0cm、1.0/1cm2反で、ナデ工具は内外ともに幅約2.5－3.0cm。胴部内面ヘラの最後取り痕。粘土帯幅5－7cm。 | 口縁部内側打ち欠き。黒斑（外部底部付近と内面底部一部紙）。外面上半に比較らしき痕 |
| | | | 口縁外径 | 44.5 | 色調（外）淡黄褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 50.6 | （内）暗黒褐色 | | | |
| | | | 底径 | 10.3 | 焼　成　良好 | | | |
| K－12 | 上甕 | 韓形土器 | 器高 | ＊22.9 | 胎　土　石英・長石・金雲母 | 口縁部はやや内傾に発達した逆L字上。頸部は凸面。口縁上に低い1条三角突帯。胴の張り は少ない。 | 調整は内面横方向ヘラ削り。口縁部は横ナデ。外面は横ヘラ突帯ヨコナデ。胴部上半縦方向ナデ、底部付近ナデ。ナデ。 | 器壁。内面底部付近、口縁部。外面胴部に広範囲 |
| | | | 口縁外径 | 49 | 色調（外）淡黄褐色・暗黒褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | － | （内）〃 | | | |
| | | | 底径 | － | 焼　成　良好 | | | |
| | 下甕 | 小型壺 | 器高 | 45.3 | 胎　土　石英・長石 | 口縁端は強く内傾する未発達の逆L字口縁。やや張る体みあり。口縁下に作だしの高さの低い1条三角突帯。胴上位に最大径。底部上げ。 | 調整は内面ナデ、外面横ヘラ磨ハケ目。ハケ方向は上端上から下半は下方向。口縁部、突帯部はヨコナデ。 | 赤色スリップ（口縁部形）。黒斑（内面底部全体と外面底部半分） |
| | | | 口縁外径 | 36.4 | 色調（外）淡黄褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 34.5 | （内）淡黄褐色 | | | |
| | | | 底径 | 8.3 | 焼　成　良好 | | | |
| K－13 | 上甕 | 大型壺 | 器高 | ＊52.8 | 胎　土　石英・長石・角閃石・雲母 | 口縁端は内外に張り出した水平な丸下帯L字で、中央部やや窪む。頸部突帯は高さのある一条三角突帯。 | 調整は内外ともにナデ調整。口縁部突帯貼付部ヨコナデ。頸部が膨くしっかりとした作りで、焼きも良い。粘土帯幅は1－1.5cm。 | 器壁。内面底部付近、口縁部。外面胴部に広範囲 |
| | | | 口縁外径 | 52.4 | 色調（外）明黄褐色～淡赤褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 56.9 | （内）〃 | | | |
| | | | 底径 | － | 焼　成　良好 | | | |
| | 下甕 | 壺形土器 | 器高 | ＊27.4 | 胎　土　長石・石英・角閃石 | 広口壺の特徴以上を打ち欠き、突帯部分が最大胴径で底部にかけて強くしまる。底部は凹面。胴部は強いL字三角突帯。 | 調整は内面横ヘラ削り。口縁部は底部付近は縦方向のヘラ削り。内面はナデ調整の跡の幅2.5－2.4cmの板状工具痕が。底部は指押さえ。 | 器片（胴部底部全体と外面底部半分） |
| | | | 口縁外径 | 42.4 | 色調（外）淡赤褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 43.6 | （内）暗赤褐色 | | | |
| | | | 底径 | 10 | 焼　成　良好 | | | |
| K－14 | 上甕 | 韓形土器 | 器高 | 37.1 | 胎　土　長石・石英・金雲母・角閃石子 | 口縁端は外部に張り出す逆L字状を帯L内傾する。頸部がやや窪り、直線にかけて下は第3、3条突帯は高さのないL条三角突帯。底部は上げ。 | 調整は内外ともに丁寧なナデ調整。口縁部突帯貼付部ヨコナデ。内面底部は指押さえ。底部は凹面。突帯貼付内面は凹面を呈す。 | 黒斑（内面底部付近と口縁部、外部は底部一部紙にかけて不定形のものある。 |
| | | | 口縁外径 | 45.5 | 色調（外）暗黄褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | － | （内）淡黄褐色 | | | |
| | | | 底径 | 10.4 | 焼　成　良好 | | | |
| | 下甕 | 大型壺 | 器高 | 84.3 | 胎　土　石英・長石・金雲母・角閃石 | 口縁端は水平で内側に強く出す逆L字状、外側へは未発達。体部は胴下半に最大径。突帯は低いL条三角突帯。底部は平底。 | 調整は内外丁寧なナデ調整。口縁部突帯貼付部ヨコナデ。内面底部は指押さえ。内面の一部に強さ－3.0cmの板状工具痕。また底部は平。 | 赤色スリップ（口縁部の胴部上端内面を除く）。黒斑（外面上半と下半は1部度到有な付属ピーク所ブ） |
| | | | 口縁外径 | 78 | 色調（外）淡黄褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 64.5 | （内）〃 | | | |
| | | | 底径 | 12.4 | 焼　成　良好 | | | |
| K－15 | 上甕 | 韓形土器 | 器高 | 30.6 | 胎　土　石英・長石・角閃石・雲母粒子 | 口縁部は未発達の逆L字。頸部は膨む。口縁下に低い1条三角突帯。底部は厚みのある上げ底。 | 調整は内外丁寧なナデ。口縁部突帯貼付はヨコナデ。底部内面指押さえとナデ工具痕が残る。胴中位に接内補が明瞭。 | 黒斑（外面底部全域～片面完形部まで） |
| | | | 口縁外径 | 42.8 | 色調（外）暗褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | － | （内）黄褐色～暗褐色 | | | |
| | | | 底径 | 9.4 | 焼　成　良好 | | | |
| | 下甕 | 小型壺 | 器高 | 50.5 | 胎　土　石英・長石・金雲母・角閃石 | 口縁部は内傾する逆L字。口縁下にシャープな1条三角突帯。頸部は膨みがある。胴部上位に最大径。器壁が薄い。 | 調整は内外ともに丁寧なナデ。口縁部突帯貼付部ヨコナデ。突帯貼付内面は凹面。外部突帯は底部付近下から、上半は上から下。3.8cm/cm幅ハケ。 | 黒斑（内面底部全体と口縁部一部） |
| | | | 口縁外径 | 39 | 色調（外）灰褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 37.4 | （内）淡黄褐色～黄褐色 | | | |
| | | | 底径 | 9.2 | 焼　成　良好 | | | |
| K－16 | 上甕 | 大型壺 | 器高 | 91.9 | 胎　土　長石・石英・角閃石 | 口縁部はやや内側に張り出す未発達の逆L字。やや張る。口縁端部は厚み。胴部突帯は低い貼付2条三角突帯。底部は若干上げ底。 | 調整は胴部の膨してその用。頸部上に新鮮が残り。内面ナデ。胴部上半に縦付左に内部のものの2ヶ所。 | 黒斑（外面底部全体とその周辺と胴部上半に縦付左に内部のものの2ヶ所）。 |
| | | | 口縁外径 | 67.5 | 色調（外）黄白色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 69.9 | （内）〃 | | | |
| | | | 底径 | 11.2 | 焼　成　良好 | | | |
| | 下甕 | 大型壺 | 器高 | 96.2 | 胎　土　長石・石英・角閃石 | 口縁部はやや内側に張り出す未発達の逆L字。やや張る。口縁端部は厚みがある。胴部上位に最大径。底部は平上げ底。 | 調整は長石が強くて不明。頸部に対して横方向のナデ。口縁部突帯貼付部ヨコナデ。突帯貼付内面は凹面。外部突帯は底部付近下から、上半は上から下。3.8cm/cm幅ハケ。 | 黒斑（外面胴中央部突帯付近）。黒斑（底部外面全面と胴上半部と内部のものの2ヶ所） |
| | | | 口縁外径 | 76 | 色調（外）暗黄褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | － | （内）黄褐色～淡褐褐色 | | | |
| | | | 底径 | 11.8 | 焼　成　良好 | | | |
| K－17 | 上甕 | 韓形土器 | 器高 | 30.8 | 胎　土　長石・石英・角閃石 | 頸部上を打ち欠きにより欠損。最大胴径部に強さのない1条三角突帯。頸部膨ら。底部にかけてしまる。底部凹面でやや中心。 | 調整は内面横1.2cmの工具を用いてナデ調整。外面横方向ミガキ。底部付近はヨコナデ。ミガキ。コゲミガキ。ヨコミガキ強ナミガキを施す。 | 黒斑（外面）。黒斑に良好に痕跡。黒斑（外面底部全体、内部胴下半に一部） |
| | | | 口縁外径 | 38.2 |色調（外）〃 | | | |
| | | | 胴部最大径 | － | （内）〃 | | | |
| | | | 底径 | 8.3 | 焼　成　良好 | | | |
| | 下甕 | 小型壺 | 器高 | 46.4 | 胎　土　長石・石英・角閃石 | 口縁部は内傾するやや未発達の逆L字。口縁下に低いシャープな2条三角突帯。頸部凸状。底部は厚みのある上げ底。 | 調整は内面ナデ。頸部指押さえ。外面横ヘラ磨。底部付近はやや縦ヘハケ。口縁部、突帯部ヨコナデ。 | スス付着（胴中位）。黒斑（内面底部下半と接中位。外面底部半分） |
| | | | 口縁外径 | 38.4 | 色調（外）暗赤褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 34 | （内）淡赤褐色・暗赤褐色 | | | |
| | | | 底径 | 8.3 | 焼　成　良好 | | | |
| K－18 | 上甕 | 韓形土器 | 器高 | 39.8 | 胎　土　長石・石英・角閃石・黒鉱粒子 | 口縁端内傾とL字形はやや鋭すぎ。頸部は凸状。口縁上のまま長く強く。頸部突帯は高さの低い1条三角突帯。一番下の張りすぎている。長胴はやや短く。 | 調整は内面ヨコナデ。頸部指押さえ。外面横ヘラ磨。口縁部付近はやや縦ヘハケ。底部内面ともにナデ。 | 黒斑（内面底部の底部全域） |
| | | | 口縁外径 | － | 色調（外）淡黄褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | － | （内）淡赤褐色 | | | |
| | | | 底径 | 13.4 | 焼　成　良好 | | | |
| | 下甕 | 大型壺 | 器高 | 93.5 | 胎　土　長石・石英・角閃石 | 口縁端は内傾にやや鋭すぎ未発達の逆L字。やや内張る。口縁端部内面は広。胴部上半部でやや膨らみを持つ。頸部突帯は高さの低いL条三角突帯。底部は平底。 | 調整は口縁部上突帯貼付部分のみヨコナデ。底部内外面ともにナデ。その他は無調整。 | 黒斑（外面上下2ヶ所、下半1ヶ所） |
| | | | 口縁外径 | 65.6 | 色調（外）淡褐褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 73.3 | （内）〃 | | | |
| | | | 底径 | 12.8 | 焼　成　良好 | | | |

## 第4表　鏡相観察表③

| 遺物番号 | 器種 | | 遺出(cm) | 胎土・色調・硬成 | | 形態的特徴 | 技法 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| K-19 | 上層 | 鉢形土器 | 器高 | 35.1 | 胎土 | 長石・石英・角閃石・赤褐色粒子 | 口縁部は開にやや張り出すが明確な屈折なく、口縁下にシャープな1条三角突帯。突帯部内面はやや張り出す。 | 調整は底部と内面にナデ。口縁部は横ナデ。外面は縦ハケ。 | 赤色スリップ（口縁部第一内面深部）。黒斑（内面底部金体） |
| | | | 口縁外径 | 41.6 | 色調(内) | 淡赤褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | — | (外) | 淡黄褐色 | | | |
| | | | 底径 | 9.3 | 焼成 | 良好 | | | |
| | 下段 | 小型壺 | 器高 | 46.6 | 胎土 | 長石・石英 | 口縁部は平坦で内側にやや張り出しをもつ逆L字状口縁。突帯は1条三角突帯でシャープ。胴部高く、長手胴出だがは緩平部。 | 調整は内面上半はナデ。外面縦ハケ目。胴下1/3～4cmは細かいハケ目。口縁部、突帯部はヨコナデ。 | 赤色スリップ（口縁部第一内面底部）。黒斑（底部～口縁部平面） |
| | | | 口縁外径 | 40.1 | 色調(内) | | | | |
| | | | 胴部最大径 | 38.6 | (外) | | | | |
| | | | 底径 | 8.6 | 焼成 | 良好 | | | |
| K-20 | 上段 | 大型壺 | 器高 | 78.1 | 胎土 | 長石・石英・赤黄褐 | 口縁部は内側に突出し肩あがる。頸部突帯は2条。角突帯で高さがある。 | 調整は不明。器壁が厚くやや作りが悪い。 | 黒斑は内面底部金域。 |
| | | | 口縁外径 | 63.8 | 色調(内) | 赤褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 65.8 | (外) | 黄褐色 | | | |
| | | | 底径 | — | 焼成 | 良好～やや悪い | | | |
| | 下層 | 大型壺 | 器高 | ＊78.7 | 胎土 | 長石・石英・金雲母 | 口縁部は内外に発達した下ブク口縁。頸部突帯は2条のある。角三角突帯。 | 調整は内外ともに丁寧なナデ。口縁部突帯部付加コヨナデ。胴部外面の調整は比べて薄く作りの良い壺。 | 黒斑（胴部に不鮮明のもの） |
| | | | 口縁外径 | 67.4 | 色調(内) | 赤褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | — | (外) | 〃 | | | |
| | | | 底径 | — | 焼成 | 良好 | | | |
| K-21 | 上段 | 大型壺 | 器高 | ＊82.1 | 胎土 | 長石・石英・金雲母 | 口縁部は若干未発達の下ブク口縁でやや内傾する。肩部はやや丸みを持ち突帯は高さのある2条三角突帯である。 | 調整は内外ともナデで内面口縁部付近のヨコナデ。口縁部は横ナデ。胴部はナデ。 | 黒斑（内外胴の底部全体と外面口縁部付近） |
| | | | 口縁外径 | 66.6 | (外) | 〃 | | | |
| | | | 胴部最大径 | — | 焼成 | 良好 | | | |
| | 下段 | 大型壺 | 器高 | 87.7 | 胎土 | 長石・石英・金雲母 | 口縁部は未発達の下ブク。強く内傾する。頸部突帯は2条。角突帯。底部は底でやや張り出がある。口縁端部が薄い。 | 調整は内外ともにナデ。口縁部突帯付加コヨナデ。外面底部に丁寧なヨコハケ。胴部はヨコハケ目が残る。粘土帯接合部ははっきり残る。 | 黒斑（胴部金域） |
| | | | 口縁外径 | 67.8 | 色調(内) | 黄褐色～淡赤褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 69.2 | (外) | 〃 | | | |
| | | | 底径 | 11.7 | 焼成 | 良好 | | | |
| K-22 | 上段 | 大型壺 | 器高 | ＊43.2 | 胎土 | 長石・石英・黒色粒子 | 口縁部は発達した下ブク。中央部ブク。口縁部はやゆいぶつ。頸部突帯はやや低い一条三角突帯。突帯貼付部内面は凸部。 | 調整は内外ともにナデ。口縁部突帯貼付部コヨナデ。口縁部成形時の指の痕跡が胴部内外面に残存。 | 黒斑（内面口縁部～胴部金域） |
| | | | 口縁外径 | 55 | 色調(内) | 淡黄褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 55.4 | (外) | 淡赤褐色 | | | |
| | | | 底径 | — | 焼成 | 良好 | | | |
| | 下段 | 大型壺 | 器高 | 87.5 | 胎土 | 長石・石英・角閃石 | 口縁部は内側に張り出した逆L字状でやや外傾。頸部がやや丸みを帯びた形態。頸部突帯は高さ1条角突帯。底部は平底。 | 調整は内外ともにナデ。調整で内面胴部はナデ状の痕跡と他は板状工具のナデ痕とがナデが残る。口縁部突帯部付加コヨナデ。 | 黒斑（内面口縁部～胴部の一部）。外面180度対応して大きめの不鮮明ものもの(2ヶ所) |
| | | | 口縁外径 | 55.3 | 色調(内) | 暗赤褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 60.1 | (外) | 〃 | | | |
| | | | 底径 | 12 | 焼成 | 良好 | | | |
| K-23 | 上段 | 大型壺 | 器高 | 87.4 | 胎土 | 長石・石英・金雲母 | 口縁部はやや内側に強く突出した未発達の下ブク口。頸部突帯は細い1条一条突帯。底部はやや上げ底 | 調整は内外ともにナデ。口縁部突帯付加コヨナデ。 | 黒斑（内面胴部に円形のもの、外面180度対応して大きめの不鮮円形のものの(2ヶ所) |
| | | | 口縁外径 | 64.8 | 色調(内) | 暗黄褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 64 | (外) | 赤褐色 | | | |
| | | | 底径 | 11.7 | 焼成 | 良好 | | | |
| | 下段 | 大型壺 | 器高 | 82.4 | 胎土 | 石英・長石・金雲母・角閃石 | 口縁部は内外に発達した下ブク口縁で内傾。肩部突帯は細いシャープな一条三角突帯。底部は平底 | 調整は内外ともナデで内外面に同心円状の3.5～3.0cmは細かい横状工具痕。口縁部突帯部付加コヨナデ。底部は指押さえ。粘土帯接合部0.0cm。 | 口縁部赤色スリップ。黒斑り（内面上半、外胴部上半）。黒斑（外面底部平分と底部付近） |
| | | | 口縁外径 | 56 | 色調(内) | 灰白色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 66.5 | (外) | 淡黄褐色 | | | |
| | | | 底径 | 11.2 | 概成 | 良好 | | | |
| K-24 | 上段 | 大型壺 | 器高 | ＊26.8 | 胎土 | 長石・石英 | 口縁部は内側に張り出した逆L字状口縁でやや外傾。 | 調整は内外ともにナデ。口縁部突帯付加コヨナデ。一部外面胴部にハケ目が残る。 | 黒斑り（口縁部～胴部） |
| | | | 口縁外径 | 45.5 | 色調(内) | 淡黄褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | — | (外) | 淡赤褐色 | | | |
| | | | 底径 | — | 焼成 | 良好 | | | |
| | 下段 | 大型壺 | 器高 | 91.6 | 粘土 | 石英・長石・金雲母・角閃石 | 口縁部は内側にやや強く出した逆L字状口縁でやや外傾。口縁上部内傾。頸部突帯はシャープな一条三角突帯。底部は平底 | 調整は内外ともにナデ。口縁部突帯貼付部コヨナデ。底部に一部ハケ目が残る。内面底部は指押さえ。底部ヘラ。 | 黒斑（外面胴部中位と下方。180度対応） |
| | | | 口縁外径 | 65 | 色調(内) | 淡黄褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 73.2 | (外) | 〃 | | | |
| | | | 底径 | 9.5 | 概成 | 良好 | | | |
| K-25 | 上段 | 鉢形土器 | 器高 | ＊10 | 粘土 | 長石・石英・金雲母 | 口縁部はやや内傾に発達した陸状口縁で厚みがある。口縁端部はやや深く。頸部突帯はシャープな細い三角突帯。 | 調整は外面ナデ。内面は横方向のミガキ。口縁部突帯貼付部コヨナデ。 | 黒斑り（口縁上面～内面） |
| | | | 口縁外径 | 53 | 色調(内) | 暗赤褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | — | (外) | 〃 | | | |
| | | | 底径 | — | 焼成 | 良好 | | | |
| | 下段 | 大型壺 | 器高 | 91 | 粘土 | 石英・長石 | 口縁部は内側にやや張り出した下ブク口縁でやや内傾。口縁部内は国。突帯は幅1～2条三角突帯。底部は平底で厚みがある。 | 調整は内外ともナデ。口縁部突帯付加コヨナデ。 | 黒斑り（胴部突帯付近）。無斑（内面全域剥元部。外面底部と口縁外周に不定形） |
| | | | 口縁外径 | ＊83.7 | 色調(内) | 淡灰褐色、灰色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | ＊66.5 | (外) | 黄白色 | | | |
| | | | 底径 | 10.6 | 概成 | 良好 | | | |
| K-26 | 上段 | 小型壺 | 器高 | ＊30.8 | 粘土 | 長石・石英・角閃石・雲母 | 口縁部はやや内傾する逆L字状。口縁上部に高さの低い三角一条突帯。胴部上位がやや張る。 | 調整は内面底部は横ハケ。口縁部突帯付加コヨナデ。 | 黒斑り（胴部突帯付近）。無斑（内面全域剥元部。外面底部と口縁外周に不定形） |
| | | | 口縁外径 | 30 | 色調(内) | 暗褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 37.2 | (外) | 〃 | | | |
| | | | 底径 | — | 焼成 | 良好 | | | |
| | 下段 | 小型壺 | 器高 | ＊26.3 | 粘土 | 長石・石英・角閃石・雲母 | 口縁部は強かに内傾する逆L字状。口縁上に細くシャープな1条三角突帯。胴部上位に最大径。 | 調整は内面胴部ナデ。外面縦ハケ。口縁部突帯付加コヨナデ。 | 黒斑り（内面胴部～口縁部） |
| | | | 口縁外径 | 32.5 | 色調(内) | | | | |
| | | | 胴部最大径 | 37.1 | (外) | | | | |
| | | | 底径 | — | 焼成 | 良好 | | | |
| K-27 | 単独 | 小型壺 | 器高 | ＊26.1 | 粘土 | 長石・石英・角閃石 | 口縁部は内側する未発達の逆L字。口縁下に細いシャープな1条三角突帯。胴部最大径は胴中位。 | 調整は内面ナデ。外面縦ハケ。口縁部突帯部付加コヨナデ。口縁下に突帯部はコヨナデ。口縁下につなぎ目。 | 突帯下から胴部にかけてスス付着。 |
| | | | 口縁外径 | 36.4 | 色調(内) | 暗灰褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 37.1 | (外) | 暗灰褐色 | | | |
| | | | 底径 | — | 焼成 | 良好 | | | |

## 第5表　甕棺観察表④

| 遺物番号 | 墓種 | 棺種 | 棺量（cm） | | 胎土・色調・焼成 | 形態的特徴 | 技法 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| K－28 | 上甕 | 鉢形七段 | 器高 | 27.3 | 胎　土 | 長石・石英・角閃石・金雲母 | 口縁部は内傾する未発達の逆上甲。口縁下突帯は作り出しの1条三角突帯。底部は平底。胴部が膨らむ。 | 調整は内面ナデ、底部指押さえ。外面底部ケラナガキ。胴部は、口縁部と突帯部はヨコナデ。 | 黒焼き？（別ト平に黒色部剥ラ）。風雨（内面底部付近、外面胴状黒部） |
| | | | 口縁外径 | 41.9 | 色調(内) | 暗褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | － | (外) | 黄白色 | | | |
| | | | 底径 | 10 | 焼　成 | 良好 | | | |
| | 下甕 | 小型壺 | 器高 | 42.1 | 胎　土 | 長石・石英・角閃石・金雲母 | 口縁部は内傾する未発達の逆上甲。口縁下にシャープな1条三角突帯。胴部上部に最大径。底部は緩内傾の為上げ底。小さな底部。 | 調整は内面ナデ、外面縦ハケ目。上部風化（風蝕）。口縁部、突帯部はヨコナデ。 | スス付着（胴部上甲）黒焼（内面底部～胴上位） |
| | | | 口縁外径 | ＊37.2 | 胎　土 | 長石・石英・角閃石 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 54.3 | (外) | 黒色 | | | |
| | | | 底径 | 11.2 | 焼　成 | 良好 | | | |
| K－29 | 単棺 | 大型甕 | 器高 | ＊10.7 | 胎　土 | 長石・石英・赤褐色粒子 | 胴部に緩いシャープな1条三角突帯。我ひが大変厚い。 | 調整は内外とも風化して不明。 | 黒焼（内面底部～胴部にかけて、外面底部部分） |
| | | | 口縁外径 | － | 色調(内) | 淡黄褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 37 | (外) | 〃 | | | |
| | | | 底径 | － | 焼　成 | 良好～やや悪い | | | |
| K－30 | 単棺 | 広口壺 | 器高 | 76.4 | 胎　土 | 石英・長石 | 口縁部は外側に発達した下突帯でやや内傾。1条三角突帯。胴部突帯は細くシャープな一条三角突帯。最大径は下寄り。 | 調整は内外ナデ。内面の胴部と外面底部に一部ハケ目残る。内面に幅約2.6cmのナデ工具痕。外面底部縦のケア。 | 黒焼り（胴部に広範囲）。 |
| | | | 口縁外径 | 62.6 | 色調(内) | 暗黄褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 69 | (外) | 与黒褐色 | | | |
| | | | 底径 | 10.8 | 焼　成 | 良好 | | | |
| K－31 | 単棺 | 大型甕 | 器高 | ＊34.1 | 胎　土 | 石英・長石 | 胴部上下が膨る。底部はやや上げ底がみられるもは底でもない。 | 調整は風化しているが内面ナデ、外面縦ハケ。外面底部はハケ目の下に指押さえの痕跡あり。下甲と上甲のハケ工具の異なる。 | スス付着（最大胴径より上に付着）。黒焼（外面底部全体） |
| | | | 口縁外径 | － | 色調(内) | 暗黄褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 33.7 | (外) | 〃 | | | |
| | | | 底径 | 8 | 焼　成 | 良好 | | | |
| K－32 | 下甕 | 小型壺 | 器高 | 49.2 | 胎　土 | 石英・長石・角閃石 | 口縁部は平坦で内側にやや張り出しをもつ逆L字状口縁。底部にへラ状工具の斜角目が入る。突帯は長方角突帯でシャープ。底部石平上げ底。 | 調整は内面風化底部に一部横ハケ目。口縁部ヨコナデ。底部の厚み薄い。 | 黒焼（外面底部～口縁不定形。内面同じ位置に不定形） |
| K－33 | 上甕 | 鉢形土器 | 器高 | 87 | 色調(内) | 黄白色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | － | (外) | 暗黄褐色 | | | |
| | | | 底径 | 14.5 | 焼　成 | 良好 | | | |
| | 下甕 | 大型壺 | 器高 | 84.1 | 胎　土 | 石英・長石・角閃石 | 口縁部は内外に発達し外張する下半口縁で凹みがある。口縁端部無頓台。胴部突帯は三角～長突帯。は底平底で厚い作り。 | 調整は内外ともナデ。口縁部突帯貼付部ヨコナデ。外面に約2.5cm幅板状工具痕。 | 赤色スリップ（口縁部突上部）。風雨り（口縁部にタール状、内面付着）。黒焼（外面下部全体黒変色。底部には中位や中ゃ小さめの定形のもの） |
| | | | 口縁外径 | 59.8 | 色調(内) | 暗褐色～黒褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | － | (外) | 暗褐色 | | | |
| | | | 底径 | 10.2 | 焼　成 | 良好 | | | |
| K－34 | 上甕 | 小型壺 | 器高 | 48.1 | 胎　土 | 長石・石英・角閃石・雲母 | 口縁は内傾し内面にもやや発達した逆上甲。胴部は細長。最都は細く下寄りの低い1条三角突帯。底部かかりは細くしまり。厚みのある上げ底。胴部薄い。 | 調整は内面風化。外面やや荒めのハケ目。風化が激しく、薄い状態。 | スス付着（外面全体）黒焼（外面底部半分） |
| | | | 口縁外径 | 35.1 | 色調(内) | 暗茶褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 37 | (外) | 明赤褐色 | | | |
| | | | 底径 | 8.5 | 焼　成 | 良好～やや悪い | | | |
| | 下甕 | 小型壺 | 器高 | 49.3 | 胎　土 | 長石・石英・角閃石・雲母 | 口縁部は水平な逆L字。突帯は口縁下にシャープな1条三角突帯。ない。胴上半に最大径。底部は厚みのある上げ底。 | 調整は内面ナデ。頸部付近は指押さえ。外面縦方向ハケ目。工具幅3.1cm。口縁部、突帯部はヨコナデ。 | スス付着（口縁部～胴部上半）。黒焼（内外底部黒変部） |
| | | | 口縁外径 | 39.2 | 色調(内) | 淡黄褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 39.5 | (外) | 淡黒褐色 | | | |
| | | | 底径 | 9.7 | 焼　成 | 良好 | | | |
| K－35 | 単棺 | 小甕壺 | 器高 | 51.6 | 胎　土 | 長石・石英・角閃石 | 口縁部は厚みのある突帯逆L字。底部は凸面。口縁下突帯は1条三角突帯。底部は厚みのある上げ底。胴部は厚い。 | 調整は内面ナデ。外面5～7本／cmの目の粗ハケ目。口縁部、突帯部ヨコナデ。突帯部内面は凸面。 | 黒焼（外面底部全体と内面胴部下位に横円形） |
| | | | 口縁外径 | 39.7 | 色調(内) | 黄褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 39.9 | (外) | 〃 | | | |
| | | | 底径 | 9.5 | 焼　成 | 良好 | | | |
| K－36 | 上甕 | 広口壺 | 器高 | ＊38.4 | 胎　土 | 長石・石英・角閃石 | 最大径に細くてシャープな胴部突帯を貼付。底部はすぼまり強くすっきりとしている。 | 調整は内面はナデ。胴部は指押さえ。幅1.0cm と3.0cm の種類の工具を使い分けている。外面は縦方向（ガキ状胴部付近は横方向）ケガキ。 | 風塵り（胴部打ち欠き部分一周） |
| | | | 口縁外径 | － | 色調(内) | 淡灰褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 57.3 | (外) | 暗黄褐色 | | | |
| | | | 底径 | － | 焼　成 | 良好 | | | |
| | 下甕 | 大型壺 | 器高 | 86.6 | 胎　土 | 長石・石英・角閃石・金雲母 | 口縁部は急角度の凸成を前の内面の金雲はない。口縁端部に断面凸。強く内傾。胴部突帯は低く緩みがあまい。底部上げ底。全体的にいびつ。 | 調整は内面はハケ目。口縁部は強く横ハケ目。強く内傾。口縁部突帯はスス付着。外面は横方向ハケ目。下甲と上甲のハケ工具の異なる。 | 風塵り（外面突帯～胴部）。黒焼（外面不定形大型黒変と180度以対面に小さな円形の黒焼） |
| | | | 口縁外径 | 55.1 | 色調(内) | 淡褐黄褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 64.5 | (外) | 〃 | | | |
| | | | 底径 | 11.5 | 焼　成 | 良好 | | | |
| K－38 | 上甕 | 大型鉢形甕 | 器高 | ＊23.5 | 胎　土 | 長石・石英・角閃石・金雲母 | 胴部突帯は細いシャープな3条三角突帯。最突帯がやや厚い。 | 調整は内外ナデ。突帯部ヨコナデ。内面ナデ工具の斜目が残る。突帯下に約6cm。打ち欠き部は外から内側方向。 | 黒焼（外面不定形大型黒変）。黒焼（外面不定形大型黒変と180度以対面に小さな円形の黒焼） |
| | | | 口縁外径 | ＊22.2 | 色調(内) | 明黄褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 62 | (外) | 〃 | | | |
| | | | 底径 | － | 焼　成 | 良好 | | | |
| | 下甕 | 大型壺 | 器高 | 85＋α | 胎　土 | 長石・石英・角閃石・金雲母 | 口縁部は内側に大きく張り出した逆L字。口縁端部は薄く面部は凹面。胴突突帯はシャープな一条三角突帯。 | 調整は内外丁寧なナデ。口縁幅2cmと1.2cmの2種類の工具痕。外面中位に横方向の皮痕。底部時のシワ。 | 赤色スリップ（外面は上半、口縁）。黒焼（内外同じ位置に不規形の大き目の黒焼） |
| | | | 口縁外径 | 65.5 | 色調(内) | 淡黄褐色 | | | |
| | | | 胴部最大径 | 64.7 | (外) | 〃 | | | |
| | | | 底径 | － | 焼　成 | 良好 | | | |

（法量の＊印は、残存高を示す）

② 土壙墓

計14基の土壙墓を検出した。掘方が幅広く方形に近いA類、縦長の長方形プランのB類、その中間形態のC類に大別され、時期的にはA類が甕棺墓に先行し、B類は甕棺墓に後続する傾向が認められる。A類は墓としての確証に乏しいが、周辺に当該期の生活遺構は確認されておらず、墳墓と祭祀土坑のみであること、また、祭祀土坑とするには坑内から遺物の出土もなく、埋土の汚れもないことから土壙墓と推定した。主体部が木棺墓である可能性もある。各遺構については留意点のみ簡潔に記載するに留める。

**39号墓（図版9－c、第23図）**

1号墓の東に位置し、1号墓、1号祭祀土坑に切られる。平面形はC類とした。甕棺墓に先行して掘られている。

**40号墓（第23図）**

9号墓の北に位置する。平面形はA類に属する。墓壙内からは木棺の痕跡は確認できなかった。

**41号墓（図版9－d、第23図）**

9号墓の南を切って掘り込まれている。平面形はB類に属する。

**42号墓（図版9－e、第23図）**

13号墓の南側に並んで掘られていた。A類に属する。

**43号墓（図版9－d、第23図）**

33号墓の北に2mほど離れたところに掘られた土壙墓で、7号祭祀土坑を切る。掘り方は西側がやや広がり気味の楕円形プランである。平面形はB類に属する。

**44号墓（図版9－e、第23図）**

16号甕棺墓の北東に掘られた土壙墓である。平面形はB類に属する。

**45号墓（図版9－f、第24図）**

墓群の北西端部、20号甕棺墓の北東で検出した。平面形はB類に属する。墓壙の西側に1次墓壙の痕跡をとどめている。

**46号墓（図版9－g、第24図）**

22号甕棺墓を切って掘り込まれている。平面形はC類に属する。

**47号墓（図版9－h、第24図）**

22号甕棺墓の北にほぼ並行して掘られている。平面形はB類に属する。

**48号墓（図版10－c、第24図）**

15号甕棺墓に切られる。平面形はC類に属する。

**49号墓（第25図）**

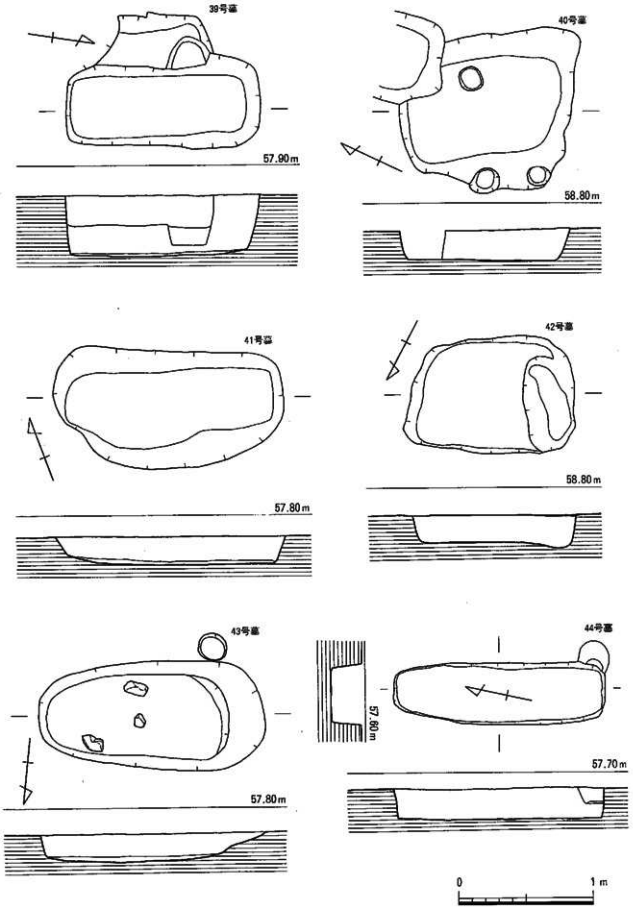
2段に掘り込まれた土坑の下段に長さ116cm、幅42cm、深さ22cmの箱形木棺の痕跡を確認した。

**50号墓（第25図）**

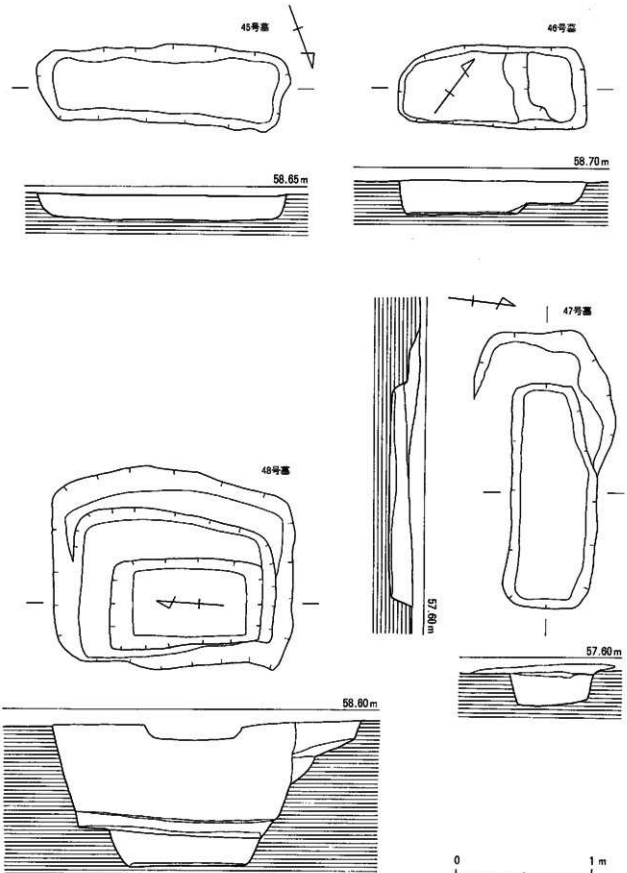
28号墓の南に並んで出土した。周辺に攪乱があり、墓壙の有効長は140cmほどである。

**51号墓（図版10－a、第25図）**

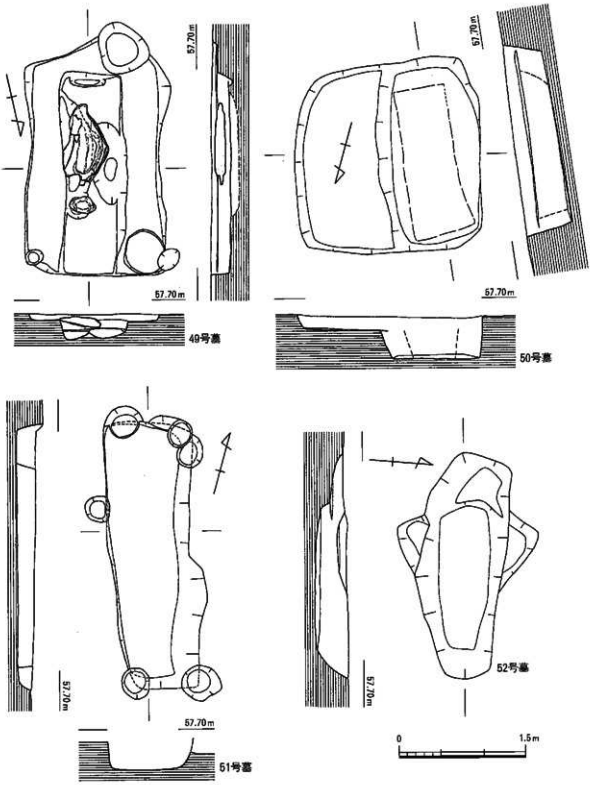
53号墓に切られる。断面は蒲鉾形を呈しており、刳貫形木棺を納めた可能性がある。




第22図　39～44号墓実測図（1/30）



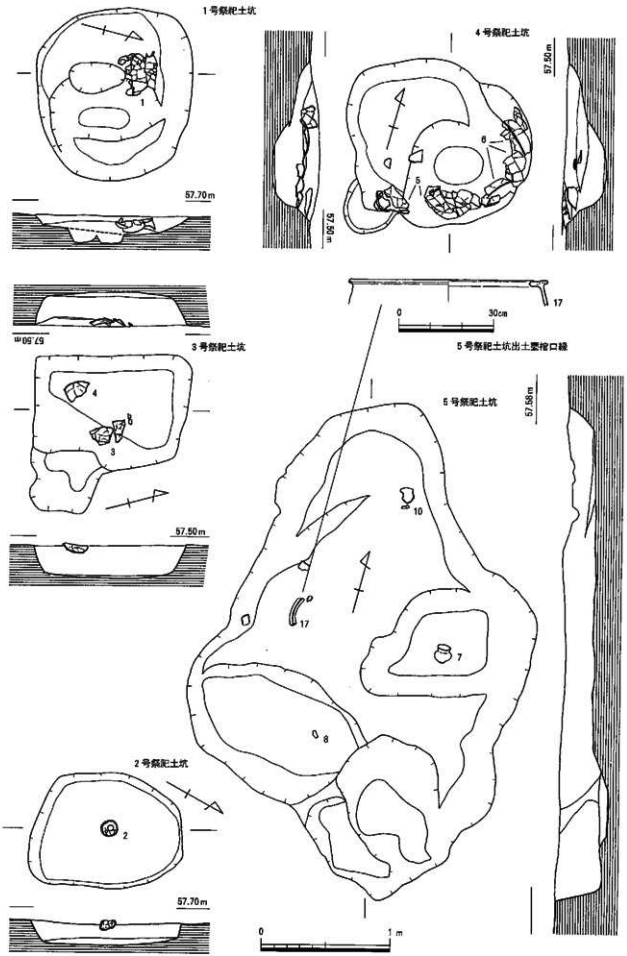

第23図　45～48号墓実測図（1/30）



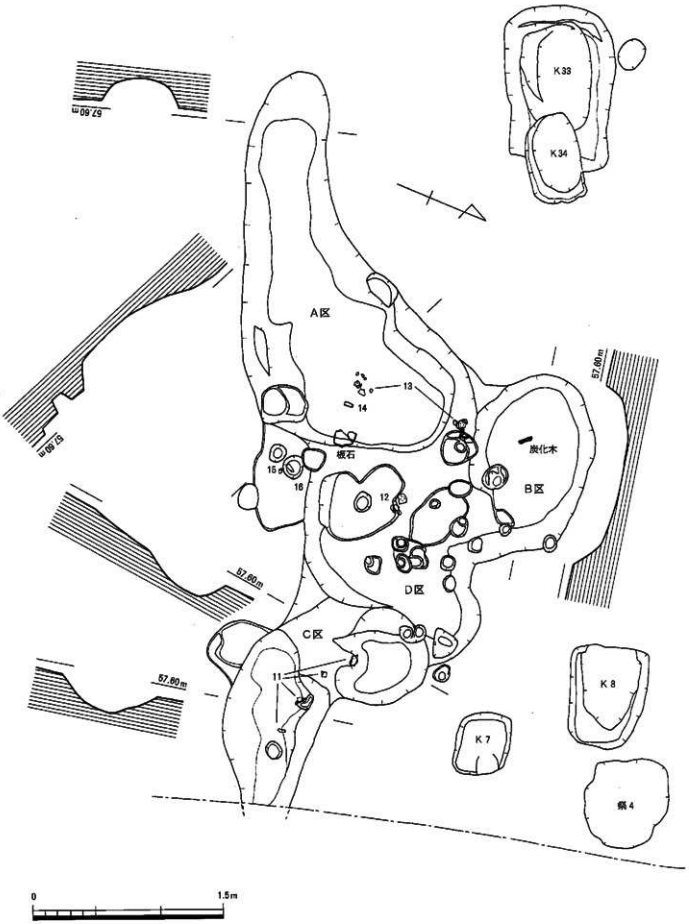

第24図　49～52号墓実測図（1/30）

**52号墓（図版10－b、第25図）**

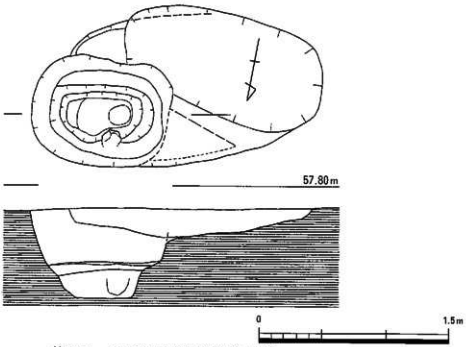
墓群の北端でやや離れた位置で検出した。長方形プランの1次墓壙の中央に長さ160㎝、幅50㎝の2次墓壙がある。2次墓壙の南木口部、東西側縁部にも溝状の掘り込みがあり、墓壙内から結晶片岩の板石が出土していることから、土体部は箱式石棺であったと推定される。




第25図　1～5号祭祀土坑実測図（1/30）




第26図　6号祭祀土坑実測図（1／30）




第27図　7号祭祀土坑実測図（1/30）

③　祭祀土坑

墳墓群に伴う祭祀土坑を7基検出した。1～6号土坑は土器廃棄土坑、7号土坑は木柱樹立坑である。出土した土器量は少量である。

**1号祭祀土坑（図版10－d、第26図）**

1号墓の東に隣接して検出した。長さ135cm、幅119cm、深さ15cmを測る。底面から横倒しの状態で広口壺が出土した。

**2号祭祀土坑（図版10－e、第26図）**

41号墓の北で検出した長さ145cm、幅126cm、深さ33cmの不整長方形プランの土坑である。

土坑中央部の、埋土の中層から口頸部を打ち欠いたミニチュアの広口壺1個が出土した。

**3号祭祀土坑（図版10－f、第26図）**

25号墓の東で検出した長さ145cm、幅126cm、深さ33cmの長方形プランの土坑である。埋土中層から破砕された2個体分の広口壺の胴部片が出土した。

**4号祭祀土坑（図版10－g，11－a、第26図）**

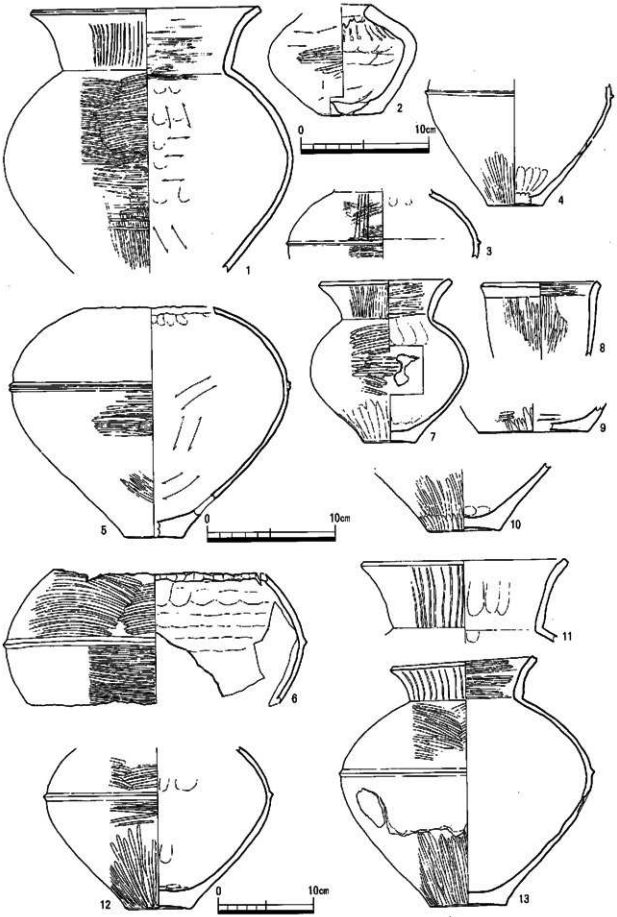
8号墓の東に隣接して検出した。長さ114cm、幅90cm、深さ18cmで、2段に掘り込まれている。土坑の南から南東縁辺にかけて破砕した2個の広口壺胴部の破片を丁寧に埋納していた。特に第28図4－2は胴部片を横方向に展開するように並べて置かれていた。

**5号祭祀土坑（図版11－b、第26図）**

2～5号甕棺墓群の東で検出した南北長5.2m、幅3.6m、深さ68cmの平行四辺形プランの土坑である。底面には南部に2箇所、東部に1箇所の不整形の深まりがあり、いくつかの土坑の切り合いも想定されたが、土層観察等では確認することができなかった。埋土からは、東部深みの直上から完形の広口壺、中央部底面から打ち欠いた甕棺口縁片、南部底面から鉢片などが出土した。

**6号祭祀土坑（図版12－a～e、第27図）**

墓群の南東部、10号甕棺墓の南から33号甕棺墓の南にかけて検出した、蛇行しながら溝状に延び




第28図　祭祀土坑出土土器実測図（1/4）

る土坑である。平面プランは不整形で、B区では底面に不整形の深まりがあるなどから5号祭祀土坑と同様に数基の土坑の切り合いかとも推定されたが、土層観察では明瞭な切り合い関係を見い出すことはできず、また、A、B区の土器片が互いに接合したことなどから、ほぼ同時期に掘削された遺構と推定した。仮に切り合いを有していたとしてもその時間差はきわめて短いものと考える。

A区は33、34号墓を巡るように弧を描くように配され、C区は7、8号墓を意識した位置取りで、出土土器も土坑の北斜面に集中していた。B区床面上で炭化木が出土している。

**7号祭祀土坑（図版9－d、第28図）**

43号土壙墓に切られる。2.32cm×1.29cmの長楕円形の1次上坑の東端に110cm×90cm、深さ72cmの隅丸長方形の2次土坑を掘る。底面において、計18cmほどの柱痕跡を検出した。木柱が樹立されていたものと推定される。埋土下層には拳から人頭大の礫が多く含まれていたが、上は特に固く築き固められたというものではなかった。

**祭祀土坑出土遺物（図版26、第25図、第28図、第29図）**

1は1号祭祀上坑から出土。中型壺である。

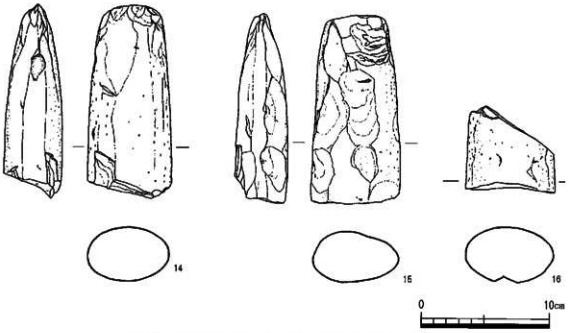
2は2号祭祀上坑から出土。ミニチュア広口壺で底部穿孔されている。

3、4は3号祭祀十坑からの出土。3は胴上半部に4条を1単位とする縦方向の沈線が刻まれる。4は胴下部に穿孔が行われている。

5、6は4号祭祀十坑からの出土。6は口頸部、胴下半部が丁寧に打ち欠かれている。

7～10、14は5号祭祀土坑出土である。7は完形の小型広口壺である。胴中位に穿孔が行われている。8は小型の鉢、ないしは器台である。9は甕、10は壺の底部片である。17は甕棺の口縁片である。この破片に対応する甕棺は調査区内で確認することができなかった。

11～16は6号祭祀土坑から出土した。1～3は弥生土器である。3は胴下部に打ち欠き作業に起因するとみられる人工的な剥離痕跡が認められた。3～6は玄武岩製の蛤刃石斧片である。4は残存長15.5cm、5は残存長15.0cm、6は残存長6.6cm。いずれも刃部を欠損する。




第29図　6号祭祀土坑周辺出土石器実測図（1／3）

## (3) 古代～中世の遺構と遺物

### ① 土壙墓

**53号墓（図版13－a、第30図）**

調査区の北東隅で検出した。墓壙は北側が幅広い長楕円形で全長210cm、幅118cm、深さ18cmを測る。墓壙の南部には長さ120cm、幅80cm深さ10cmの長方形の小土坑があり、別遺構の切り合いとも考えたが、土層観察では時期差を示す土層の切り合いを確認することができず、同時期に掘られたものと考えられる。

墓壙幅が北側で若干広く、黒色磨研土器椀が北部に置かれていることから、頭位は北にあったものと推定される。土壙内では木棺等の痕跡は確認できなかった。

墓壙の北西隅に黒色瓦器椀１個が、中ほどに鉋１本が、西縁辺に刀子２本が副葬されていた。

**副葬品（図版25、第32図）**　１は黒色瓦器椀である。器高6.0cm、口縁径15.1cmを測る。内外面ともに暗文状のヘラ研磨が施される。２、３は刀子である。４は小型の鉋である。刃はやや厚手で切先はわずかに湾曲する。

**54号墓（図版13－b、第30図）**

調査区の北中央付近で検出した墓壙全長145cm、幅55cm、深さは南が26cm、北が30cmを測り、北側がやや深めである。長方形プランであるが、墓壙の底面では南側が若干広めである。中央に径37cm、深さ11cmの小土壙が掘られる。

南側の墓壙底面からガラス製丸玉430個が出土した。玉は綴られた状態でなく、墓壙南の床面付近に散乱しており、埋葬時に墓壙南部に集中的に撒かれたような状態を示す。しかし、検出レベルは一様ではなく、２～３cmほどの微細なレベル差が見られたことから、例えば木棺の蓋上に副葬されていたものが、腐朽と同時に棺底に転落し、四散したような状況が想定される。墓壙の掘削状況から頭位は南に向けられていたものと推定される。また、床面から中央に方形孔がある銅銭３枚が重なった状態で出土した。

**副葬品（図版25、第32図）**　ガラス玉が出土しているが、そのうち、10点のみ図示した。径は３mm、厚さは1.5mmほどで色は全てダークブルー。材質分析について比佐陽一郎、片多雅樹氏にお手を煩わせた。銅銭は３枚が出土した。遺存状態が悪く小片となっている。銭文を判読できる資料はなかった。

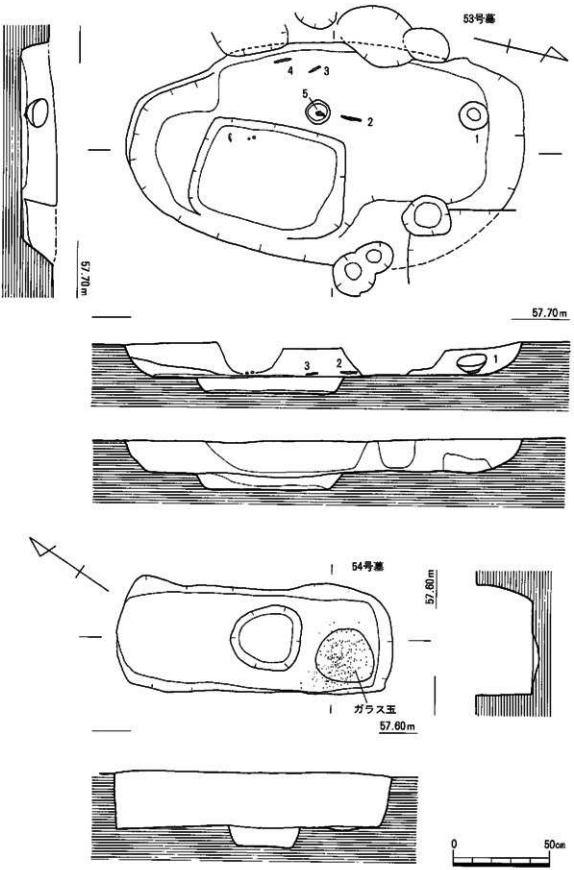
### ② 土坑

**１号土坑（図版13－c、第31図）**

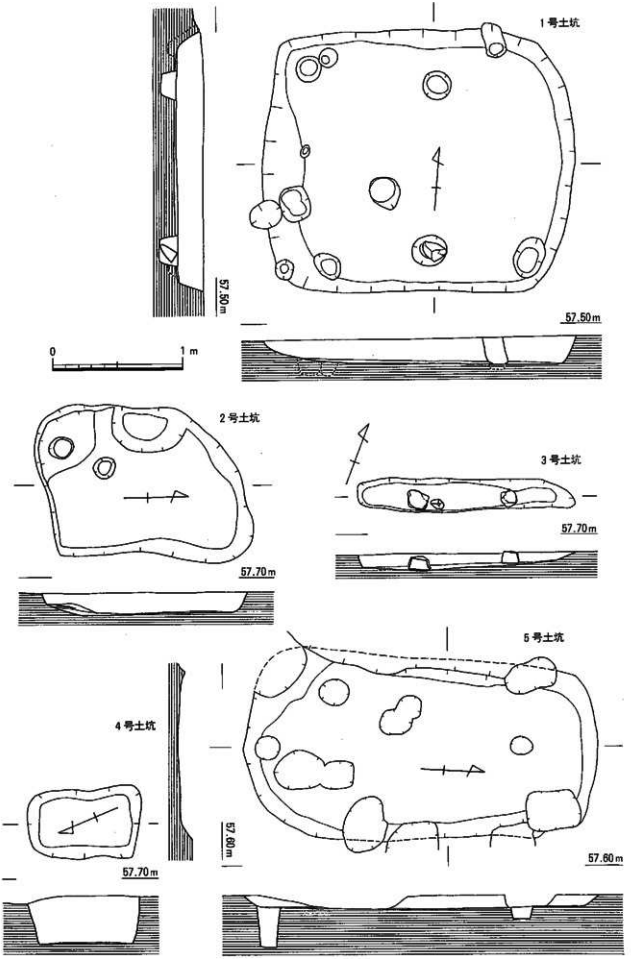
調査区の北東角で検出した。長方形プランの土坑で全長153cm、幅206cm、深さ22cmを測る。四隅に浅い柱穴があり、屋根を有していたものと推定される。土坑の底面には藁を焼いたような薄い炭層が堆積していた。埋土からは土師皿、鉄滓片などが出土した。

**２号土坑（図版13－d、第31図）**

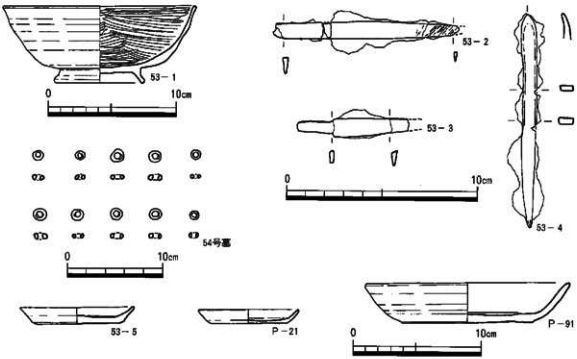
５号墓の上面に掘られた不整長方形の土坑で全長153cm、幅13cm、深さ17cmを測る。埋土内から土師皿片が出土した。




第30図　53・54号墓実測図（1/20）




第31図　土坑実測図（1/30）




第32図　土壙墓その他の出土遺物実測図（1／2、2／3）

**3号土坑（第31図）**

調査区の北中央で検出した小溝状の土坑で全長167cm、幅27cm、深さ17cmを測る。埋土には炭が含まれ、坑内から表面が焼け赤変した角石が3個出土した。底面に据えられたものと推定される。壁面には火を受けた痕跡は認められなかった。

**4号土坑（第31図）**

3号土坑の南で検出した長方形プランの土坑で、全長87cm、幅55cm、深さ36cmを測る。埋土は炭混じりの灰褐色粘質土で、灰を多く含む。壁面等に焼けた痕跡は認められなかった。

**5号土坑（第31図）**

49号土壙墓の西に隣接して検出した隅丸長方形プランの土坑で、全長273cm、幅147m、深さ11cmを測る。53号墓と同様な土壙墓である可能性がある。

③　その他の遺構、遺物（図版　、第32図）

ピットを多数検出したが、建物としてプランを確認できたのは2棟のみである（第3図）

1号建物は、調査区の北東隅部、柱穴等が集中して検出された中で確認した。南北棟で、3間（6.9m）×2間（4.1m）を測る。柱間平均は　mである。平安～鎌倉期の建物と考えられる。

2号建物は、13号墓の周囲に並ぶ南北棟で、3間（3.6m）×1間（1.7～2.1m）を測る。柱間間隔が不均等であるため、建物とするには躊躇されるが、柱穴列としてまとまっているため、建物遺構と判断した。時期は不明である。

Pit 21、91から土師皿が出土している。

## (4) 三坂七尾遺跡出土ガラス資料の材質調査

福岡市埋蔵文化財センター
比佐陽一郎・片多雅樹

前原市三坂七尾遺跡から出土したガラス小玉について、蛍光X線分析法による材質調査を行った。ガラスは石英に融剤や着色剤などの材料を添加して作られるが、近年の理化学的手法を用いた調査によりこれらの組成には幾つかの種類があり、その系譜や流通経路、歴史的変遷などが解明されつつある。

今回調査を行ったのは中世墓地から出土した小玉430点で、全て青紺色を呈する。本来ならば個体ごとに寸法や重量、比重等の計測や顕微鏡観察を行うべきところであるが、資料は糸に通した状態で保管されており、これを解いて個体別にこれら作業を行うことは時間的な制約から困難であったため、そのままの状態で分析調査のみを実施した。正確な数値は得ていないものの、見た限り全て似たような大きさと形状（径が3㎜前後、高さ1.5㎜前後の薄い円盤状）で、色調とともに非常に揃った印象を受ける。

蛍光X線分析は資料にX線を照射し、含まれる各元素から生じる二次X線（特性X線）を検出器でとらえ、X線エネルギーとその強度をピークとして表すものである。出土ガラス資料は長期間に及ぶ埋蔵環境下で風化が進み組成の変化が起こっている場合があり、風化層を物理的に除去し、更に標準資料を用いた校正により各元素の定量値を算出することで、より精度の高い調査が可能であるが、今回は完全な非破壊での調査とし、定性分析のみに止めている。

日本の弥生時代のガラスには、肥塚隆保氏によるこれまでの調査で、アルカリ珪酸塩ガラスと鉛珪酸塩ガラスのあることが知られている。アルカリ珪酸塩ガラスは、融剤に酸化カリウムを用いるカリガラス（$K_2O$-$SiO_2$系）と、融剤に酸化ナトリウムを用いるソーダ石灰ガラスに区別され、更にソーダ石灰ガラスは酸化アルミニウム含有量の高いもの（$Na_2O$-$Al_2O_3$-$CaO$-$SiO_2$系）と、低いもの（$Na_2O$-$CaO$-$SiO_2$系）に区分される。鉛珪酸塩ガラスには、鉛ガラス（$PbO$-$SiO_2$系）と鉛バリウムガラス（$PbO$-$BaO$-$SiO_2$系）がある（肥塚1996、1998）。定量値が算出されれば、それによる同定が可能であるが、今回の調査では完全非破壊分析による定性分析であり、得られた蛍光X線の特徴と相対強度から判定することになる。

調査に当たっては、ガラスは強いX線を照射すると変色を来す現象が起きるため、微弱なX線でも検出感度の高いエネルギー分散型で、数㎜大の資料を測定できる微小領域用の装置（エダックス社製／Eagle μ plobe）を用いた。

**◆測定条件**

対陰極：モリブデン（Mo）／検出器：半導体検出器／印加電圧・電流：20kV・400～550μA／測定雰囲気：真空／測定範囲0.3㎜φ／測定時間30～300秒

作業は糸に通した資料をステージ上にそのまま置き、ステージを移動させて分析を行い各個体ごとのデータを得た。

分析の結果、430点全て同じ組成を示した。代表的な分析チャートを第33図に示す。ケイ素（Si）、カリウム（K）が特徴的なピークとして検出されたほか、マグネシウム(Mg)、アルミニウム（Al）、カルシウム（Ca）、チタン（Ti）、マンガン（Mn）、鉄（Fe）、コバルト（Co）、銅（Cu）等の元素が検出され、二成分系のガラスであるカリガラスの特徴を示している。青紺色の色調はコバルトに依るもので、特に強いピークとして現れている鉄、マンガンはコバルトに伴う不純物とされる。

カリガラスは中国やインド、東南アジアで流通し、ヨーロッパ等西方には見られない組成のガラスであることから「アジアのガラス」とも言われている。日本では弥生時代に盛行し、その多くは青色系統の小玉である。その後古墳時代に入る頃から次第に減少、古墳時代の後期には途絶えるとされる。肥塚氏が行ってきた従来の分析調査では、弥生時代の遺跡から出土する青紺色のカリガラスには、例外なく数%に及ぶマンガンが含有しており、これは中国や韓国で出土する同色のカリガラスの特徴とも一致している。このような高いマンガンを含む着色用コバルト鉱石は中国産の特徴とされ、これらのカリガラスが中国で製造されたと考えられる根拠となっている（肥塚1996、1998）。

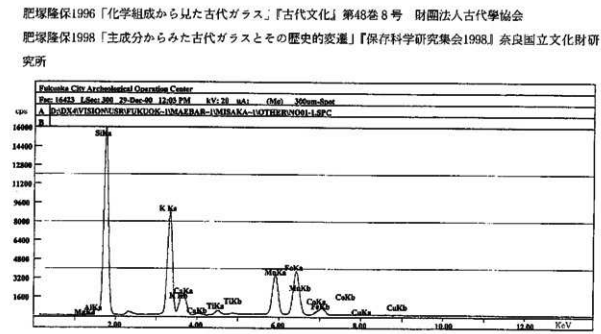
本遺跡の資料は中世の遺構から出土しているが、組成、外観ともに弥生時代後期頃に盛行する同種のガラス小玉と何ら変わるところが無い。今回の定性分析の結果では相対的な比較に過ぎないが、マンガンのピークが高い特徴も一致している。筆者らにはこれまで中世のガラス資料を本格的に調査した経験がなく、直ちに本資料に対する評価や位置づけを行うことは困難である。しかし現状では伝世は難しいにしても、後世の人が弥生時代の遺構を破壊して入手した製品を転用した可能性も想定できないことはなく、今後、製作技法からのアプローチや更なる類例の調査等慎重な検討が必要であるものと思われる。

最後になりましたが調査の機会を与えていただいた前原市教育委員会の岡部裕俊氏、並びにH頃ガラス資料の調査に関してご指導いただいている独立行政法人奈良文化財研究所の肥塚隆保氏に感謝申し上げます。

参考文献

肥塚隆保1996「化学組成から見た古代ガラス」『古代文化』第48巻8号　財団法人古代學協会

肥塚隆保1998「主成分からみた古代ガラスとその歴史的変遷」『保存科学研究集会1998』奈良国立文化財研究所




第33図　ガラス玉の蛍光X線分析結果

## 3．小結

### (1)三坂七尾遺跡出土甕棺の編年的位置

調査地点からは、弥生時代中期初頭～中期中葉にかけての小児棺20基、成人棺18基の合計38基の甕棺が検出された。前原市での当該期の主な甕棺墓は高祖榎町遺跡、篠原新建遺跡、高上石町遺跡、三雲八龍遺跡が挙げられるが、本遺跡では特に成人棺と小児棺が１セットとなり検出された例が多いため、成人棺の編年を中心に日常容器との併行関係も紹介する。編年に際しては諸氏の甕棺編年[1]を援用し、形態変化を中心に遺構の切り合い、製作技法等を参考にして弥生時代中期初頭～中期中葉までをⅠ期からⅢ期に、Ⅱ期についてはａ～ｃの３小期に分類した。Ⅰ期は中期初頭（ＫⅡａ期[2]）、Ⅱ期は中期前半（ＫⅡｂ～ＫⅡｃ期）、Ⅲａ期は中期中葉初頭（ＫⅢａ期初頭）に比定でき、当遺跡ではⅡｂ～ｃ期に集中して造営されている。以下、各期の特徴について述べていく（第33図）。

**Ⅰ期**

36号甕棺のみが該当する。前期末の金海式甕棺の特徴を強く残す地域性の強い僊体である。当該期の標準的な形態は篠原新建遺跡の212号、217号甕棺等が挙げられる。頸部のすぼまりが大きく、底部にかけてもややしまりがない樽形を呈す。口縁部は厚みを持ち内傾し、端部に刻み目を持つ。最大胴径は上部にあり、胴部突帯は胴部上位にやや潰れた一条三角突帯を貼り付けているが歪みが大きくいびつである。底部は分厚く上げ底を呈する。

**Ⅱａ期**

３号甕棺、11号甕棺が該当する。頸部にかけてのすぼまりが大きく全体的に丸みを帯びるがⅠ期より底部にかけてほっそりとした形態になる。また、口縁部は薄くなり内外未発達の内傾する逆Ｌ字状を呈する。胴部最大径は上半部にあるがⅠ期に比べるとやや下位になる。胴部突帯は高さの低い一条ないしは二条の三角突帯を胴部中位～やや上半に貼り付ける。底部は上げ底を呈するが厚みはⅠ期に比べるとかなり薄くなる。

**Ⅱｂ期**

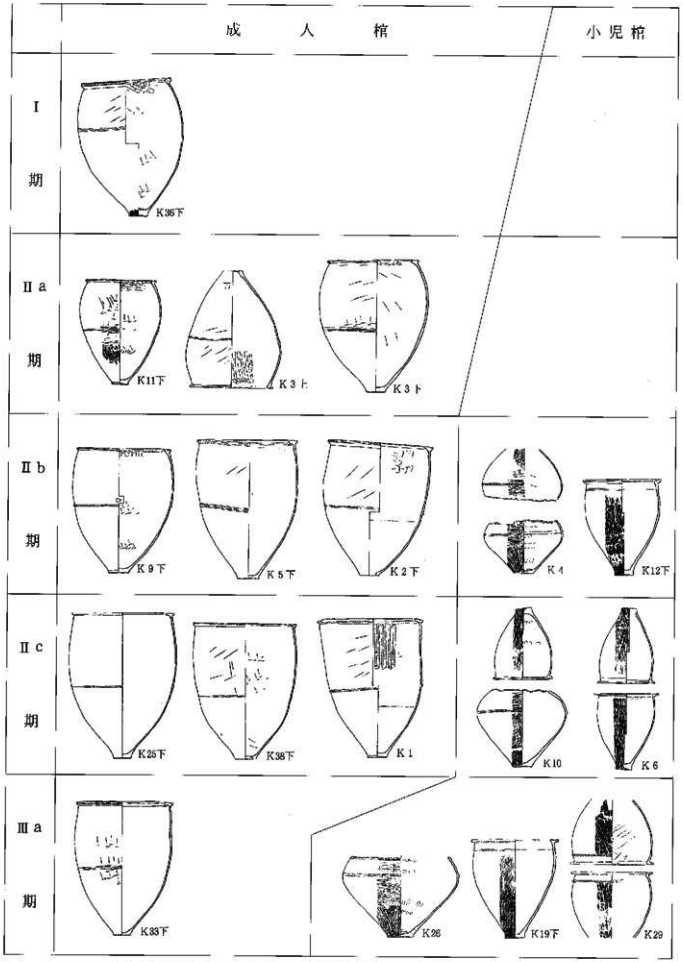
２号、５号甕棺を標準とする。頸部下のすぼまりが小さくなり長胴形を呈する。口縁部はやや未発達で内側に張り出し、内傾するものもあるがほぼ平坦である。最大胴径はⅡａ期よりも下位になり、突帯貼付位置も中位からやや下位に変化する。調整は内外とも丁寧なナデ調整を行う。底部は厚みがあり、上げ底に加え平底のものも出現する。併行期の日常容器甕は未発達の厚みのある逆Ｌ字口縁をもち、やや内傾する。底部は分厚い上げ底を呈している。

**Ⅱｃ期**

25号、38号甕棺を標準とする。Ⅲｂ期に比べると頸部下のすぼまりは小さく、胴部上半は外側に開き気味のものも増加する。口縁部は薄くなり内側に大きく張り出して、水平及び外傾する発達した口縁部をもつ。胴下半に最大胴径があり、突帯貼付位置もⅡｂ期に比べて下位になる。底部は平底になる。この時期に鉢形土器との組み合わせと外面調整にハケ目が残るものが出現する。併行期の日常容器甕は外側に発達した厚みの無い逆Ｌ字口縁で、ほぼ平坦である。底部は上げ底を呈す。

**Ⅲａ期**

33号甕棺のみが該当する。胴部上半がほぼ直立した砲弾形で、Ⅱ期に比べると底部にかけての締りが悪くなる。口縁部は厚みが無く、内外に発達したＴ字口縁で外傾する。焼成が良く堅牢なつく




第34図　三坂七尾遺跡出土甕棺の編年図（成人棺 1/24、小児棺 1/18）

りで底部は平底を呈する。当該期の甕棺は高上石町遺跡の10号甕棺が挙げられる。併行期の日常容器甕は、厚みの無い外側に大きく発達した逆L字口縁でやや内傾する。底部は薄くやや上げ底である。

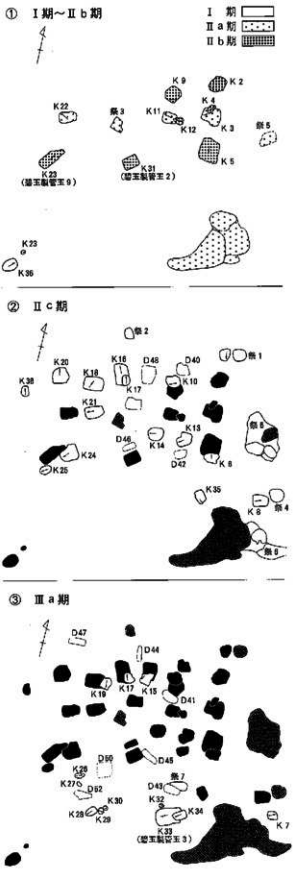
以上各期の特徴を簡単に述べてみた。全体を通じて、上甕のほうが形態的に若干古い様相を示すものが多く、下甕に応じて埋葬時に上甕を用意した状況を表したものと考えられる。また、今回の分類は、一墓域内の形態変化のため従来の編年に比べると細分されているが、特にⅡ期の小期については形態変化であり、その一期にどのくらいの時間幅があるかは当地域の今後の資料の増加を待って検討を行うべきだろう。

### (2)墓域の変遷

前項でみた甕棺編年にしたがって、墓域全体の形成過程を概観してみる（第34図）。

Ⅰ期は、調査区南西部端に他の墓群と離れて2基のみで形成される。この状況からすると古い時期の墓群はさらに西側に広がる可能性が強い。Ⅱａ期に入ると墓群は東側に移動し、Ⅱｂ期は、Ⅱａ期の一番古い3号墓・11号墓周辺に集中する甕棺墓群と、南西側には副葬品を持つ23号・31号甕棺が他と一定の距離を保って形成され、全体的に東西に伸びた長方形墓域を形成する。この時期に甕棺墓域南東端に大型の祭祀土坑が出現する。Ⅱｃ期に入ると成人棺は主にⅡｂ期までの長方形墓域の間を埋めるように分布し、南側に副葬品を持つ23・31号を意識したグループが見られる。祭祀土坑も墓域を囲むように小型のものと、Ⅱｂ期から続く大型のものが発達する。続くⅢａ期には、墓域南端の副葬品をもち当墓群内でも大型の墓壙を持つ33号棺1基が、他墓と一定の間隔を保ちながら独立した空間を形成する。墓域は既存の墓域の南側に長方形に形成され、小児棺のみが集中して形成される特徴をもつ。当該期以降は墓地の形態が甕棺墓から土壙墓に移行すると考えられ、土壙墓は甕棺墓域の周辺部を囲む形で分布している。

墓域全体を概観してみると、墓域北側は成人棺1基に対し小児棺1基が伴う状況をしめすのに対し、南側




第35図
三坂七尾遺跡における墓群の遺構変遷図

の副葬品を持つグループは、小児棺だけのまとまりを持って埋葬されている傾向がみられる（図35）。墓域の北西部は成人棺のみで形成されているが、削平が著しく、本来は小児棺を伴っていた可能性が高いことから考えると、南西部の小児棺集中埋葬は墓域の中でも特異な状況を示している。

特に注目されることは、副葬品を持つ甕棺は全て墓域の南側に集中していることである。23号、27号、33号甕棺墓では周囲とは一定の間隔を保ち、他とは区別された独立した空間を形成しはじめている。墓群はさほど大規模なものではなく、副葬品も金属器を含まずに数点の管玉にとどまっていることから、これらの被葬者は当地域の一般的集落の小首長層と考えられる。一般的集落における首長層が徐々に集団内で隔絶し始めた段階、言い換えれば特定集団墓の形成過程の萌芽的段階を示しているものと考えられる。

ただし、調査中に33号甕棺墓の墓域区画溝と想定していた6号祭祀土坑は、出土土器の検討の結果33号墓に先行し、墓群形成の初期段階に掘削されていたと見られることから、後述するようにその意図は墓域全体の東南隅を強く意識して配されたものと考えられる。

### (3)甕棺墓と祭祀土坑について

本遺跡からは7基の祭祀土坑が検出された。これらは単一の土坑のみで形成され、出土土器にも時間幅が見られない小型のタイプと、複数の土坑から形成され、出土土器に時間幅が見られる大型のタイプの二つに分けられる。

前者のタイプは1～4・7号祭祀土坑が該当し、その検出位置から主に個人墓に対する祭祀で、短期間営まれたものと考えられる。詳しく見ていくと、1号祭祀土坑は1号墓に、4号祭祀土坑は8号墓に、7号祭祀土坑はその位置から33号甕棺にそれぞれ伴うものであろう。

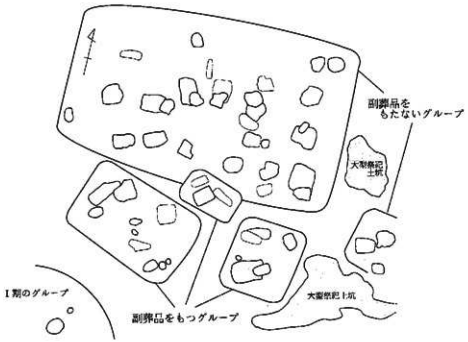
後者のタイプには5号・6号祭祀土坑が該当し、検出状況から比較的長い間繰り返し使用されたもので墓域全体に対する祭祀と考えられる。造営時期はⅡb～Ⅱc期までの最も甕棺墓が多く造営された時期に重なり、また、自然地形で東側が谷部になることから墓域東端を強く意識した祭祀空間であったと想定される。

### (4)製作技法についての若干の所見

今回土器の焼成時につく黒斑に着目して、日常容器と大型甕棺での焼成方法の違いについて観察を行った。[6] 日常容器の黒斑の特徴としては、殆どの個体で底部の内外のみに濃い黒斑が観察できることから、ほぼ直立に近い形で焼成されたことが覗える。一方大型棺では外面の一側面に広範囲に付着したもの、内面が還元色のものなどがあり、横に寝かせたものや、口縁部を下にし伏せて焼成したものが大半であった。今回の観察では時期的な傾向は出なかったが、日常容器と大型棺では同時期のものでも焼成方法が明らかに異なる傾向が捉えられた。今後、黒斑だけでなく工具痕、胎土などの観察により、どの程度製作方法や情報が共通していたかを検討することで、それぞれの製作集団レベルまで深めて考えていけるのではと期待している。

### (5)古代・中世の遺構について

調査区の東部、とりわけ北東部に集中して鎌倉前期を中心とする建物、墓群等を検出した。分布が偏った原因は、本来西から東になだらかに傾斜していたと考えられる当地の地形が水田開削によっ




第36図　三坂七尾遺跡墓域概念図（1/400）

て平坦化され、調査区西部の同期遺構の削平が進んだことに起因するものと考えられる。

遺構としては掘立柱建物、土坑、土坑墓が確認され、上坑墓がやや先行して平安後期、建物、土坑は13世紀代の遺構と考えられる。当地が鎌倉期の集落の一角をしめている事は明らかである。

53号、54号墓からはいずれも副葬品が出土し、特に54号墓からは、ガラス製丸玉が出土している。いずれも有力層の墓と考えられる。当地の北西1500mの香力地区には通称原田と呼ばれる、古代・中世期に当地に君臨していた原田氏との因縁を感じさせる地があり、さらに北の薮持地区では近年相次いで戦国期の環濠居館が発掘されていることから、当地も原田氏ゆかりの地の一角を占めている可能性は高い。今後の資料の蓄積を待ちたい。

（註）

①主な編年として、森貞次郎氏（1968）、橋口達也氏（1979；1990）、福岡市西部～糸島地域の変遷については宮井善朗氏（1994）、河合修氏（2000）が編年を行っている。

②横口氏の編年（1979）案の分類より。

③各個体の出土位置については土器の観察表の備考欄を参照ください。

【参考文献】久世健二・北野博司・小林正史　1997「黒斑からみた弥生土器の野焼き技術」『日本考古学』第4号

宮田浩之　1996「弥生土器の焼成について」『三国地区遺跡群6；西島遺跡1・2区の調査』小郡市文化財調査報告書109　小郡市教育委員会

# Ⅲ．第１次調査

## １．はじめに

三坂七尾遺跡第１次の発掘調査は、県営畑山地区圃場整備事業にかかるものである。

1981（昭和56）年９月16日、大字三坂で削平される部分の字ロノ目441・442－１と字七尾814の２箇所を試掘調査した結果、七尾814のみが調査対象となった。

1981（昭和56）年10月５日付けで発掘調査届（文化財保護法98条の２）を提出し発掘調査にとりかかっている。当初の調査予定面積は約3500㎡ほどであったが、実際にはここで報告する範囲よりも東側は低くなって遺構・遺物ともに検出されず、調査面積はかなり狭いものとなった。

**所　在　地**：糸島郡前原町（現：前原市）大字三坂字七尾814［三坂神社の前面東方］
**調査期間**：1981（昭和56）年10月６日～10月27日
**調査面積**：約900㎡
**調査担当者**：福岡県教育庁文化課（現：文化財保護課）
技術主査　柳田康雄（現：文化財保護課長）
技　　師　伊崎俊秋（現：福岡教育事務所参事補佐）
**報告書作成**：平成12年度（2000年４月～2001年３月）

調査においては、前原町（現：前原市）教育委員会の川村博氏（現：前原市役所水産観光課）、そして新開誉之氏の協力を得た。

報告書作成は平成12（2000）年度に行ったが、調査から報告書作成までに19年ほどのブランクもあって種々の苦労があったものの、多くの人の協力を得てまとめることができた。ことに遺構の浄書、遺物の実測・浄書には次の方々の協力を得た。深く感謝いたします。

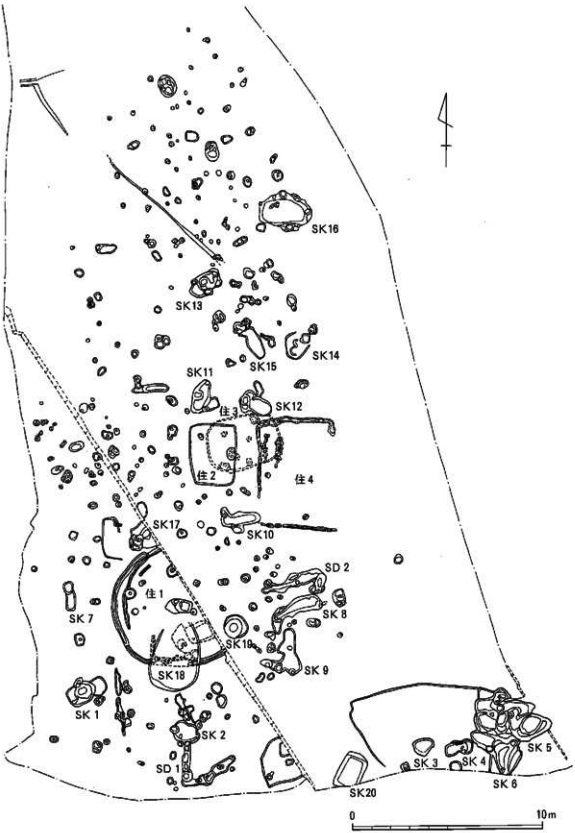
平田春美・若松三枝子・棚町陽子・田中典子・久富美智子・堀江圭子・小西藍・豊福弥生・原カヨ子・岡寺良・宮地聡一郎・平尾和久

調査で検出された遺構・遺物は次のとおりである。

〔弥生時代〕
・竪穴住居跡　３軒
・土　坑　20基
・ピット　多数
［出土遺物］　弥生土器・石包丁・石斧・石鑿・打製石鏃・炭化種子（木の実）

〔古墳時代〕
・竪穴住居跡　１軒
［出土遺物］　土師器・須恵器

以上のほかに、３～６号土坑の存するあたりは黒色土が広がっており、調査時にはそれをＢ区南端黒色土層としていたが、土器が出土しているのでそれをＳＸ１出土遺物として報告する。




第37図　第１次調査地点全体図（１/200）

ピットは多数あるが建物としてまとまるものは見当たらない。遺物の出土したものは60個ほどであり、そのほとんどは弥生土器片と黒曜石剥片、種子（P54）を出土しており、ただ、1個のみP10に須恵器の平瓶と思われる破片があった。

なお、住居や土坑から出土した石包丁2点、打製石鏃4点、石斧3点、石盤1点と土器数点が整理段階で所在不明となっているので、今回の報告では掲載していない。

また、調査時には旧畦畔等によってA～C区の区分けを行っていたが、この報告ではそれは用いず、また報告時で遺構呼称・番号等を変更したところがあるので、以下に一覧しておく。

| 新番号 | 旧呼称・番号 | 新番号 | 旧呼称・番号 |
|---|---|---|---|
| 1号住居跡 | A区1住 | 11号土坑（SK11） | 土坑11、2住北西土坑、2住北土坑 |
| 2号住居跡 | B区2住 | 12号土坑（SK12） | 土坑12、B区3住北土坑 |
| 3号住居跡 | B区3住 | 13号土坑（SK13） | 土坑13 |
| 4号住居跡 | B区4住 | 14号土坑（SK14） | 土坑14 |
| 1号土坑（SK1） | 土坑1、A区西南方形土坑 | 15号土坑（SK15） | 土坑15 |
| 2号土坑（SK2） | 土坑2 | 16号土坑（SK16） | C区北不整形土坑 |
| 3号土坑（SK3） | 土坑3、B区S7・E7土坑 | 17号土坑（SK17） | A区1住北不整土坑 |
| 4号土坑（SK4） | 土坑4、B区南端S7－E3東南土坑 | 18号土坑（SK18） | A区1住南円形竪穴 |
| 5号土坑（SK5） | B区東南不整形土坑 | 19号土坑（SK19） | B区西南円形土坑・1住東 |
| 6号土坑（SK6） | B区東南不整形土坑の西南土坑 | 20号土坑（SD20） | B区西南方形土坑・竪穴 |
| 7号土坑（SK7） | 土坑7 | 1号溝（SD1） | 小溝1 |
| 8号土坑（SK8） | B区南半三日月形土坑 | 2号溝（SD2） | 小溝2 |
| 9号土坑（SK9） | 土坑9、B区南S5・E3東南土坑 | SX1 | B区南端黒色土層 |
| 10号土坑（SK10） | 土坑10 | | |

ところで、遺構ごとの出土遺物の説明は紙幅の都合もあってなるべく簡便に済ませるが、弥生土器についてはその多くは次のようなものであることを予め記しておく。

- 胎土……砂粒を多く含むものが大半で、長石あるいは石英粒が目立ち、金雲母片を含むものが少なからずあり、角閃石を含むものも少量見られる。
- 焼成……いま現在は器表の荒れが目立ち、磨滅した状態のものが大半であるが、本来の焼成はそれほど悪くないものと思われる。
- 色調……弥生土器に通有の橙黄色あるいは灰黄色～黄褐色、茶褐色等を呈するものが大半である。甕形土器の内底面は黒褐色に変色したものがある。また、内外の器表面に鉄分が筋状に付着したものが多い。
- 調整……磨滅していて不分明のものが多いが、壺・高坏は内外面がミガキ及びナデ、甕は外面が刷毛目、内面はナデで、ともに口縁部周辺は横ナデを施すのを基本とする。

## 2．弥生時代の遺構と遺物

### (1) 竪穴住居

**1号住居（図版27・28、第38図）**

調査区の西南部にある円形プランの住居で、その東側の2／5ほどは旧畦畔の段差により削平されている。また、南側の一部を18号土坑に切られる。東南部では壁面推定ラインと19号土坑とが重複するが、その先後関係はわからない。残存する部分の最も残りのよい所で検出面からの深さは約20cmである。残存する壁面には直下に壁周溝が巡っているが、東側と南側においてその内側にさらに細い溝があるのは、住居の拡張もしくは建て直しの結果として古い内側の溝が遺存しているのかもしれない。壁周溝の中には小ピットはない。西側の周溝内からは小壺が出土している。外側の壁面からすると本来の規模は直径約7m、面積は32.26㎡に復元される。中央には段掘りになった楕円形プランの土坑があり、東側の深い方に砥石が、西側の浅い方の上面には炭化物が遺存していた。

この中央土坑から200～250cmの位置に深みのある柱穴6個が放射状に配置されている（1～6）。5はやや浅いもののこれらを主柱穴としてよいだろう。P1とP2、P4とP5、P6とP1の各柱穴間隔はやや広い。P1の東側には方形の深さ20cmほどの土坑があるが、性格は不明。多くの弥生土器のほかに石包丁、砥石、黒曜石の剥片等が出土している。石庖丁は半欠品が中央土坑東側の炭化物層の下から検出されたが、行方不明である。

出土遺物（図版31、第39図1～30、第59図31～33）

**土器**（第39図1～30）1～8は壷。1・2はやや小型である。3・4は鍛先口縁をなす。8の内底面には有機物が付着している。8の底径7.2cm。9は高坏の脚部で、中実の部分が長い。擬朝鮮系無文土器か。

10・11は甕で、10の撮み径5.2cm。12～25は甕。口縁は逆L字状をなすがそれぞれに微妙な形態差がある。17の外面には籾らしき圧痕がある。24の底部は断定できないが挑成後穿孔の可能性がある。21の復元口径39cm。26～28は器台で二次被熱の痕跡がある。26の口径8.4cm。29は小型の鉢で、復元口径8cm。30はミニチュア椀で、短い把手が付くかもしれない。

以上の土器は2・8・12・16・24・25・30が床面にあり、なかでも12・16・25は中央土坑の南側からまとまって出土した。20・29は中央土坑、4・7・18・19・22は東南土坑、5・6・13・14・26は東南周溝、その他は埋土中で3・10・11は上層からの出土である。

**石器**（第59図31・32）31は黒曜石の剥片で、縁辺に細かい剥離が施される。長さ37.9mm、重さ3.3g。32は砂岩の砥石で、中砥であろう。現存長62.3mm。

**鉄器**（第59図33）　刃部がはっきり見えないが鑿であろうか。現存長63mm。

**2号住居（図版28、第40図）**

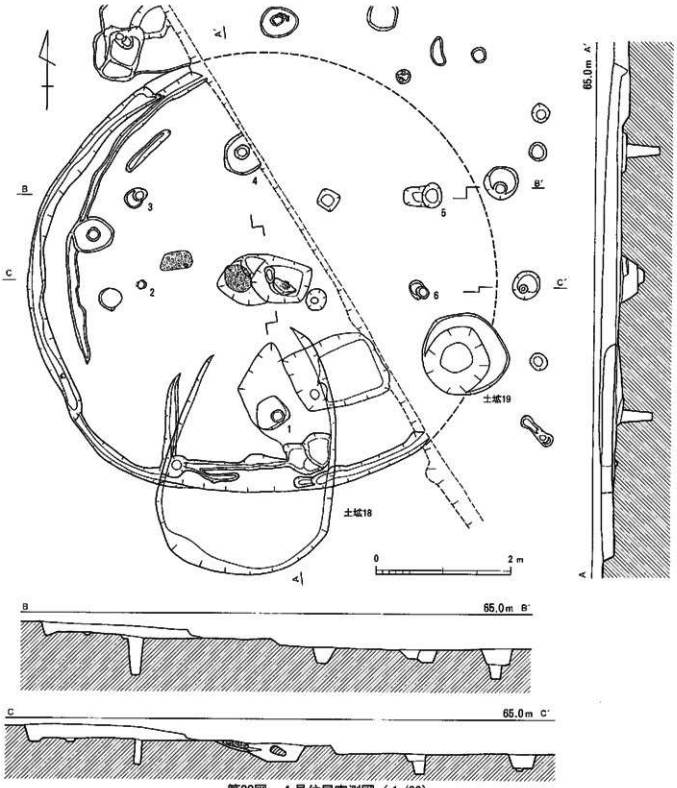
調査区のほぼ中央付近にある長方形プランの住居で、その東側で3号住居を切っている。南北方向に主軸を持ち、東西方向が210～240cm、南北方向が325cmで、面積は6.94㎡を測る。検出面からの深さは最も残りのよい所で約10cmと浅い。床面の北西側に非常に浅いピットがあり、また東壁中央に深さ24cmほどのピットがあるが、それ以外に柱穴とすべきものはなく、主柱穴は不明とせざるを得ない。北西部ピットのすぐ横で石ノミが出土したが行方不明である。それ以外に少量の土器と

黒曜石の剥片が出土している。

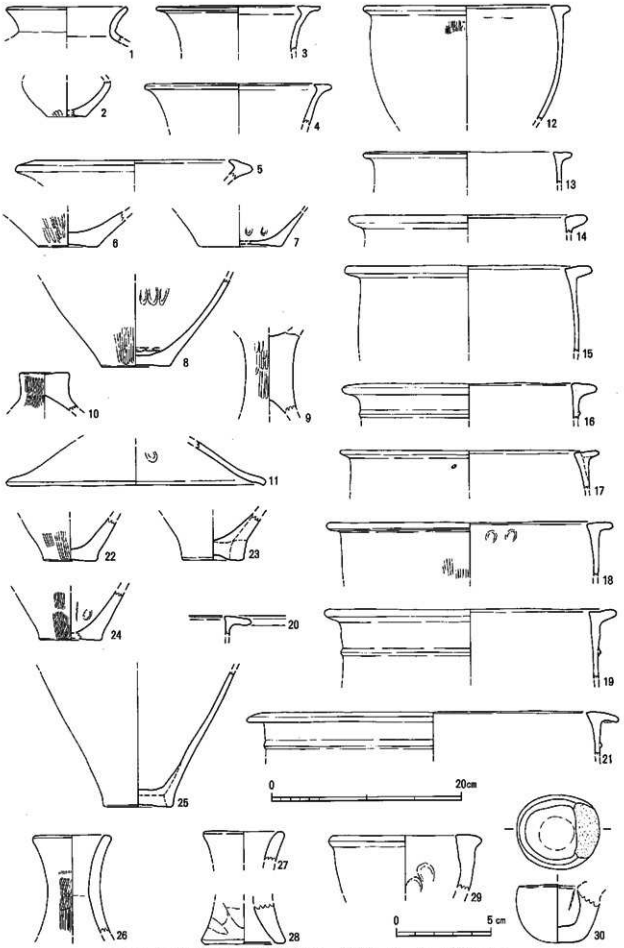
出土遺物（第41図１～５）

**土器**（第41図１～５）１は口縁が大きく開く壺。２は甕。３～５は鉢。５の復元口径28.2cm。全て床面からの出土である。

**石器**　石ノミが出土しているが、行方不明である。




第38図　１号住居実測図（1/60）




第39図　1号住居出土土器実測図（1～29は1/4、29、30は1/2）

**3号住居（図版28、第41図）**

調査区のほぼ中央付近にある住居で、2・4号住居に東西部分を切られているが、その下層にプランが残っており、東西方向に主軸を持つ楕円形に近い隅円長方形をなす。また北東端部で12号土坑にも切られている。南北方向が280cm、東西方向が390cmで、面積は9.03㎡を測る。検出面からの深さは最も残りのよい所で約30cm。床面に7個ほどのピットがあるもののいずれも浅く主柱穴といえるかどうかわからない。弥生土器のほかに黒曜石の剥片と椎の実らしき種子が埋土中から18個出土している。

出土遺物（第41図1～11）

**土器**（第41図1～11）1は壷で撮み径5.4cm。2～8は甕。6の復元口径34.4cm。9～11は器台で、11の復元口径7.8cm、器高14cm。5・9が床面にあり、その他は埋土中で1・4・7・8・11は南端の上層からの出土である。

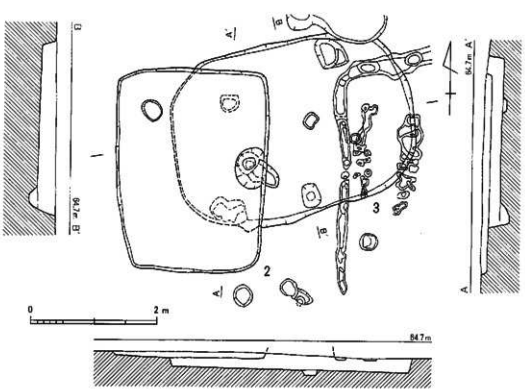
## (2) 土坑

**1号土坑〔ＳＫ１〕（図版27・29、第42図）**

1号住居の西南にあり、調査時にはＡ区西南方形土坑としていたものである。上面で長軸155cm、短軸105cmの隅円長方形プランをなし、東側で浅いピットを切っている。坑内は二段掘り風となり、最深部で検出面からの深さ30cmを測る。最深部の底面には炭化物層が見られた。弥生土器のみ出土した。

出土遺物（図版31、第44図1～17）

**土器**　1は小壷でほぼ完形。精製とはいえないつくりである。器高6.4cm。2は口径と傾きにやや不安があるが壷としておく。3・4は蓋。5は甕というより鉢とすべきか。口径28cm、器高20.7cm。

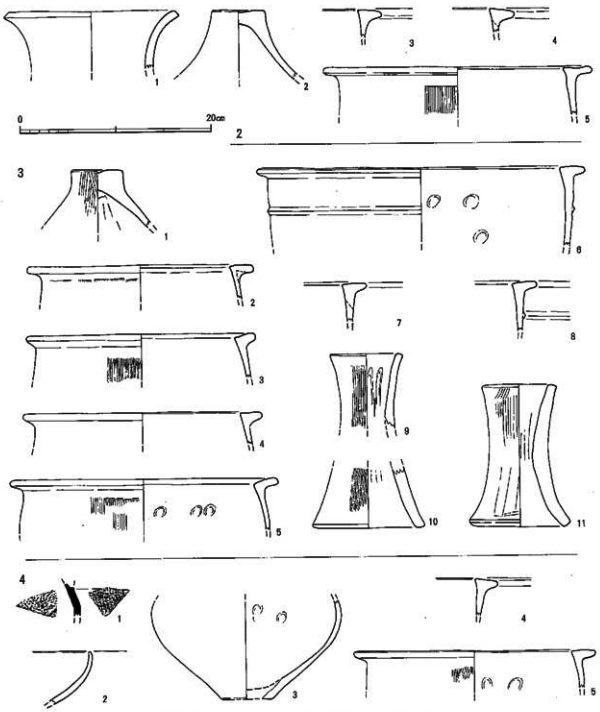



第40図　2・4号住居実測図（1/60）

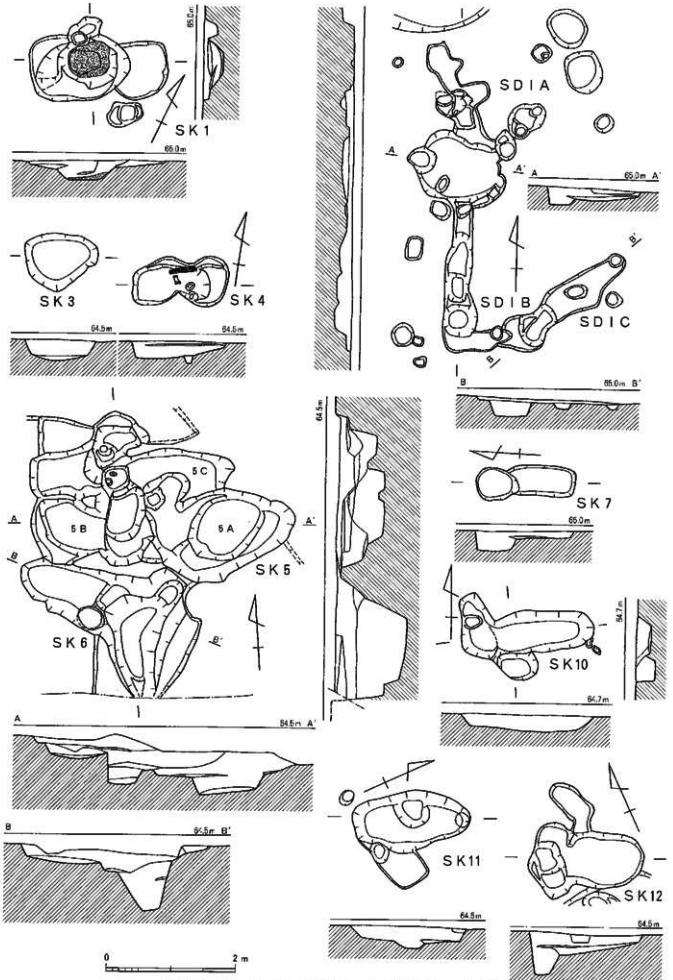
6～14は甕。9の復元口径37.6cm。15～17は器台。17はほぼ完形で器高13.5cm。3・4・6・8・9・12・1315は一括して出土。

**2号土坑［ＳＫ２］（図版27、第42図）**

1号住居の南にあり、南北方向のＳＤ１を切ってそれと重複している。上面で長軸130cm、短軸100cmの楕円形に近いプランをなす。最深部で検出面からの深さ約20cmと浅い。弥生土器少量と黒曜石のコアが出土した。




第41図　2～4号住居出土土器実測図（1/4）




第42図　1～7・10～12号土坑、1号溝実測図（1/60）

**出土遺物（第44図１～３）**

**土器**　１・２は甕。２は強い上げ底である。底径7.4㎝。３は器台であろう。

**３号土坑［ＳＫ３］（図版27、第42図）**

調査区の東南部、４～６号土坑が密集した所の西側にある。上面で長軸110㎝、短軸90㎝の不整円形プランをなす。深さは検出面から約30㎝。弥生土器少量が出土した。

**出土遺物（第44図１～３）**

**土器**　１～３とも甕。３の復元底径６㎝。

**４号土坑［ＳＫ４］（図版29、第42図）**

３号土坑の東にある。二つのピットがくっついたような形状をなし、長軸150㎝で、最大幅は80㎝、深さは最深部で約30㎝。少量の弥生土器と板状の炭化物が出土した。

**出土遺物（第44図１～３）**

**土器**　１は高坏の脚部。２は甕で復元口径25㎝。３は器台。

**５号土坑［ＳＫ５］（図版29、第42図）**

調査区の東南部で、６号土坑とともに密集した状態で存する。調査時にはＢ区東南不整形土坑としていたものである。４～５個の土坑が連結した状態であり、長軸405㎝で、短軸200㎝を測る。東端部が最も深くて約70㎝の深さがある。かなりの量の弥生土器の他に黒曜石剥片とたがし小僧が出土している。遺物は図のＡ～Ｃをまとめて報告する。

**出土遺物（図版31、第45・46図１～54、第59図55～58）**

**土器**（第45・46図1～54）１～７は壺。１・３～６は鍋先口縁をなす。８は高坏の坏部。緩やかに外反する口縁部で復元口径23.5㎝。擬朝鮮系無文土器か。９～13は小鉢。９はほぼ完形で口径8.3㎝、器高6.1㎝。口縁直下に整形時の押さえの痕跡がある。12は小甕ともしうるが、肩部の突帯は断面M字状をなす。13は壺の底部になるかもしれない。14・15は壺で、15の復元裾径は28㎝。16～49は甕。42を除いて口縁は全て逆Ｌ字状をなす。18の口縁上面端部近くには浅い沈線が巡る。これは６号土坑出土品（第47図19）と接合はしないが同一個体と思われる。22と24はつくりがよく似ている。41の復元口径35.2㎝。42は断面三角形の突帯を貼り付けた形状で特異である。50～54は器台で二次被熱の痕跡がある。51と52は同一個体かもしれない。54の復元裾径9.4㎝。

以上のうち西側のＢからは１・26・27・33・40・45、北側のＣからは５・６・８・11・15・16・28・29・32・37・39・42・54が出土し、ほかはＡからであるが、Ａの中でも２・21・22・23・24・30・34・49・52・53は下層に存した。

**石器**（第59図55～58）　55は黒曜石の縦長剥片の縁辺に剥離を施す。現存長18.7㎜、重さ1.7ｇ。56は砂岩の中砥で表裏とも使い込んでいる。現存長70㎜。57はすり石であろう。チャート質の石材で、全長87.2㎜、重さ273.8ｇ。58も57と同じ石材だがすり石としうるかどうかは明確でない。長さ61.5㎜、重さ44.5ｇ。

**6号土坑［ＳＫ６］（図版29、第42図）**

５号土坑に接してその南にある。二段掘の不整形プランで、長軸295cm、短軸210cm以上を測る。東側の最も深い所で100cmの深さがある。弥生上器のほかに黒曜石剥片と種子が出土している。

**出土遺物（図版31・32、第47・48図１～45、第59図46）**

**土器**（第47・48図１～45）１～12は壷。１は精良な土器である。８の復元口径31cm。11は底部に焼成後穿孔がある。12は無頸壷で口径17.6cm、器高14.9cm。13は高坏の脚部で、擬朝鮮系無文土器か。14・15は蓋で、15はどっしりした形制をなす。裾径は24cm。16・17は鉢。16は片口になる。口径29.2cm、器高13cm。17は如意状に開く口縁で口径27.4cm。18～33は甕。19は５号土坑の出土品と同一個体と思われる。30は復元口径35.8cm。

34～43は器台で二次被熱の痕跡がある。天地が逆のものもあるかもしれない。37は器高14.2cm。44は甕棺の口縁部片であり、白っぽい色調をなす。口径は１／10ほどの破片から73.8cmに復元したが、やや歪みもあるようなので本来はもう少し小さいものと思われる。45はミニチュアの鉢で、手捏ねである。復元口径4.1cm、器高2.3cm。

**石器**（第59図46）すり石としておく。頁岩か。現存長50.7cm、重さ41.2ｇ。もう１点すり石と思われるごく一部の破片がある。

**７号土坑［ＳＫ７］（図版27、第42図）**

１号住居の西にある。Ｐ22に切られてその南にあり、長軸110cm、短軸48cm、深さ12cmの浅い小さな上坑である。弥生土器片１点が出土したのみである。

**出土遺物（第49図1）**

**土器**　１は壷。１は甕で復元口径24.8cm。

**８号土坑［ＳＫ８］（図版27、第43図）**

１号住居の東にあり、ＳＤ２と９号土坑にはさまれている。調査時にはＢ区南半三日月形土坑としていたものである。北東－南西方向に主軸を持ち、長軸270cm、短軸最大80cmで、深さは40cmを測る。弥生土器のほかに黒曜石剥片が出土している。

**出土遺物（図版32、第　図１～19）**

**土器**　１・２は壷。２は胴部に二条の突帯を貼り付ける。復元胴部最大径38cm。３・４は高坏。３は深みのある坏部に低い脚台が付く。坏部内面には丹塗りの痕跡がある。ほぼ完形で口径22.2cm。４の脚は長い。復元口径25.1cm。５～13は甕。９は甕棺の口縁部片である。10～13はほぼ似たような形状の底部片。８の復元口径30cm。14～19は器台で、14～16と違って17～19はナデの痕跡が著しい。16の器高13.2cm。

**９号土坑［ＳＫ９］（図版27、第43図）**

８号土坑の南にある。南北方向に主軸を持つ不整形の上坑で、長軸240cm、短軸最大100cmを測り、深さは15cmと浅い。弥生土器のみ出土している。

出土遺物（図版33、第50図１～６）

**土器**　１・２とも小壷。１はぽってりした形状の完形品で重量感がある。口縁はかなり歪み、内外

に指圧痕がある。口径6.5cm、器高7.7cm。3・4は甕。4の復元口径29cm。5・6は器台で、6はかなり分厚いつくりである。

10号土坑［ＳＫ10］（図版１、第42図）

１号住居の東北、２・３号住居の南にあり、４号住居に切られている。東西方向に主軸を持ち、長軸205cm、短軸65cm、深さは27cmを測る。弥生土器片と黒曜石剥片１点が出土している。

出土遺物（第50図１～３、第59図４）

土器（第50図１～３）１～３とも甕で、３の復元口径22cm。

土製品（第59図４）甕の底部付近の破片を利用した円盤で、径47.7～50.7mm、重さ26.6ｇ。

11号土坑［ＳＫ11］（図版28、第42図）

２号住居の北にある。調査時には２号住居北土坑としていたものである。南端で浅い遺構を切っており、南北方向の主軸長180cm、短軸最大幅95cm、深さは25cmを測る。弥生土器片のみが出土している。

出土遺物（第50図１～５、第59図６）

土器（第50図１～５）１・２は壺。１の復元口径22cm。３～５は甕。４は鉢に近い形状となろう。５の復元口径26cm。

石器（第59図６）　ごく小破片であるが、粘板岩の片刃石斧の一部であろう。現存長16.5cm。

12号土坑［ＳＫ12］（図版２、第42図）

３号住居を切って、その北にある。調査時には３号住居北土坑としていたものである。他のピットと切り合っているが、北西－南東方向に主軸を持ち、長軸170cm、短軸最大90cmで、深さは35cmを測る。弥生土器のほかに黒曜石剥片が出土している。

出土遺物（図版33、第50図１～９）

土器　１・２は壺。２はぼってりした感じがある。３は猪口に似た小鉢。器高4.4cm。４は椀とすべきか。５は壺。６～９は甕で、８は復元口径が48cmとかなり大きくなるが破片部分が少し歪んでいるのかもしれない。

13号土坑［ＳＫ13］（図版27、第43図）

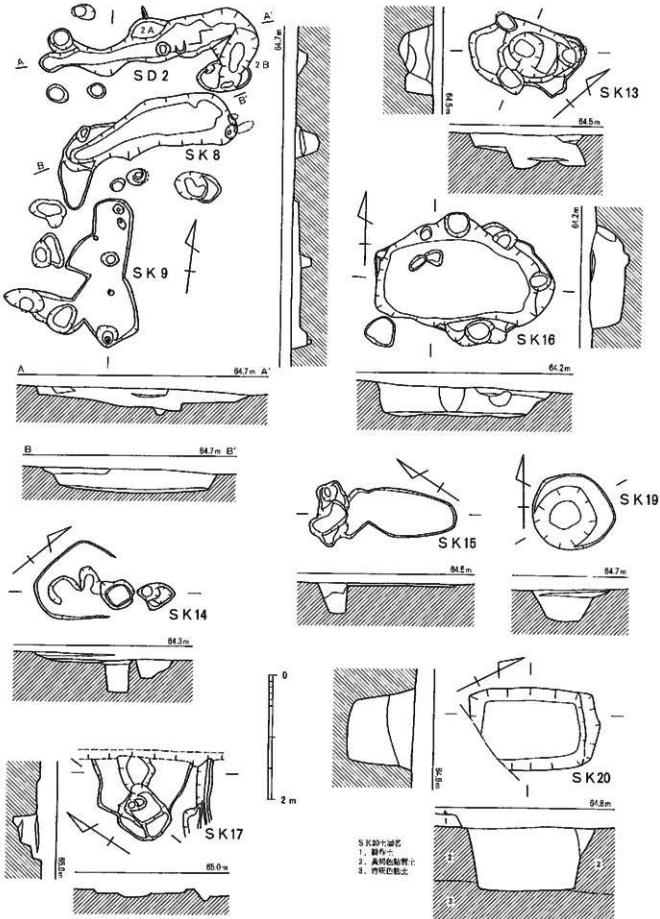
２号住居の北方７ｍほどの所にある。いくつかのピットがくっついたような形状で、北東－南西方向に主軸を持ち、長軸185cm、短軸最大115cm、深さは最大55cmを測る。少量の弥生土器片が出土している。

出土遺物（第50図１）

土器　１は甕。復元口径が21.4cm。二次被熱の痕跡がある。

14号土坑［ＳＫ14］（図版27、第43図）

４号住居の北方４ｍほどの所にある。ピットを取り囲んだ浅いもので、土坑とするにはやや躊躇を覚える。北端部は浅くなって壁面が連続しない。復元で長軸160cmほど、短軸は最大125cm、深さ




第43図　8・9・13～17・19・20号土坑、2号溝実測図（1/60）

は最大15cmを測る。弥生上器片と石庖丁、黒曜石剥片が出土しているが、石庖丁は行方不明。

**出土遺物（第50図１～６）**

**土器**　１は壷。復元口径20.4cm。２は小鉢で胴部に小さな突帯を貼り付ける。復元口径9.8cm。
３～６は甕で、５の復元口径が24cm。

**15号土坑［ＳＫ15］（図版27、第43図）**

14号土坑の西にある。土坑とするには躊躇するほどの浅いものである。北西端部をピットに切られている。長軸175cm、短軸は最大80cm、深さは最大５cmしかない。弥生土器片２片と黒曜石剥片が出土している。

**出土遺物（第50図１）**

**土器**　１は甕の小破片で、断面図を示しうるのみである。

**16号土坑［ＳＫ16］（図版27・29、第43図）**

13号土坑の東北にあり、調査時にはＣ区北不整形土坑としていたものである。やや角張った楕円形プランをなし、壁面にはいくつかのピットがある。このピットは伴うものかどうか断定はできないが、遺物はここで報告する。ほぼ東西方向に主軸を持ち、長軸280cm、短軸最大180cmで、深さは50cmを測る。多量の弥生土器のほかに黒曜石剥片、軽石製品が出土している。

**出土遺物（図版７・８、第51～53図１～70、第59図71～73）**

**土器**（第51～53図１～70、第59図71）　１～８は壷。３は鋤先口縁にはならないだろう。頸部に暗文を施す。４は無頸壺で復元口径21cm。９・10は高坏で、９の坏部は緩やかに外反する口縁部をなし復元口径19cm。10は中実部分が3.5cmある。ともに擬朝鮮系無文土器か。11は鉢としておく。12は脚台であるが、本体は不明。高坏にはならないだろう。13～16は蓋で、16の復元裾径は29.8cm。

17～60は甕。17は小型である。18・40は口縁直下に指押え痕がある。44・49は鉢に近い形状になる。49の復元口径37.8cm。50・51は甕棺の口縁部片。54の底部は分厚い。59・60は体部が大きく開いて行くので49のごとき器形の底部かもしれない。61～68は器台であるが、口縁か裾部か明確でないものもある。64は復元裾径9.4cm、器高14.8cm。69は完形のミニチュア甕であるが、造りは普通の甕と同じである。口径7.1cm、器高4.7cm。口縁直下に整形時の押さえの痕跡がある。70は手捏ねの鉢でほぼ完形。口径6.6cm、器高３cm。

第59図71は壷の肩部付近で白い顔料による平行線の彩文がある。

以上のうち、５・８・９・12・27・31・47・49・56・57・１・23・33・36・41・61・62・65・66・68は床面から出土し、４は南壁、22は南東、67は東北壁のピットから出土した。

**石器**（第59図72・73）　72は砂岩の砥石で中砥と仕上砥の中間くらいのものである。割れたあとも使用している。現存長58cm。73は軽石製品であるが、何かを擦った結果としてＵ字形になっている。浮子ではないだろう。現存長56cm、重さ13.4ｇ。

**17号土坑［ＳＫ17］（図版27、第43図）**

１号住居のすぐ北にある。ピットを取り込んだ不整形プランで、東側は段差により遺存しない。南北方向は150cm、東西は130cm以上となる。深さは５cm内外しかなく浅い。弥生上器のほかに黒曜

石剥片が出土している。

**出土遺物（第56図１～８）**

**土器**　１は壷の底部。２～７は甕。４の復元口径24cm。８は器台で復元裾径10cm。

**18号土坑［ＳＫ18］（図版27・28・30、第38図）**

１号住居の南側を切って存する。調査時にはＡ区１住南円形竪穴としていたものである。楕円形プランをなすが、北端部は壁面を欠失する。ほぼ南北方向に主軸を持ち、長軸380cm、短軸最大260cmで、深さは30cmを測る。そこそこの量の弥生土器のほかに黒曜石剥片が出土している。

**出土遺物（図版８、第54・55図１～30）**

**土器**　１～４は壷で、２は小壺になる。１の復元口径23cm。５～７は鉢で、７の復元口径10.4cm。８・９は蓋で、８の裾径は26.4cm。10～28は甕。11は肩部の張る形状をなす。13および20の底部付近は二次被熱の痕跡がある。20は口径28.4cm、器高34.1cm。23はやや小さめの復元であるが甕棺の口縁部片。29・30は器台。29は裾径11.6cm。

以上のうち、３・４・11・13・19・28・１・９・12・14・16・17・22・27・30は床面一括、５・７・10・15・21は下層、６は上層の出土。

**19号土坑［ＳＫ19］（図版27・28・30、第43図）**

１号住居の東側、８号土坑との間にあり、もとは１号住居と重複していたものであるがいまはその先後関係は面的には不明である。調査時にはＢ区西南円形土坑としていたものである。円形プランで径135～140cm、深さは最大50cmを測る。少量の弥生土器のほかに黒曜石剥片が出土している。

**出土遺物（図版34、第56図１～４）**

**土器**　１は鉢で、外面はミガキである。復元口径16.8cm、器高11cm。２は小さな底部であるが何になるか不明。二次熱を受けているらしい。３は蓋で、復元裾径は16cm。４の甕は復元口径20cm。

**20号土坑［ＳＫ20］（図版30、第43図）**

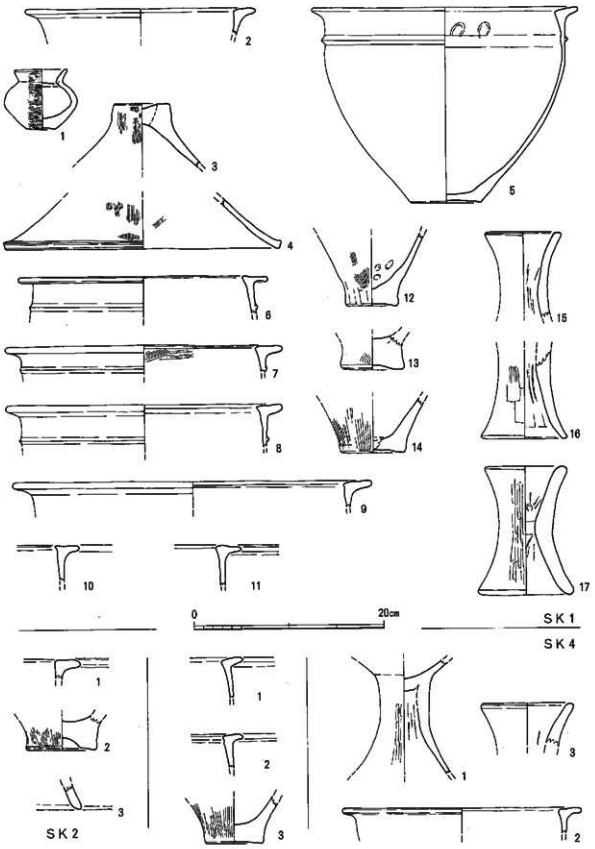
３号土坑の西にあり、調査時にはＢ区西南方形上坑あるいは竪穴としていたものである。長方形プランの南東隅が調査区外にかかっている。ほぼ南北方向に主軸を持ち、長軸200cm、短軸最大133cmで、深さは103cmと深い。そこそこの量の弥生土器のほかに黒曜石剥片が出土している。

**出土遺物（第56図１～17、第59図18）**

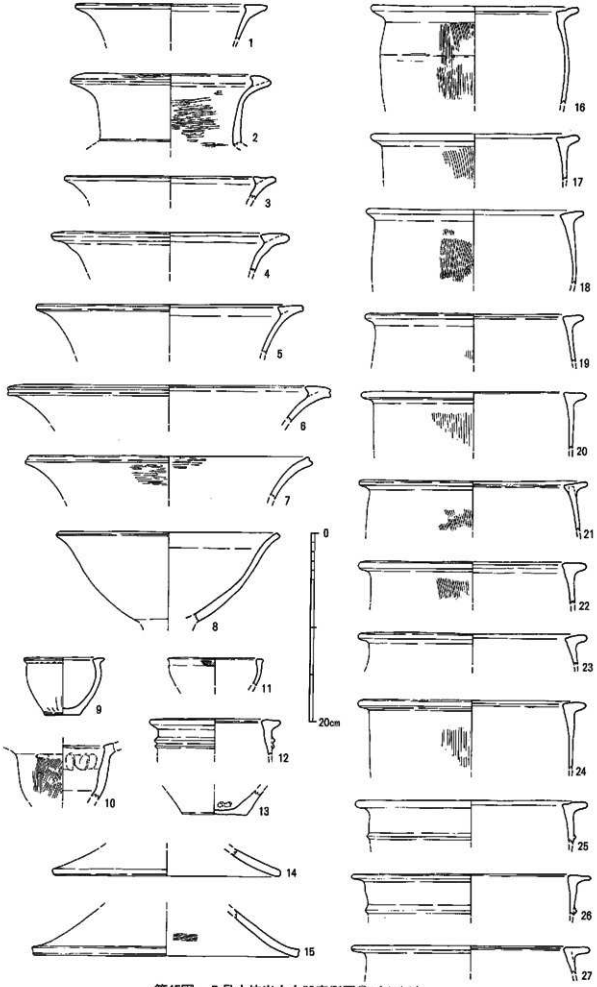
**土器**（第56図１～17）１は壷で内外とも刷毛目である。２～15は甕。８は二次熱を受けている。９の復元口径30cm。10は復元口径は小さくなっているが11とともに甕棺の口縁部片としてよいだろう。16～17は器台で、16の復元裾径10.2cm。

以上のうち、２・３・４・５・６・８は下層の出土である。

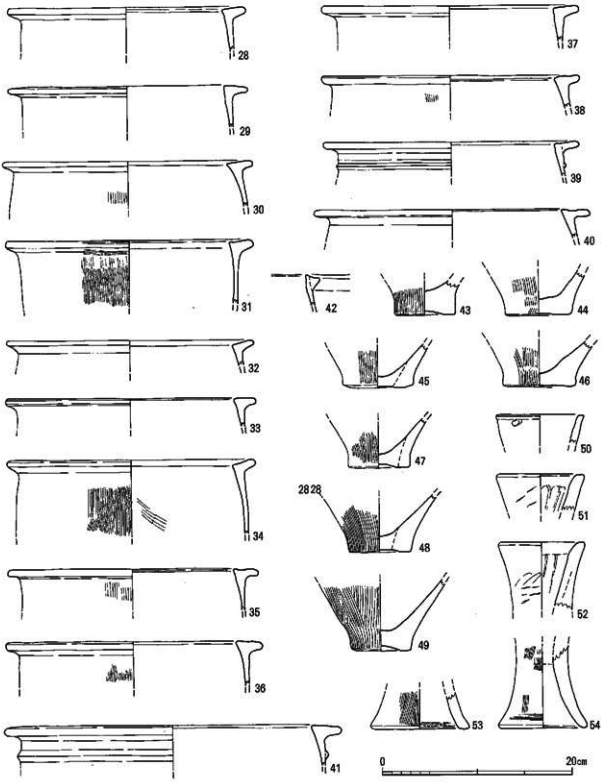
**石器**（第59図18）　硬砂岩と思われる表裏の擦れた台石である。長さ302cm。別にもう１点の台石らしき破片がある。



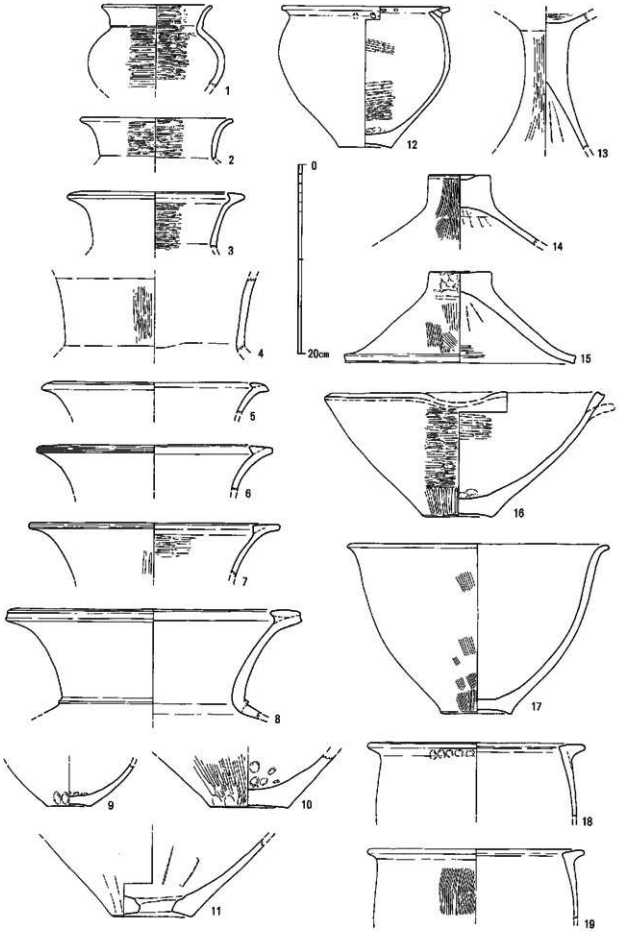

第44図　1～4号土坑出土土器実測図（1/4）



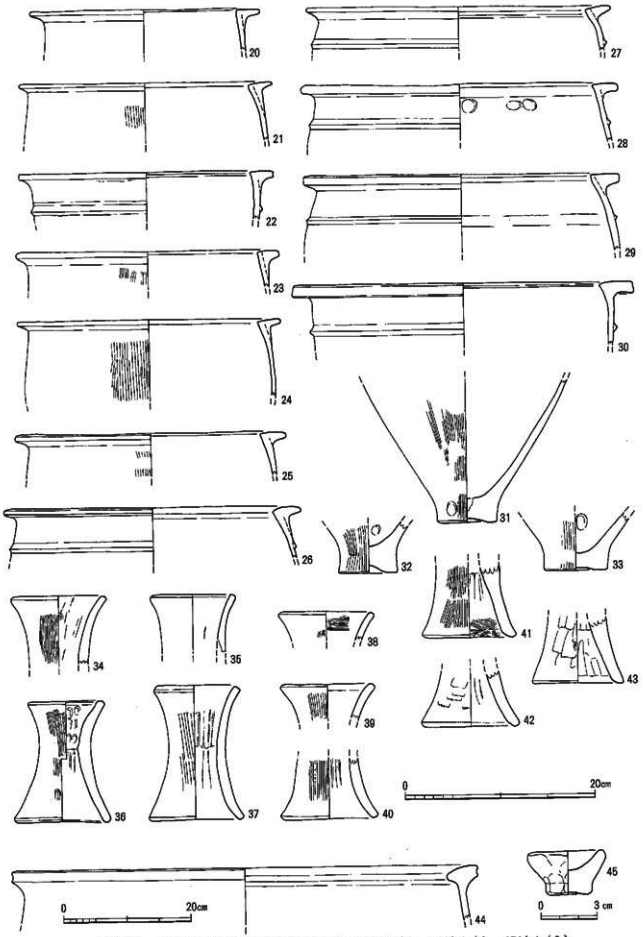

第45図　5号土坑出土土器実測図①（1/4）



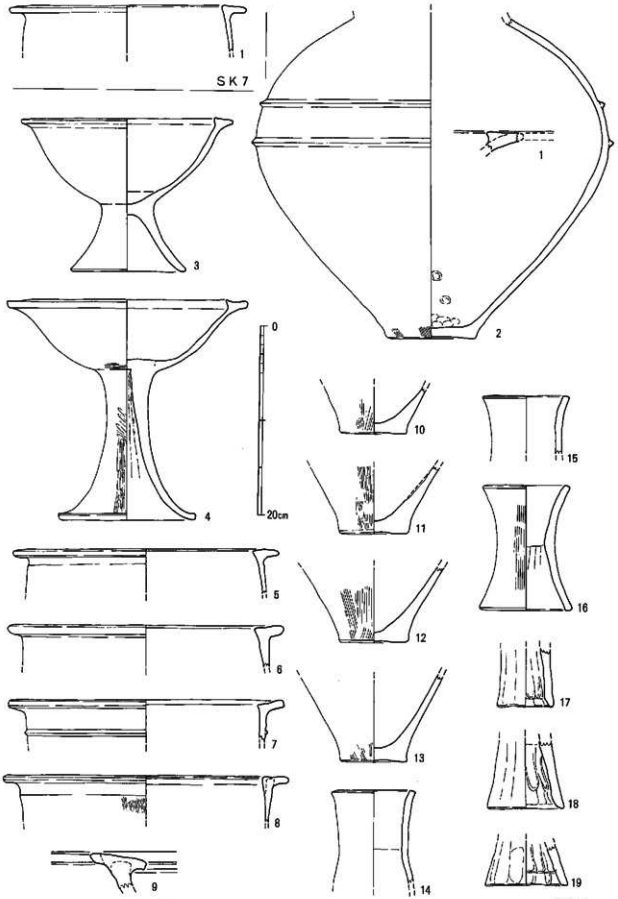

第46図　5号土坑出土土器実測図②（1/4）



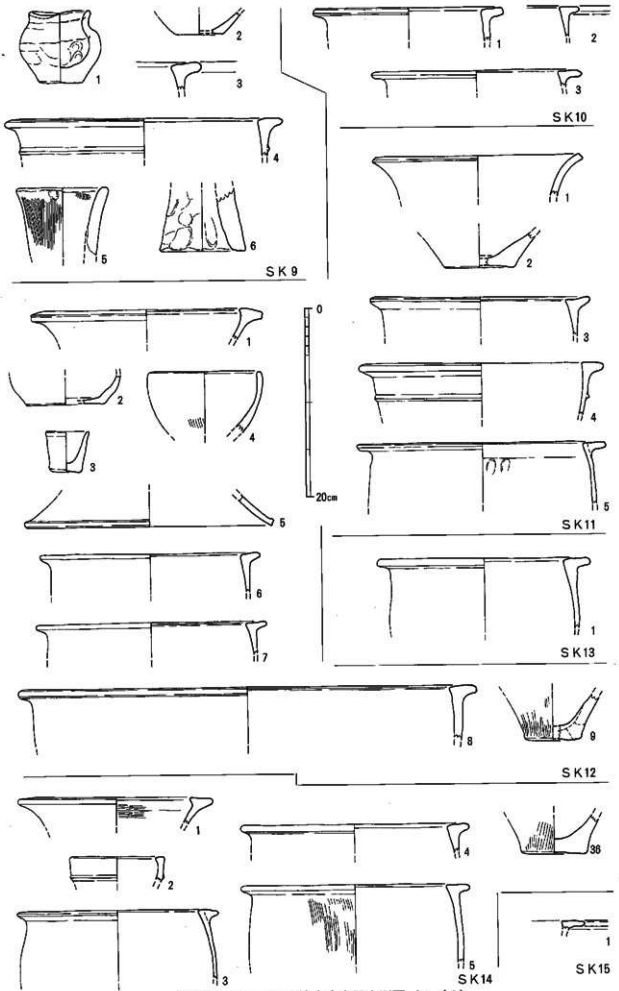

第47図　6号土坑出土土器実測図①（1/4）



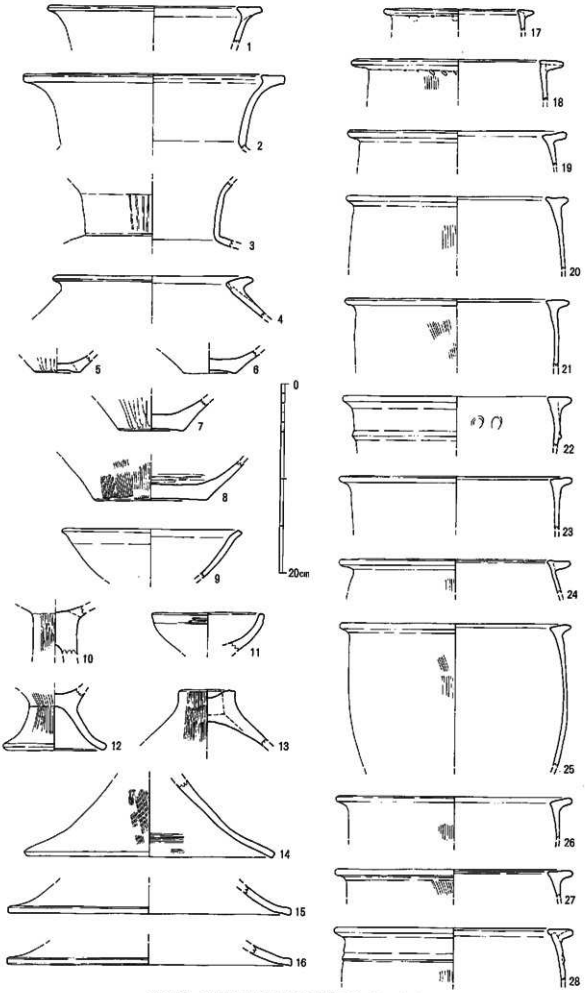

第48図　6号土坑出土土器実測図②（1～43は1/4、44は1/6、45は1/2）



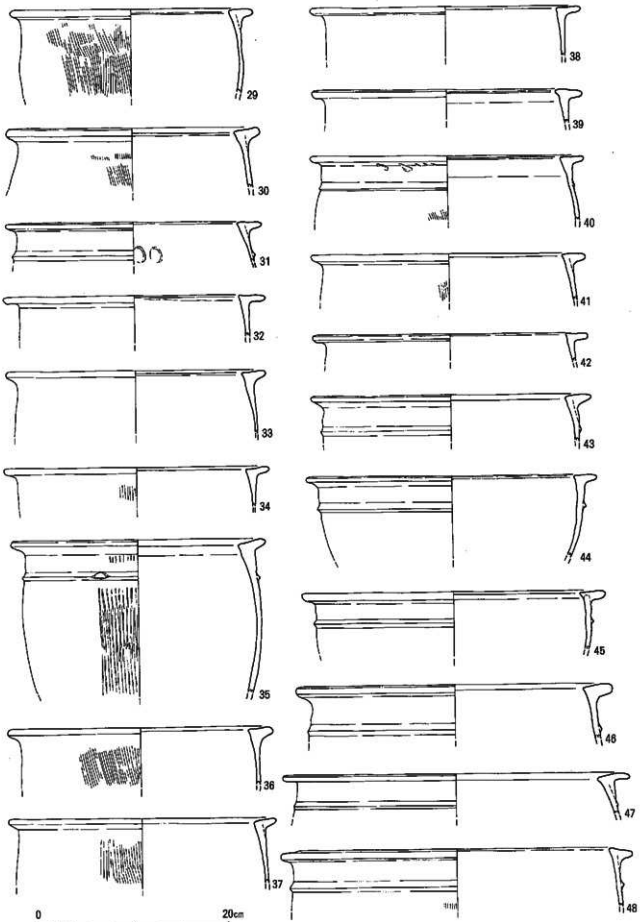

第49図　7・8号土坑出土土器実測図（1/4）




第50図　9～15号土坑出土土器実測図（1／4）




第51図　16号土坑出土土器実測図①（1／4）

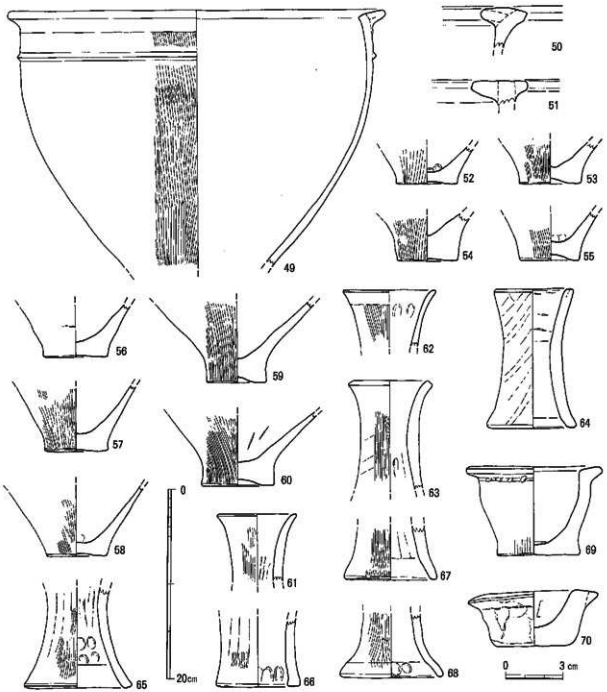



第52図　16号土坑出土土器実測図②（1／4）

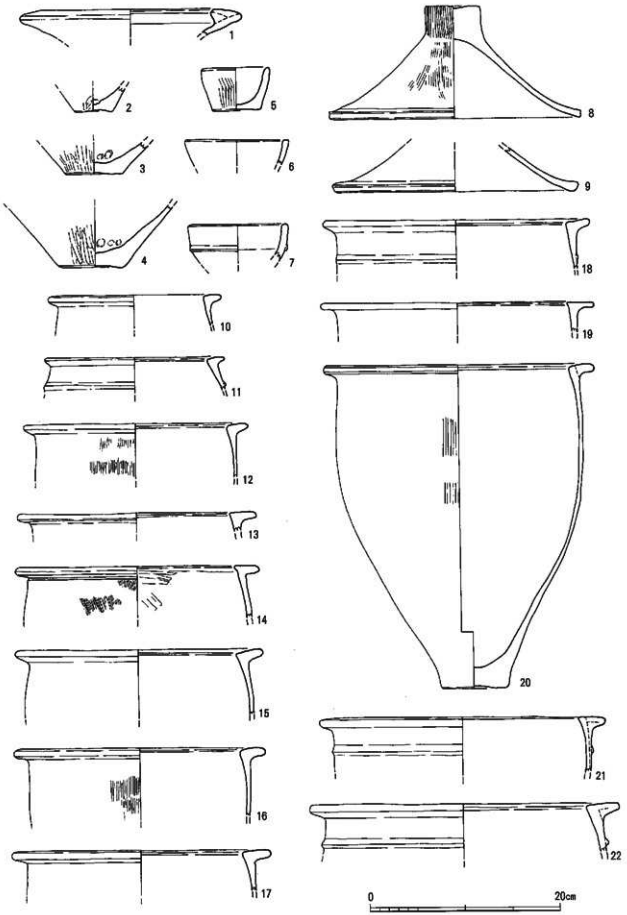
## (3) 溝

### 1号溝［ＳＤ１］(図版1、第42図)

1号住居の南にある細い溝である。L字状というよりはレ字状に屈折し、2号土坑に切られるとともに他の小ピットとも重複している。南北方向は長さ490cmで、その中央やや北寄りの所で2号土坑に切られている。それの南端から北東方向へ屈折し約300cmまで延びる。幅は25～40cmで、深さは10cmに満たない。少量の弥生土器が出土している。




第53図　16号土坑出土土器実測図③（69・70は1/2、他は1/4）




第54図　18号土坑出土土器実測図①（1/4）

**出土遺物（第57図１～４）**

**土器**　１は蓋で復元径は28cm。２～４は甕で、２は復元口径10.7cmの小型品である。３は北側、４は東側から出土した。

**２号溝［ＳＤ２］（図版27、第43図）**

８号土坑のすぐ北にあり、溝というよりは細長い土坑としたほうがよいのかもしれない。ほぼ東西方向に長く、長さ345cmでその東端部で屈折して南へ130cmほど延びる。幅は25～65cmで、深さは最大30cmを測る。少量の弥生土器が出土している。

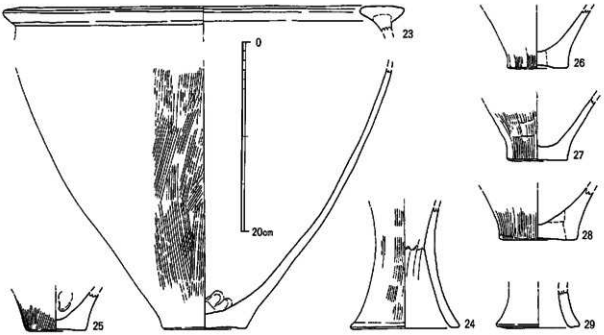
**出土遺物（第57図１～７）**

**土器**　１は壺とすべきだろう。２～６は甕で、１はあるいは壺とすべきか。５は復元口径26.4cm。７は器台片。１～５は東半部、６・７は西半部から出土した。

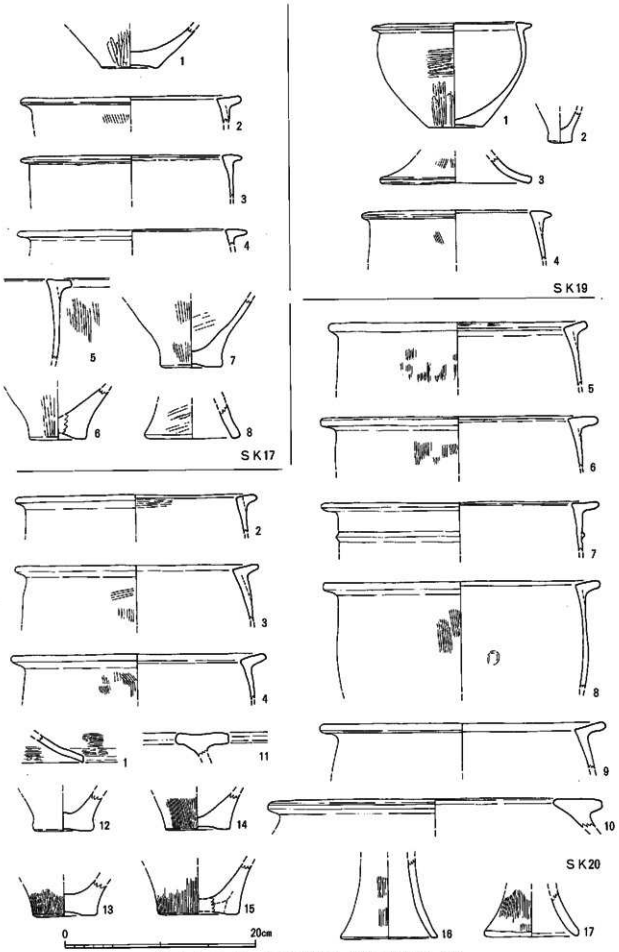
## (4)　その他

**ピット出土遺物（図版38、第57図、第59図）**

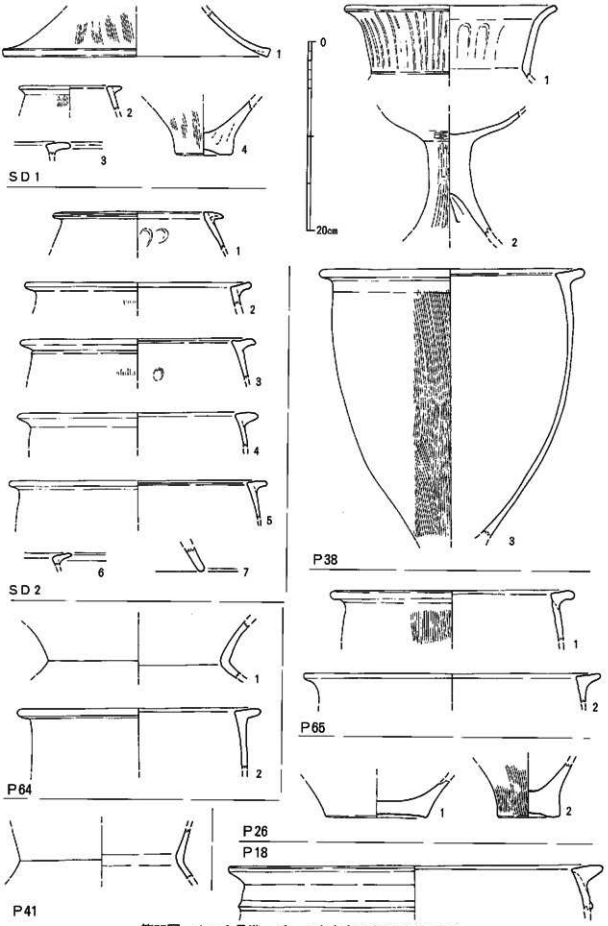
- Ｐ38　１は壺で外面に暗文が施される。復元口径22.4cm。２は高坏で、脚部上半が中実になる。擬朝鮮系無文土器か。３の甕は口径28cm。
- Ｐ64　１は壺で頸部外面はもとは暗文が施されているらしい。２の甕は復元口径25.5cm。
- Ｐ65　ともに甕で２の復元口径31.1cm。
- Ｐ26　１は壺、２は甕の底部で、１の底径10.6cm。
- Ｐ41　壺の頸～肩部片と思われるが、頸部の立ち上がりがやや強い感がある。
- Ｐ18　甕の口縁部片で、復元口径39cm。




**第55図　18号土坑出土土器実測図②（１/４）**




第56図　17・19・20号土坑出土土器実測図（1/4）




第57図　1・2号溝、ピット出土土器実測図（1/4）

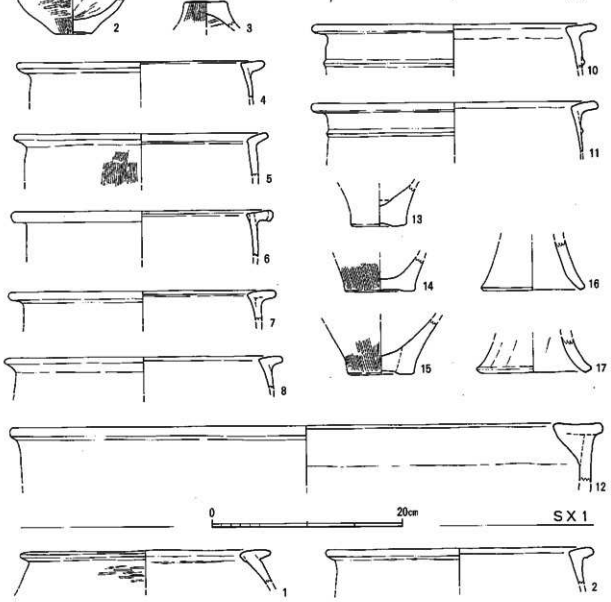
・P35　第59図1は黒曜石の剥片の縁辺に剥離を施す。現存長29.8cm、重さ5.5g。

・P62　第59図1も黒曜石の剥片の縁辺に細かい剥離を施す。現存長16cm、重さ0.7g。

**SX1出土遺物（第58図1～17、第59図18）**

**土器**（第58図1～17）　1・2は壷。1は鋤先口縁で復元口径27cm。2は底部が分厚い。3は蓋。4～15は甕。5はやや特異な口縁形態をなす。11の復元口径30cm。12は甕棺の口縁部片で口径62cmに復元される。16～17は器台で17の復元脚径12cm。

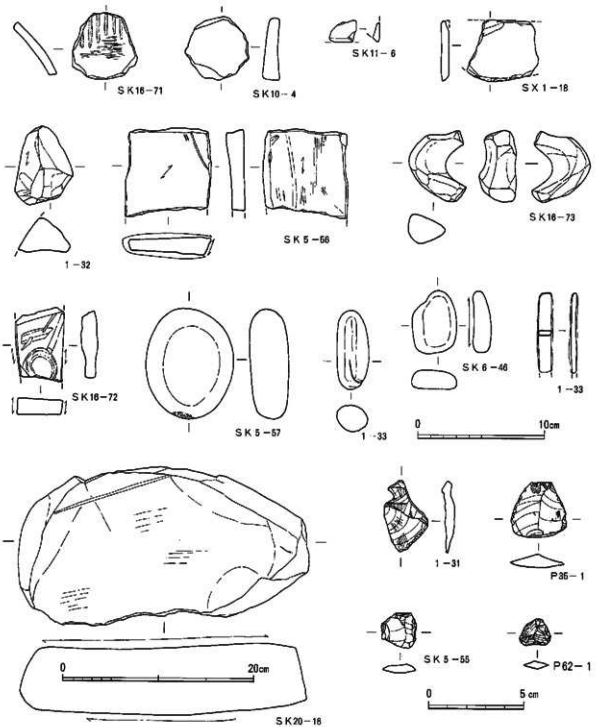
**石器**（第59図18）片岩の打製品で、一側縁のカーブからすると石包丁的な用途であろうか。現存長55.5cm。




第58図　包含層、その他出土土器実測図（1/4）

**その他出土遺物（第58図１・２）**

**土器**　１は壷とすべきだろう。復元口径26cm。２は甕で復元口径28cm。




**第59図　土製品、石器、鉄器実測図（1/2、1/3、1/4）**

## 3．古墳時代の遺構と遺物

### (1) 竪穴住居

**4号住居（図版27・28、第37・60図）**

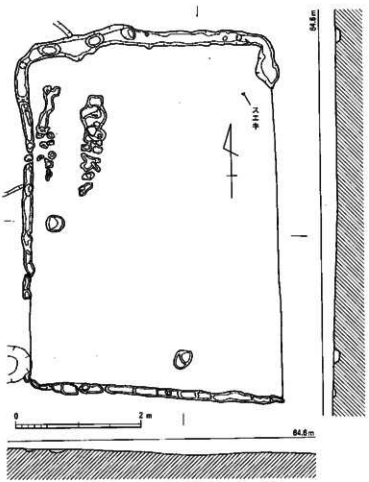
調査区のほぼ中央付近にある住居で、3号住居と10号土坑を切っている。北・西・南の三方の壁周溝のみが残り、壁面は遺存しない。周溝内には小ピットが多数ある。南北方向に主軸を持つ長方形プランで、東西方向が410cm、南北方向が550～590cmを測り、面積は21.25㎡に復元される。床面の北西部に小ピットが南北方向に連続して群集している部分があるが、何の名残りかわからない。それ以外に床面に2個ピットがあるものの浅くて主柱穴といえるかどうかわからない。

床面からごく少量の土師器、須恵器片と弥生土器片が出土している。図示した須恵器、土師器では時期が明確でないが、概ね6世紀代としておきたい。

**出土遺物（図版31、第41図1～5）**

**土器**　1は須恵器壺と思われる肩部付近の破片。2は土師器の椀になるらしい。

3～5は弥生土器。3の壺は粗製である。4・5は甕。5の復元口径25.2cm。




第60図　4号住居実測図（1/60）

## 4．小結

以上の報告を踏まえて若干のまとめを行っておきたい。

### (1) 弥生時代

弥生時代の遺構は竪穴住居3軒と土坑20基であった。出土した土器は、中期前半から中頃にかけて若干の時期幅があるものの、多くは前半でも中頃に近い時期の所産である。田崎博之の編年でいえば、須玖Ⅰ式の中段階に始まり、新段階を中心とした時期に比定できよう。[註1]

竪穴住居は、1号が円形、2号は長方形、3号は隅円長方形のプランとそれぞれに形状を異にする。1号住居は弥生時代前期～中期の通有の円形プランであり、中央に土坑を持ち、環状に柱穴が配される。2・3号はともに約7～9㎡と小さく、柱穴も明確でないところから別の用途の竪穴であった可能性もあろう。また2・3号は重複しているので同時の併存はありえない。

上坑は20基を数えているが、19・20号は円形・長方形の整美なプランという形状から貯蔵穴であったかもしれない。16号もその可能性があるけれども明瞭でない。5・6・8号はやや深さがあるものの不整形のプランであり、ここでは単なる廃棄土坑としておこう。それ以外は不整形であるのみならず浅いものであり、その性格についてはよくわからない。

柱穴群は建物としてまとまるものは見当たらない。

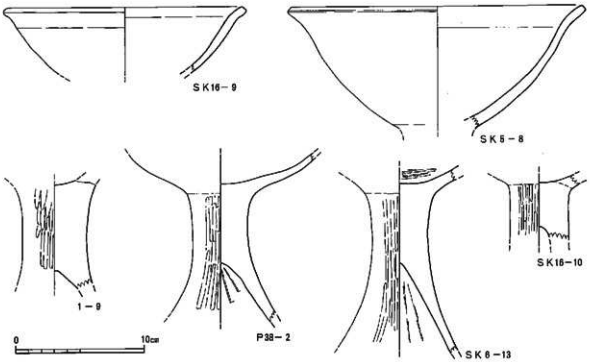
集落のあり方としては、調査した範囲はおそらくある程度の規模を有する集落の東北端部にあたる部分と考えられ、その中心は当該地の西南部に展開しているものと思われる。未調査区にどのような遺構・遺物が埋もれているかわからないが、おそらく竪穴住居群を主体とした集落であり、倉庫として掘立柱建物群が数棟建っていたというものではなかったろうか。今回の調査結果のみからすると多分に一般的な弥生時代中期前半～中頃の農耕集落であったもののように見える。

遺物は、多量の土器のほかに石器として石庖丁・石斧・石鑿・打製石鏃・砥石・使用剥片、鉄器は鑿かと思われるもの1点であった。

土器は壷・高坏・鉢・壺・甕・器台・ミニチュアそして甕棺の破片がある。出土した土器はほとんど破片であり、個体数を把握するには困難を伴うが、口縁と底部の破片が全て一個体のものの一部分であるとして数えると、壷157、高坏14、鉢17、壺113、甕1300、器台159、ミニチュア4、甕棺21となり、総数1785個のうち甕・器台・壺が多いことがわかる。貯蔵用とされる壺は全体の8.8%であり、煮沸用とされる甕は72.8%、器台は8.9%である。

ちなみに大川市下林西田遺跡[註2]は弥生前期前半から中期中頃までの土器を出土しているが、その主体の時期をなす中期初頭～前半の土器は、壺135、高坏3、鉢5、壺19、甕372、器台・支脚39の総数573個であり、そのうち壷が23.6%、甕が64.9%で、器台・支脚は6.8%である。地域が異なり、遺跡の性格の違いはあろうが、三坂七尾の中期前半～中頃には壺が減り、煮沸に供される甕と器台の占める比率が高くなっている。ただ両遺跡とも祭祀に大きく関わるというような特殊なものではなく、一般的な集落と捉えられることからすれば、弥生中期の前半から中頃にかけて煮沸形態の変化があったものであろうか。今後他のいろんな地域の遺跡における土器のあり方を検討すれば、あるいは興味ある結果が得られるかもしれない。

ところで、注意すべきは第61図に示す高坏であろう。1号住居、5・6・16号土坑、P38から出




第61図　高杯実測図（1/3）

土したもので、口縁端部が外反して開く坏部2点と、上半が中実となった脚部4点の計6点である。これらは通有の高坏と異なり、いわゆる擬朝鮮系無文土器もしくはその系統の土器と見てよいだろう。[44]似たような高坏は近い所では福岡市姪浜遺跡から中期前半期のものが出土している。[45]

糸島地方で無文土器とされる資料は、弥生早期段階において二丈町曲り田遺跡に6点ほどの壺があり、[46]同様の壺は同町木舟・三本松遺跡[47]でも出土している。いわゆる粘土紐甕を中心とする「後期前半」無文土器もしくは擬無文土器とされるものは二丈町曲り田遺跡、[48]前原市三雲遺跡[49]に例があり、三坂七尾の高坏はこれらと同じ頃の所産とみてよい。また、粘土帯甕を主体とする「後期後半」無文土器は志摩町御床松原遺跡[50]で出土している。

これまでに朝鮮系無文土器の出土は有明海周辺部に多く、玄界灘沿岸部はむしろ少ない傾向にある。それが時期的なことも含めて何を意味しているか、今後もっと検討されねばならないだろう。

糸島地方には弥生早期から二丈町曲り田、志摩町新町、前原市志登・石ヶ崎・三雲加賀石・井田用会・宮の前など多くの支石墓が営まれており、それは当然のことながら朝鮮半島との交流があったことの証左である。中期後半には「伊都国」の王墓が三雲に出現し、周辺では多くの楽浪系の土器も出土していて朝鮮半島との密接な交流を物語っている。王墓の系譜は井原鑓溝を経て平原へとつながっていくが、未知の王墓も埋もれているに違いない。伊都国の繁栄は弥生終末まで続いていくので、朝鮮半島系の土器はもっと埋もれているのではなかろうか。

石器は量が少ない。石庖丁2点（行方不明だが1号住居と14号土坑から出土）や粉瘢のある土器（1号住居）の存在は、この集落の住人たちが稲作にも携わっていたことを証するものであり、また打製石鏃4点（遺憾ながらこれも行方不明）はおそらく狩猟に用いられたものであろう。

出土した黒曜石のコア（核）および剥片は総数129点であり、それは総重量574gを量る。そのう

ち1号住居からは重量比で30.4%にあたる174.5g（46点）が出土しており、これは1号住居で石器製作が行われていたことを示唆するものであろう。また全体としては、この集落が弥生中期前半でも中頃に近い時期にあたることは、黒曜石を素材とする石器使用の下限に近いものと思われる。次なる本格的な鉄器社会への過渡期に位置する時期でもある。なお、サヌカイトは1点の剥片もなかった。参考までに先にふれた大川市下林西田遺跡[62]では黒曜石・サヌカイトが総量約7100g出土しておち、どちらかといえばサヌカイトの量の方が多かった。

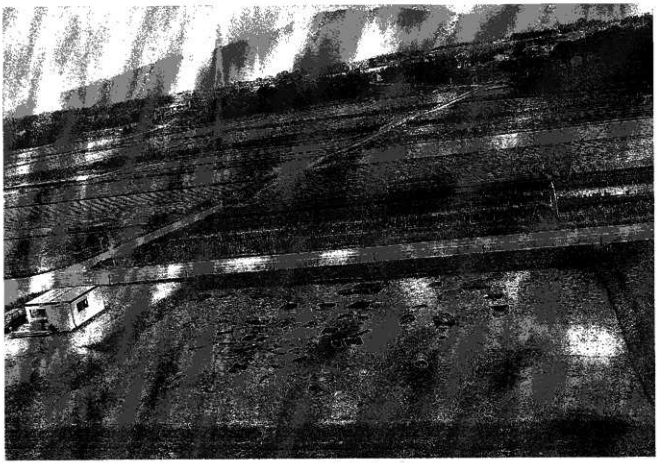
### (2) 古墳時代

古墳時代の遺構で明確なものは竪穴住居1軒とピット1個のみであった。住居は遺存状態がよくなく、周壁溝が三方に残っているのみであった。出土した土器も少なく時期を明示しがたいが、須恵器片より6世紀代と考えておく。ただ6世紀代であれば通常はカマドを付設するのであるが、ここの住居には痕跡も見られず、またプランも長方形である。あるいはもう少し古い時期の所産の可能性もないではない。古墳時代前期にしろ6世紀代にしろ、その時期の集落本体は弥生期と同じく当該地の西南部にあるのであろう。


| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 田崎博之 | 1985 | 「須玖式土器の再検討」 史淵122 |
| 2 | 福岡県教育委員会 | 1998 | 『下林西田遺跡』 福岡県文化財調査報告書 第132集 |
| 3 | 片岡宏二 | 1999 | 『弥生時代渡来人と土器・青銅器』 雄山閣 |
| 4 | 福岡市教育委員会 | 1996 | 『經武遺跡2』 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第478集 |
| 5 | 福岡県教育委員会 | 1984 | 『石崎曲り田遺跡Ⅱ』 今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第9集 |
| | 福岡県教育委員会 | 1985 | 『石崎曲り田遺跡Ⅲ』 今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第11集 |
| 6 | 二丈町教育委員会 | 1994 | 『木舟・三本松遺跡』 二丈町文化財調査報告書 第9集 |
| 7 | 福岡県教育委員会 | 1983 | 『石崎曲り田遺跡Ⅰ』 今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第8集 |
| 8 | 福岡県教育委員会 | 1982 | 『三雲遺跡Ⅲ』 福岡県文化財調査報告書 第63集 |
| 9 | 志摩町教育委員会 | 1983 | 『御床松原遺跡』 志摩町文化財調査報告書 第3集 |

# 図　版

a．三坂七尾遺跡第２次調査地点全景（上から）



b．同上（西から）

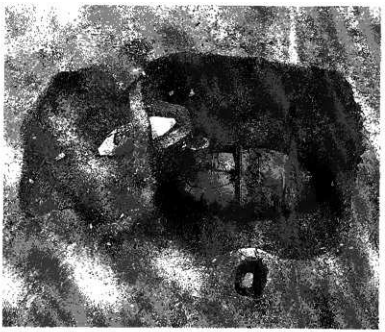
a．1号墓、1号祭祀土坑

c．3・4号墓

b．2号墓

d．3号墓

e．4号墓



f．5・6号墓

a．7号墓

d．9号墓

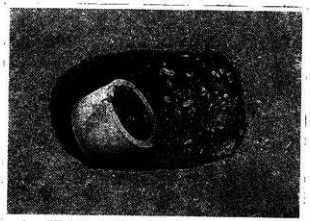
b．8号墓

e．10号墓

c．7・8号墓、4号祭祀土坑

図版　4

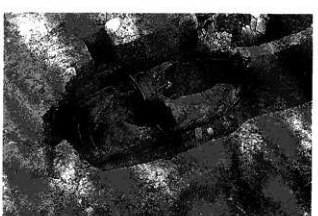
a．11・12号墓



d．14号墓

e．15号墓

b．11号墓（下層）



f．16号墓

c．13号墓

g．17号墓

a．18号墓

e．22号墓

b．19号墓

f．22号墓

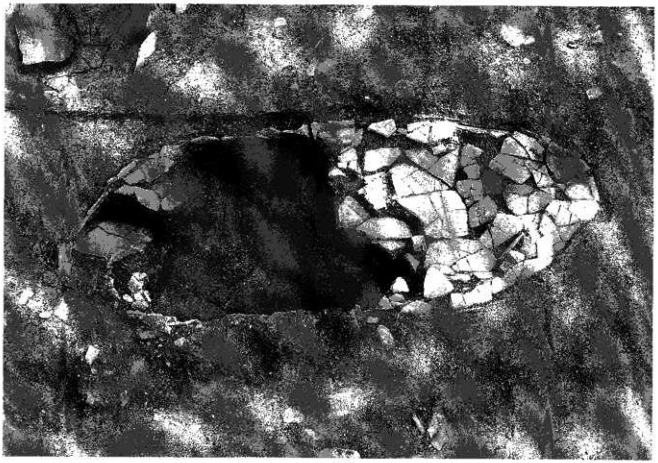
c．20号墓

g．23・24号墓

d．21号墓

h．24号墓

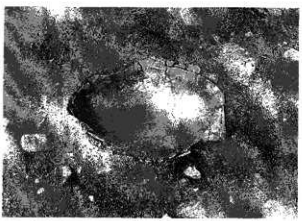
図版　6



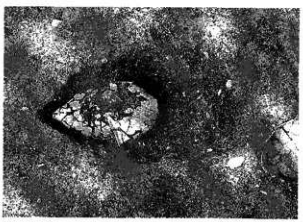
a．23号墓

b．23号墓墓壙内翡玉製管玉出土状況

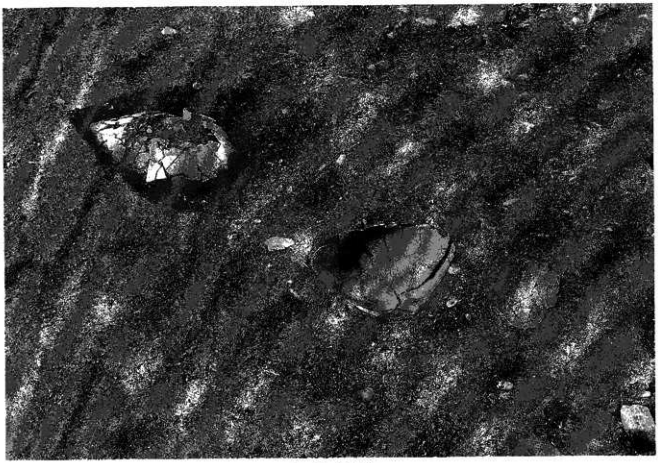
d．26号墓



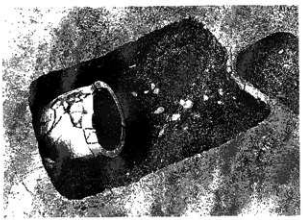
c．25号墓



e．28号墓



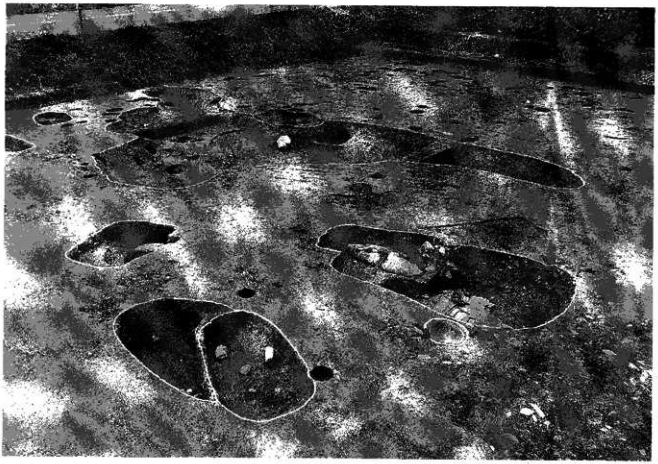
a．28～30号墓



b．31号墓

c．32号墓

d．33・34号墓

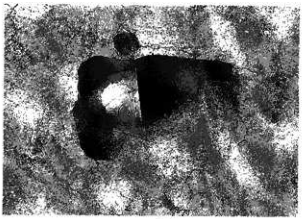


a．32・34号墓周辺

b．33号墓墓壙半裁状況

d．34号墓

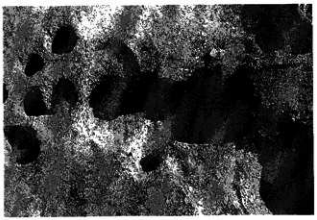
c．33号墓粘棺完掘状況



e．35号墓

a．36号墓

b．38号墓

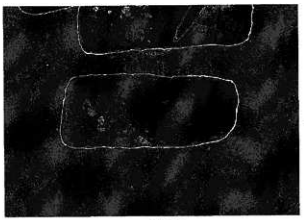


c．39号墓

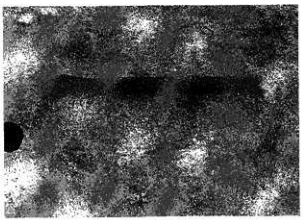
d．43号墓と7号祭祀土坑

e．42号墓

f．46号墓

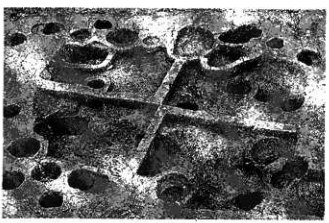


g．47号墓



h．48号墓

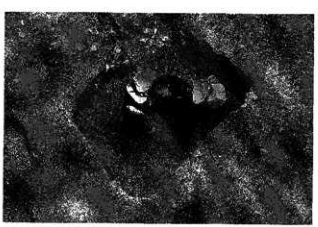
a．51号墓



b．52号墓

c．55号墓

d．1号祭祀土坑



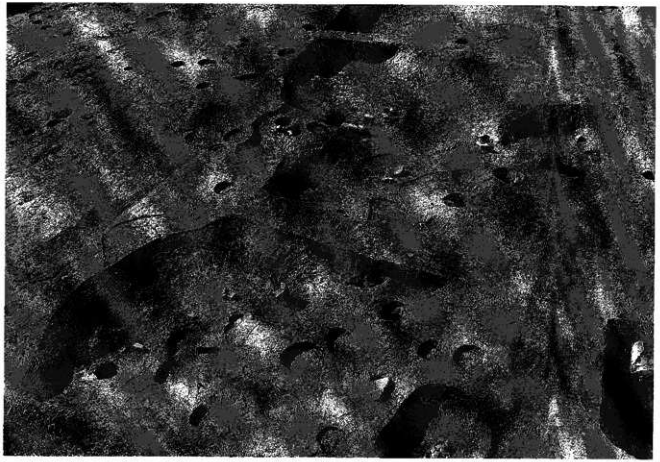
f．3号祭祀土坑

e．2祭祀土坑

g．4号祭祀土坑

a. 4号祭祀土坑土器出土状况近景

b. 5号祭祀土坑

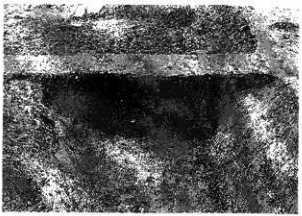


a．6号祭祀土坑

b．同上土器出土状況①

d．同上土器出土状況③

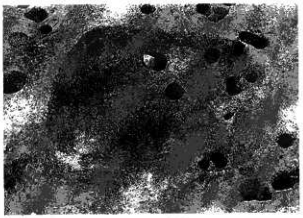
c．同上土器出土状況②



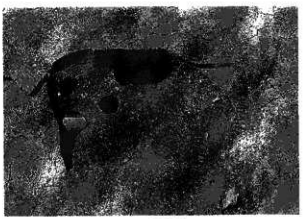
e．同上西土層断面

a．54号土壙墓

b．55号土壙墓

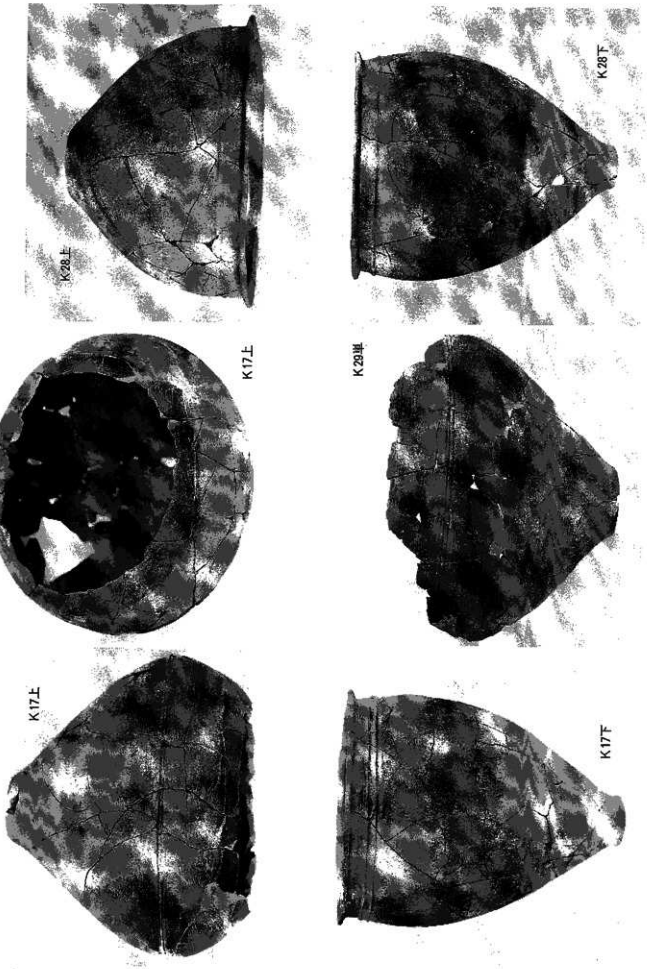


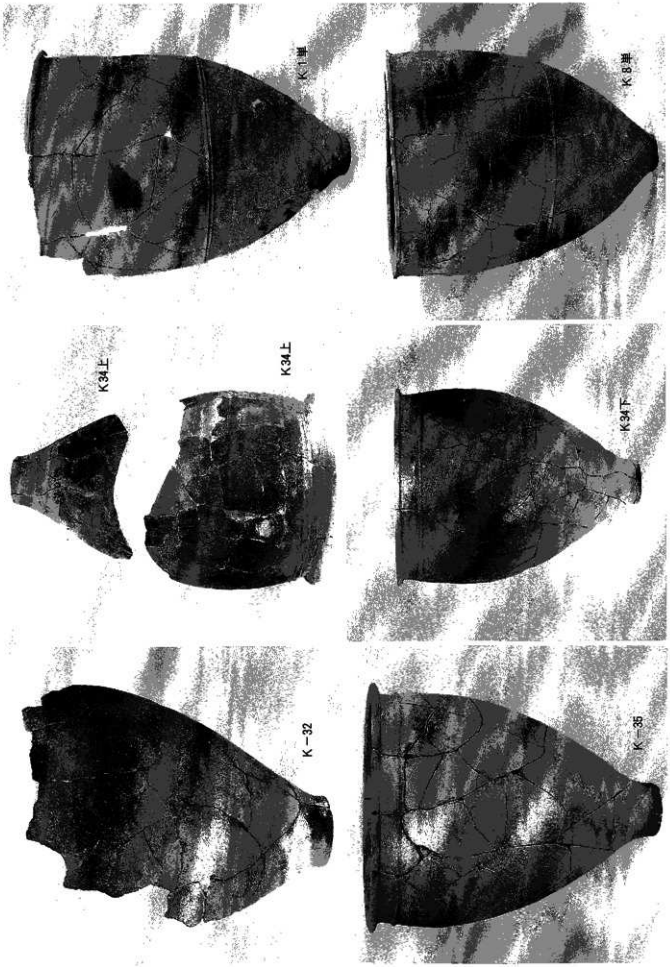
c．1号土坑

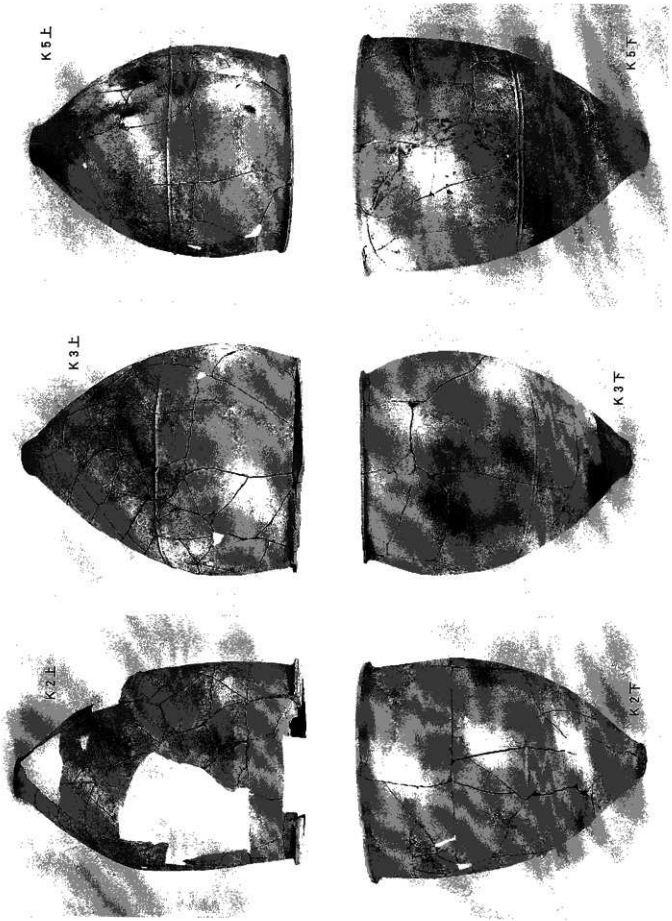


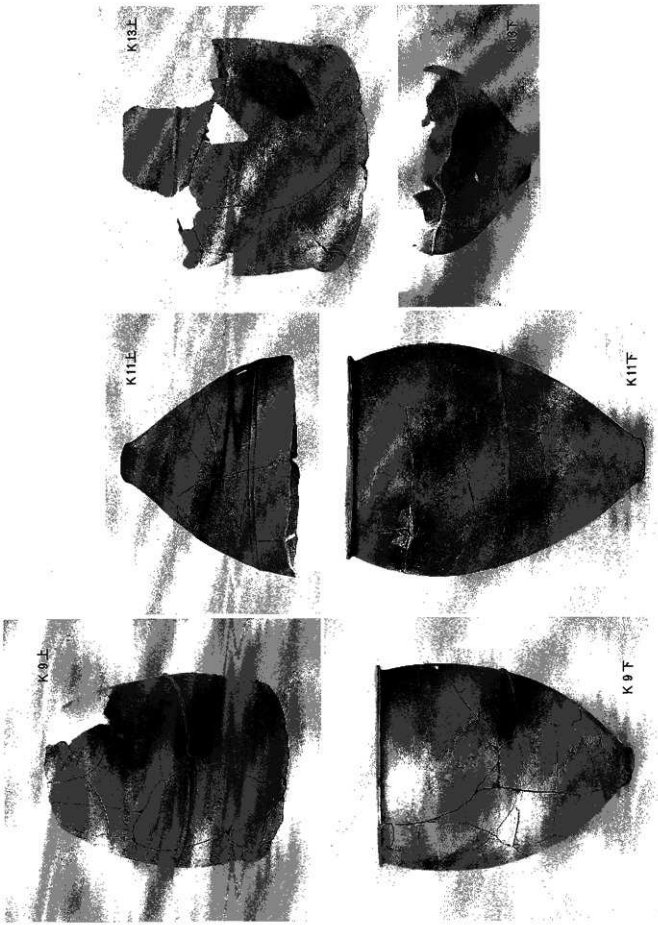
d．2号土坑

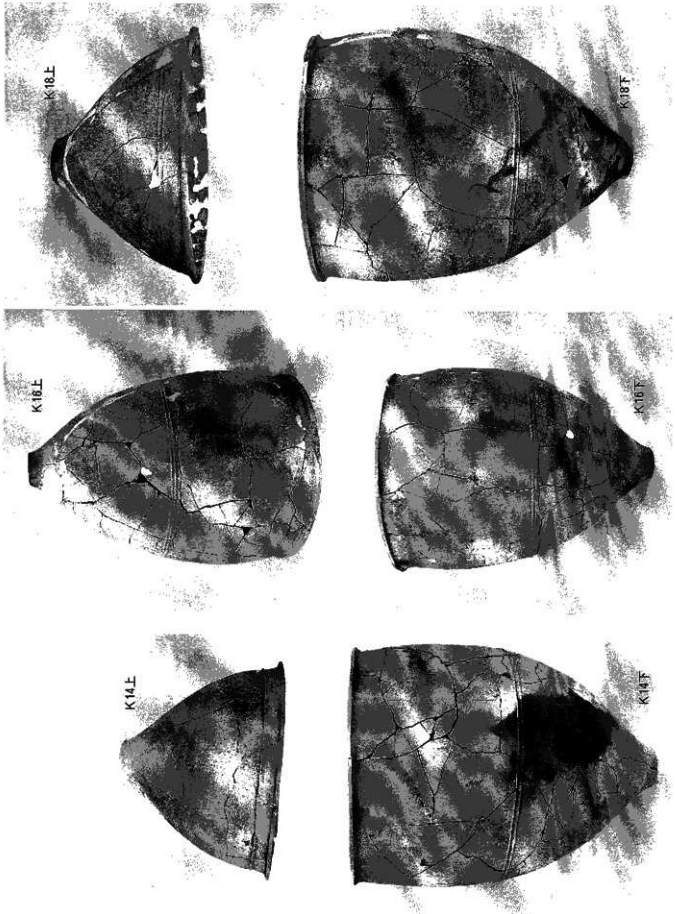
図版 16

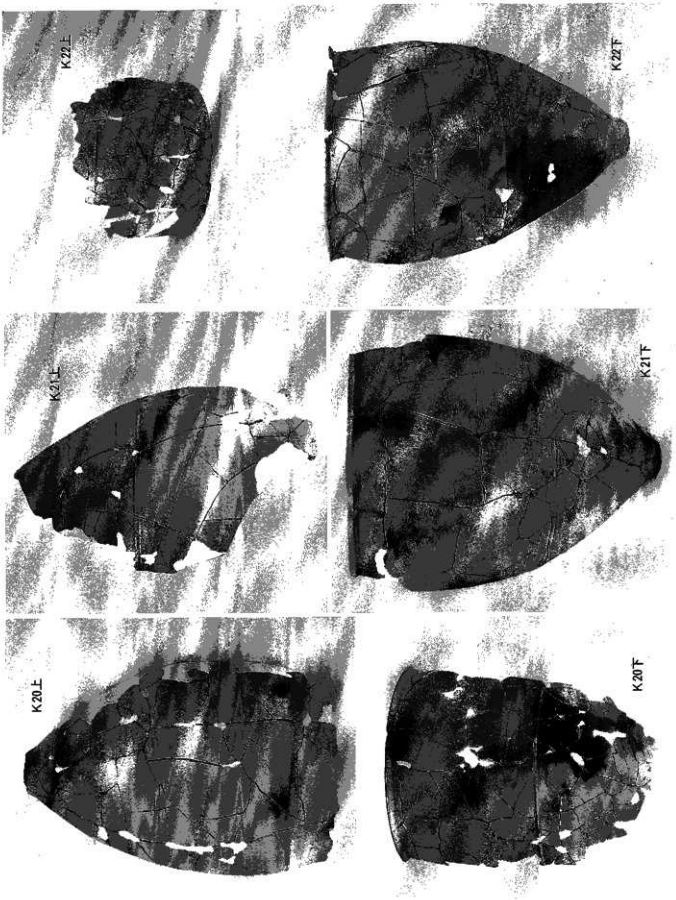



K34上
K34上
K－32
K11裏
K34下
K－35
K8裏


K5上
K3上
K2上
K5下
K3下
K2下


K 9上
K11上
K13上
K 9下
K11下
K13下

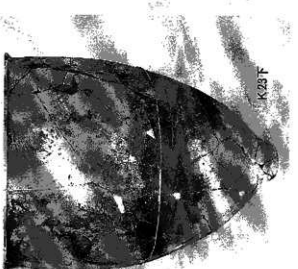

K18上
K18下
K16上
K16下
K14上
K14下


K20上
K21上
K22上
K20下
K21下
K22下

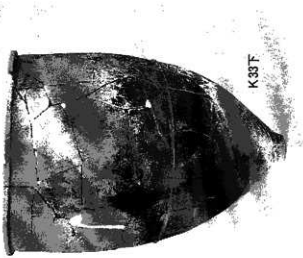
K23上

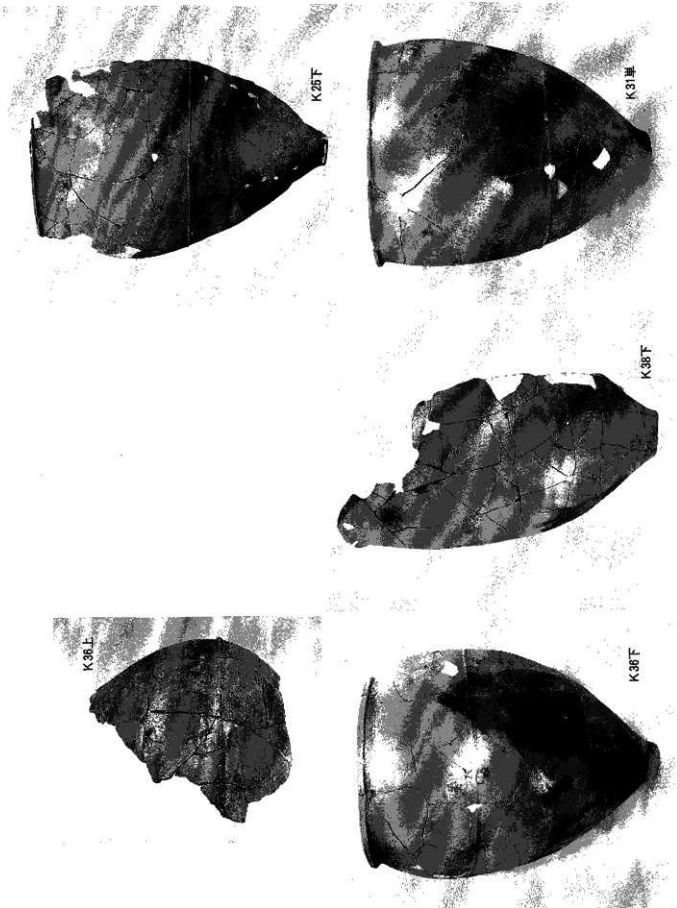
K24上

K33上

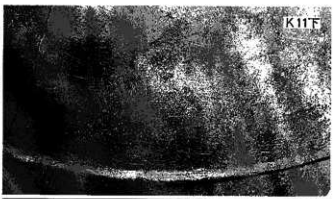

K23下

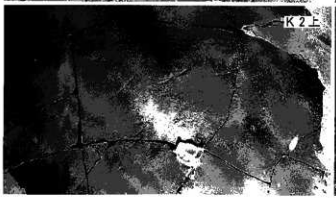
K24下


K33下


K.25 F
K.31 単
K.36 F
K.36 F
K.36 L

K 1


K11下

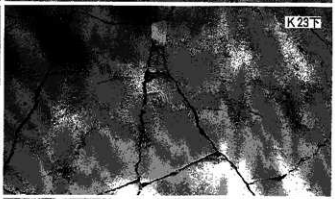

K 2上

K 17

K 3上

K21上

K 3下


K29下

K 9上

K31

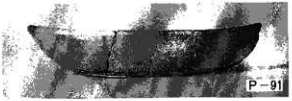
3

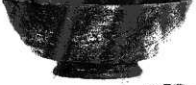
53号墓－1

53号墓－2

53号墓－3

53号墓－4

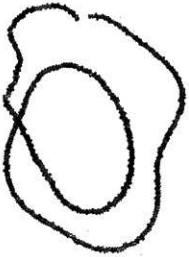


P－21

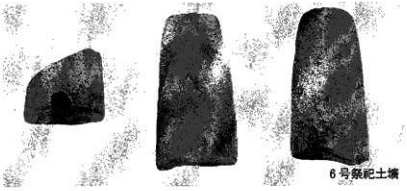
31号墓

33号墓



50号墓

23号墓



6号祭祀土壙

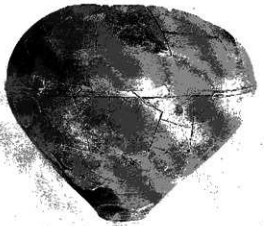
1

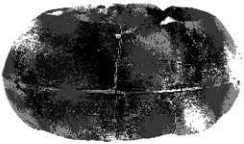
7

8

10

9


5


6

11

13

12

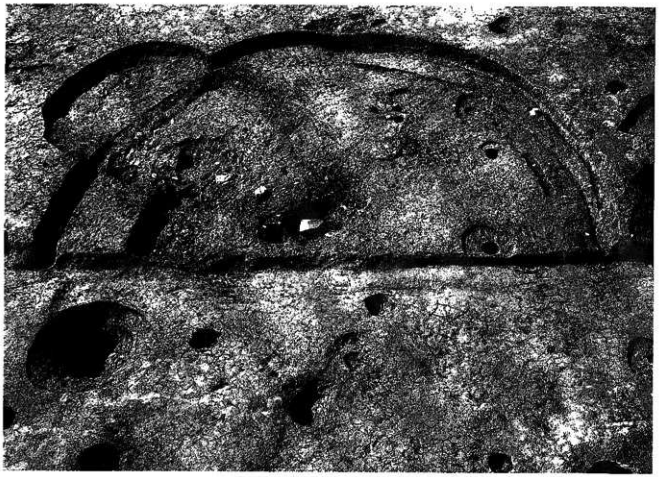
4

3

2

a．三坂七尾遺跡全景（北から）

b．1号住居・8号土坑等（東から）



a．1号住居（東から）

b．2～4号住居（東から）

a．1号土坑
（西から）

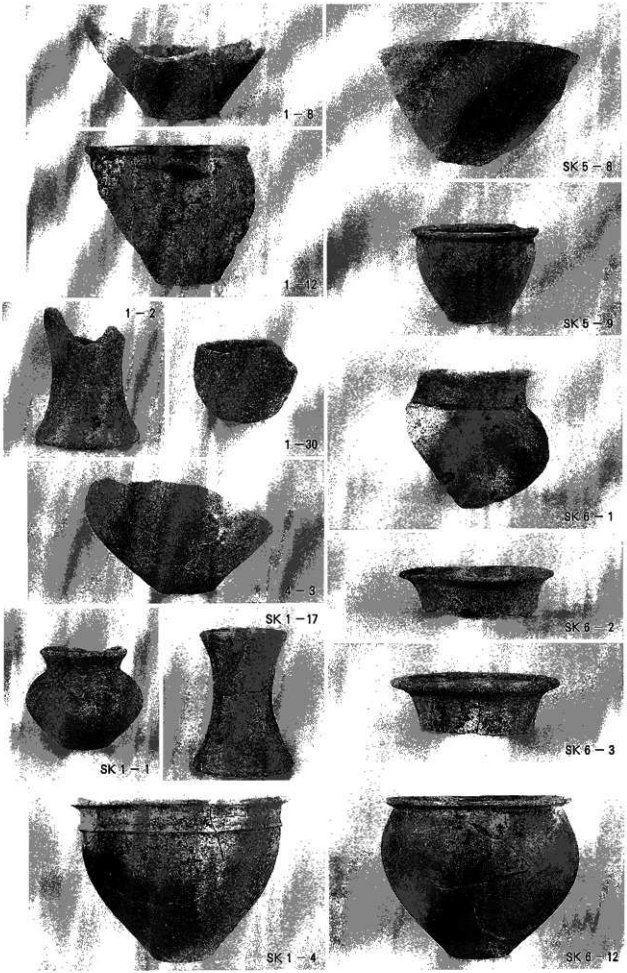
b．4～6号土坑
（北から）

c．16号土坑
（北から）

a．18号土坑（西から）

b．19号土坑（北から）

c．20号土坑（西から）


1－8
SK 5－8
1－12
SK 5－9
1－2
1－30
SK 6－1
1－3
SK 1－17
SK 6－2
SK 1－1
SK 6－3
SK 1－4
SK 6－12

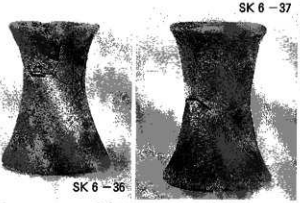
SK 6 − 8

SK 6 − 15

SK 6 − 16

SK 6 − 17

SK 6 − 37


SK 6 − 36

SK 6 − 45

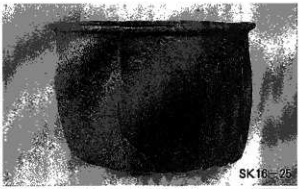
SK 8 − 2

SK 8 − 3

SK 8 − 4

SK 8 − 16

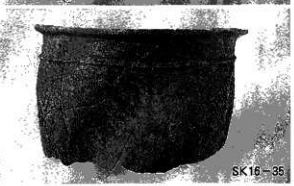
SK 9－1


SK16－25

SK12－3

SK16－30

SK12－4


SK16－35

SK16－8

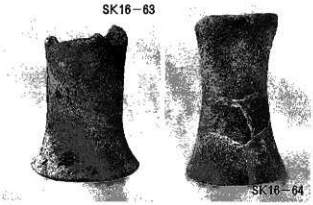
SK16－49

SK16－11

SK16－59

SK16－12

SK16－60


SK16－63
SK16－64

SK18－24

SK16－69

SK18－29

SK16－70

SK19－1

SK18－8

SK38－2

SK18－20

SK38－2

# 報 告 書 抄 録

| | |
|---|---|
| フリガナ | ミサカナナオイセキ |
| 書　　名 | 三坂七尾遺跡 |
| 副 書 名 | 前原市文化財調査報告書 |
| 巻　　次 | 第77集 |
| シリーズ名 | |
| シリーズ番号 | |
| 編著者名 | 岡部　裕俊　　牟田　華代子　　伊崎　俊秋　　比佐　陽一郎　　片多　雅樹 |
| 編集機関 | 前原市教育委員会 |
| 所 在 地 | 福岡県前原市前原西一丁目1番1号　　TEL 092－323－1111 |
| 発行年月日 | 西暦２００１（平成１３）年３月３１日 |

| フリガナ<br>所収遺跡名 | フリガナ<br>所 在 地 | コード<br>市 町 村 | コード<br>遺跡番号 | 北　緯 | 東　経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 三坂七尾遺跡<br>（第２次調査） | 福岡県前原市大字三坂字七尾719番地 | | | 33°<br>31′<br>18″ | 130°<br>31′<br>41″ | 平成11年9月20日<br>～<br>平成12年2月25日 | 1037.5m² | 下水処理施設建設 |
| 三坂七尾遺跡<br>（第１次調査） | 福岡県前原市大字三坂字七尾814番地 | | | 33°<br>31′<br>11″ | 130°<br>13′<br>29″ | 昭和56年10月6日<br>～<br>10月27日 | 900m² | 県営ほ場整備 |

| 所収遺跡名 | 種　別 | 主な時代 | 主 な 遺 構 | 主 な 遺 物 | 特 記 事 項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 三坂七尾遺跡<br>（第２次調査） | 墳　墓 | 弥生<br>中世 | （弥生時代）甕棺墓38基　土壙墓10基　祭祀土坑7基<br>（中　　世）土壙墓２基　土坑５基　柱穴 | 甕棺38基、弥生土器、黒曜石片、磨製石斧、碧玉製管玉、ガラス玉400個以上、瓦器椀、土師皿、青磁 | 弥生時代中期前半の甕棺墓、土壙墓等により構成される墳墓群。３基の甕棺墓から碧玉製管玉が出土し、特定集団墓から特定個人墓へと移行する過渡的様相がうかがえる。祭祀土坑からは広口壺、磨製石斧等が出土。 |
| 三坂七尾遺跡<br>（第１次調査） | 墳　墓 | 古　墳 | （弥生時代）竪穴住居３軒　土坑20基　ピット<br>（古墳時代）竪穴住居１軒 | 弥生土器、土師器、朝鮮半島系無文土器、石器 | |

# 三坂七尾遺跡

福岡県前原市大字三坂字七尾所在遺跡の調査報告
前原市文化財調査報告書　第77集

2001年3月31日

発　行　前原市教育委員会
福岡県前原市前原西一丁目1番1号
TEL　092－323－1111

印　刷　㈱津村愛文堂
福岡市早良区室見2丁目16－8
TEL　092－821－0173　FAX　092－831－3329